邀撃捜査線 カサンドラ・パラドクス

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邀撃捜査線 カサンドラ・パラドクス

【Nコード】

N9222M

【作者名】

義忠

【あらすじ】

2020年、東京

街中に設置された監視カメラや上空を飛ぶUAVストレージからの映像情報と、それをタイムラインに沿って蓄積・分類する大規模記録媒体とデータベース・システム、そこに次世代の産業基盤技術として開発された未来予知システムを組み込んだ究極の都市防災システム「グランドスラム」によって護られた近未来の東京で、プロの傭兵部隊と思しき謎の重武装集団による襲撃事件が勃発。

「グランドスラム」導入により犯罪発生率自体は抑制されつつも、

既存の警察機構では対処不能なほど尖鋭化するであろうと想定される重犯罪に対処すべく設立された警視庁捜査1課重犯罪邀撃捜査班、通称「カウンター・ストライカーズ」に出動命令が下った。

邀撃捜査班の新米班員の潮 由加里は、直属の上司でもある傭兵上がりの刑事・武藤 權とともに、謎の武装集団への捜査に乗り出す。

近未来ハード・ポリスアクション！

A f o r e w o r d (前 書)

実話です。

A f o r e w o r d

コムスタット：強制わいせつ犯行現場を予想

犯罪情報をデータ化して分析し、迅速な犯人逮捕などにつなげるコンピューターシステム「神奈川版コムスタット」を活用して、神奈川県警多摩署は2日、強制わいせつ事件の容疑者を逮捕した。

次の犯罪発生場所を予想し、捜査員を集中的に投入。事件発生から約2か月で容疑者を絞り込んだ。神奈川県内では初めての事例。

(中略)

「コムスタット」は、警察が運用する犯罪統計用コンピューターシステム。米・ニューヨーク市警での運用が有名で、過去の犯罪情報を分析し、次の事件発生場所を予想することなどができる。県警では昨年11月に鎌倉署などで先行導入し、今年4月に全署で取り入れた。

多摩署幹部によると、現場周辺では今年2月から、子どもを対象にした同様のわいせつ事件が約8件続いていた。このためコムスタットを使い、次の発生予想場所を半径250メートルの範囲に絞り込んだ。

この範囲で、犯行時間帯を中心に捜査員を集中投入。これまでの犯人の逃走経路などを基に監視ビデオも設置し、24時間態勢で監視にあたった。

5月、実際に子どもを狙った公然わいせつ事件が予想範囲内で発生。犯行時間前後に、目撃情報とよく似た男がビデオに映っていたことなどから、容疑者が浮かんた。菅原保署長は「今後もいろんな事件捜査に活用したい」と話している。

(2010年6月3日07時37分 読売新聞)

http://www.yomiori.co.jp/natio
nal/news/20100603-OYT1T00172.h
tm?from=yoltop

01 (前書き)

本作品はコミックマーケット78にて発売されました、サークル「カレイドスコープ」編集の王道アンソロジー作品集『NEO』に収録された『邀撃捜査線 カサンドラ・パラドクス』を基に、一部加筆修正を行ったものです。

二〇二〇年一月、東京都高尾山中

時刻は間もなく二四時を廻ろうとしている。都下とはいえ都心から遠く離れた山中は、一段と冷え込みが厳しい。年々進行する温暖化の影響で気候が乱れがちとはいえ、ここ数日の関東地方は南下するシベリア寒気団の影響で、徐々に冷え込みのきつい日々が続いている。

昼日中でさえさしたる交通量もないその寂れた林道は、この時間ともなるとぱったりと車の流れが途絶えていた。麓の灯火もとどかぬその道路脇に停められたミニバンの車中で、電子音が軽やかに鳴った。

助手席に座る壮年の男がコートの内ポケットから携帯電話を取り出す。

『対象が全員揃いました』

「判った。そのまま現場げんじょうで待機」

短く答え、背後のカーゴルームを振り返る。

「そっちはどうだ？」

「無人偵察機（UAV）が所定ポジションに到達。ストリーミング動画中継を開始。スタースライト微光画像、サーマルグラフィ熱分布画像、いずれも良好。映像廻します」

カーゴルームに組み込まれたパソコンのキーボードを叩きながら、小さなドット模様の組み合わせで構成されるデジタル迷彩の野戦服を着込んだメガネの青年が応える。

男は強い意志の存在を伺わせる瞳を細め、手元の液晶モニターに視線を落とした。そこには、一軒の山荘を上空から見下ろす画像が表示されている。

「熱源（IR）情報を重ねます」

ゆっくりとアングルをずらしながら、山荘周辺の映像に熱源を示す大小の赤い点が重ねられる。大きな点は暖房装置や車輛、小さな

点はそれぞれが人間の位置か。駐車場に駐まる一〇台ほどの車輛は、いずれも車内に人間が残っているのか熱量が落ちていない。

人間の位置を示す小さな点は、山荘を囲むような配置で屋外にまばらにいくつか。暖房と断熱材の所為か、屋内の様子はぼんやりとした熱源の塊にしか映らない。だが、少なくとも、どこの部屋に人が集まっているかは判る。見る限り、正面玄関前のエトランスと建物中央の会議室と思しき二箇所^ルに熱源は集まっていた。

「周辺状況は？」

「道路封鎖は完了済みです」

地元の警備会社に偽装の発注をかけ、山荘周辺の侵入口となる道路はすべて通行止めにしてある。

「警察、消防の動きは？」

「高尾町方面で不審火災が発生、警察・消防関係車輛はそちらに向かっています」

勿論、これもこの時間に合わせて、彼等があらかじめ仕込んだものだ。

「その他、作戦地域に接近する熱源はありません」

青年の言葉に、男は肯いて告げた。

「よし。携帯電話回線、および周辺映像を制圧」

「復唱。携帯電話回線への電子妨害（ECM）、周辺映像の制圧を開始します」

青年が手元のトラックボールを数回クリックする。

「山荘周辺での主要三キャリアの回線途絶を確認。グランドスラムへの基幹回線に介入、周辺道一二箇所^ルの公設カメラと八箇所^ルの民間カメラの動画を五分間の周回動画に差し替え 差し替えの成功を確認。各カメラ本体への電磁破壊（EMPバン）を実行 全モニターカメラの電磁破壊（EMPバン）を確認」

「通信飛行船への目眩ましは？」

「今のところ順調です。電子ビーム^{ドライバー}投射機の出力は安定、自動追尾^{モータード}装置も異常なし。通信飛行船^{コムシップ}の現在座標を正確に追尾^{トラック}しています」

「各員に通達　　」男は厳かに命じた。
「状況開始」

山荘に併設された駐車場に駐まるリムジンの車中で、在日朝鮮人キム・ジャンフン四世の金章薫は大きな欠伸をした。ボスや兄貴分が同席していればぶん殴られるくらいではすまないが、今はどちらも自分を置いて山荘の中だ。

池袋の事務所から引き上げようとした矢先に、急な会合があると兄貴分に捕まって運転手役を押し付けられ、一時間も車を飛ばして、現地についてみれば中にも上げてもらえず、こんな殺風景な駐車場で留守番だ。

本当なら、今夜は地元に新しく出来たキャバクラで、店長が用意した娘とよろしく過ごしているはずだった。それが晩飯も喰い損ねて、この寒空にこんな場所で俺は何をやっているのか。バカバカしくて欠伸のひとつも出ようと言うものだ。それにしても、何があったというのか。

ボスも兄貴分も見たことがないほど血相を変え、車中でもろくに口を利こうともしない。質問しようとするれば、「黙って運転しろ」の一点張りだった。駆け出しのチンピラならともかく、ぼちぼち組内でも中堅と見做され始めている自分を捕まえてこの仕打だ。金キムは軽くプライドを傷つけられ、苛立ちを覚えていた。

だが現地に着いて車内から周囲を見廻せば、自分達同様、高級リムジンばかり。その内、後から到着したリムジンから降り立ったのは、在日朝鮮系裏社会の大物で、表裏を問わず大きな取引量を誇る貿易会社の社長だった。勿論、自分など声も掛けられない雲上人だが、兄貴分に誘われて参加した年末の会合でちらりとだけ顔を見たことがあった。その大物氏の表情も強張り気味で、周囲の取り巻きの動きにも緊張した空気が伴っていた。

結局、ここでよほど重要な会合が行われている、ということなの

か。

しかし、何のために　と、考えかけたものの、大した思いつきも浮かばなかった。中国人や日本人の組織とはこのところ関係は良好だし、ベトナム人やロシア人もこちらからちよっかいを掛けない限り今のところ大人しいものだった。

後は北朝鮮ほたくで何か政変でも起こったか

暇に任せてつらつらと考えてはみたものの、ニュースサイトもろくに読まない自分ごときに政治向きの事情など思いつくはずもない。バカバカしくなって、考えるのをやめた。

そんなことより、例のキャバクラの店長に連絡をしなければ。今日のところは顔を出せそうもないが、近い内に再度セッティングをジャンパーのポケットから携帯を取り出して開く。アンテナは圏外を示していた。

くそ。電波も届きやがらねえ。どんだけ田舎なんだ、ここは。本当にこれでも都内かよ。

舌打ちして液晶パネルを睨みつけたそこへ、不意にどこかでガラスの割れるような小さな破碎音がした。いきなり辺りが暗くなる。

何だ……？

恐る恐る身を乗り出してフロントガラスの先を覗き込もうとする。と、今度は車外からバンという叩きつけるような大きな音がした。驚いて振り返ると、隣のリムジンのフロントガラスが真っ白に白濁し、自分同様に運転席に残っていたドライバーがシートに座ったまま大きく口を開けて天を仰いでいた。

し、死んでる……？

だが、何故だ？　何が起こっているのか理解できない。

続いてあちこちから同じような叩きつける音や破裂音、ガラスの破碎音などが次々に聴こえてくる。

「な、何だよ！　何が起こってるんだ！？」

何が起こっているにせよ、このままここにいるのはまずい。それ

だけは判った。

キイを廻してリムジンのモーターを起動しようとする。

と、サイドウィンドウが小さくこつんと鳴った。

最悪の予感に振り向けないまま、キム・ジャンフン金章薫の身体は至近距離から叩き込まれた高速ライフル弾でずたずたに引き裂かれた。

「全車輛の無力化を完了」

暗灰色の都市型デジタル迷彩の戦闘服に身を包んだ兵士は、銃口サブレッサーに制音器を装着したイスラエルIMI社製タボールAR21で最後のひとりを射殺すると、喉元に装着した喉頭マイク（スロートマイク）を声帯に押し付けながら小声で囁いた。

駐車場の外からの狙撃と、狙撃が難しい配置にある車輛には、暗闇に紛れて接近した数人の兵士達による至近距離からの銃撃によって、車輛内で待機していたヤクザ達は一気に掃討された。いずれも嚴重な防弾処理の施された車輛ばかりだったが、至近距離からライフル弾を撃ち込まれて無事な車輛用防弾ガラスなど、いまだこの世には存在しない。

冴え冴えと冷え込みを増す星明かりの下で、兵士は周囲を素早く確認した。

自分同様にプルバツプ式の全長の短いタボールAR21を手にした完全武装の部下達が、リムジンの影から姿を表し、足音ひとつ立わずに集まってくる。デジタル迷彩の戦闘服に、防弾ベストと特殊部隊などで使用される軽量の戦闘用ヘルメット。黒い難燃性のアラミド繊維で編まれた目出し（バラクラナ）帽に、戦場での跳弾や破片から目を守る防護グラス。動きには無駄がなく、いずれも隠密接近術と静殺傷法を完璧に習得した熟練兵揃いだった。

だが、制音器サブレッサーを使用しても、複数の自動小銃ライフルの放つ発砲音は決して小さくはない。ほとんど同時に行われた別働隊の襲撃により、既に屋外の警備員は塵みなしほこにされているはずだが、どこかで誰かが聞き咎

めていないとも限らない。

指揮官格の兵士は素早くハンドサインで山荘への移動を部下達に示すと、自ら先頭に立って走り出した。

兵を引き連れて駐車場から山荘に続く階段を駆け上がった指揮官は、ドアの両脇に突入姿勢で待機する二人の兵士の姿を認めた。彼等の足元には、警備役だったと思しき革ジャン姿の男が二人。首筋から後頭部に深々と軍用ナイフを突き立てて転がっている。

指揮官は差し出された小型モニターの有機EL画面を一瞥し、ハンドサインで部下達に突入時の配置を示すと、躊躇いなくドアを蹴破った。

指揮官はそのままドア前のフロアに上半身から飛び込み、床に伏せて前方に立つ男に銃撃を加える。同時に戸口の陰から銃口を突き入れた部下達が、フロア内に居合わせた男たちへ片っぱしから銃撃を加える。

各自担当象限を定められた五丁のタボールAR21から放たれた5・56ミリNATO標準SS109弾は、在日朝鮮人ヤクザ達の胸板を易々と貫き、頭蓋を砕き、高級な調度品を粉碎した。

敵の立ち位置は、先ほどの小型モニターで把握済みだ。ドアの間から挿入された髪の毛ほどに細いCCDカメラ・スコープが、屋内の様子をあまさず捉えていた。撃ち洩らしはない。

各組織でも中堅幹部級のヤクザ十数人を反撃の暇も与えず数秒で殲滅すると、兵士達は遅滞なくそのまま建物の奥へと突入してゆく。

その映像を警備室で見っていた警備担当者達は、騒然いさまとなった。
「カチコミ
襲撃だど!?」「どこの連中だ!?」

「知るか! それより早く客人を避難」

指示を出そうとした警備主任が最後まで言い終えるより先に、警備室のドアが蹴破られ、室内に丸い対人手榴弾が複数放り込まれた。意外に軽い破裂音とともに、金属スラッグの暴風が室内に捲き起こ

る。警備員達は瞬時に血まみれの肉塊と化した。

山荘の中心部に設けられた窓のない会議室では、男たちが近づいてくる銃声と破碎音に慄然としていた。

「おい、何が起こってるか見てこい！」

会議の主催者でもある禿頭の李元碩イ・ウォンソクはかたわらの側近に命じる。

肯いて会議室のドアに手を掛けようとした側近は、先にいきなり開いたドアに突き飛ばされた。

開いたドアからは、ここまで殺戮を重ねて突き進んできた兵士達が、濃い硝煙の匂いを纏まとって雪崩込む。

「な、お前ら、一体　！？」

言いかけた床の上の側近を、兵士のひとりが即座にタボールAR 21で射殺した。

驚愕する一同の見守る中、兵士達の背後から、トレンチコートを着た壮年の男が姿を表した。

がっしりとした体躯に上背のある長身のその男は、冷やかな眼差しでその場を眺め廻すと、真正面の李元碩イ・ウォンソクを見据えるように視線を留めた。

「じよ、城島……っ！」李元碩イ・ウォンソクは唸るようにその名を口にした。

「何故だ！　何故、我々がこんな目に遭わねばらん！　結果的に荷物は貴様らの手下に届いたではないか。それとも日本政府に貴様らの情報を売るとでも思ったのか！？」

「まだ売ってなかったのか？」城島はやや驚いたようにわずかに眉を寄せた。

「困るな。こちらの期待には応えてもらわないと」

「な………？」

絶句する李元碩イ・ウォンソクに、城島は溜息を付くように静かに告げた。

「まあいい。どちらにせよ、我らの武威をこの国プレゼンスに示す。貴様らはその先駆けに過ぎない」

「……………城島、貴様、いったい何の話を　？」

「殺れ」

短く口にした城島の命令に被せるように、銃声が長く鳴り響いた。

滅多やたらに銃弾を撃ち込まれて穴だらけとなった壁面を前に、警視庁捜査第一課重犯罪 邀撃捜査班ようげきに所属する潮うしお 由加里ゆかりは己の人生の来し方行く末を振り返っていた。

陸上長距離トラック競技の一芸入試で東京の女子短大に入学するために上京してきた一八の春には、警察官になることすら想像していなかった。

不景気が続きすぎてもはや当たり前になった就職難のこのご時世、目端の利く者は入学早々から就活に勤しんでいた。だというのに、刺激の少ない田舎からの上京組ということもあって、ついついいうかつかと丸一年を遊び倒してしまった。二年次になって周り中がリクルートスーツだらけになってからはたと我に返ったものの、時既に遅し。短大出の就活出遅れ女子を拾ってくれる会社などそうそうなく、企業の陸上部やスポーツクラブに入れるほどの成績も出していない。就活に使えるような資格もなく、今から慌てて取るうにもカネも時間もない。

そんなわけで、差し迫る卒業を前にもう何十社目かも自分でも判らない面接が、どうもこれまたダメなことだけは本人にもそれと判る手応えに打ちひしがれて、とぼとぼと家路を歩くその途中、ふと交番前に貼られていたポスターに目を留めたのが、およそきつかけといえばきつかけだった。

横断歩道に立つ笑顔の婦警さんが黄色い帽子を被った幼稚園児を誘導しているそのポスターを見て、小さな頃にほんのちよつとだけ婦警さんに憧れていた自分を思い出した。いや、「そういや、地方公務員って、お給料いいんだっけな」と思ったのも事実だったが。

そんなわけで、警視庁の警官募集に応募して、無事試験も突破。警察学校での一〇ヶ月間の研修期間を経て、所轄の交通課に配属

見事にミニパトに乗った可愛い婦警さんになりおおせたところまでは良かったのだが、ついうっかり自分に射撃の才能があつてしまった辺りが運命の転換点だったらしい。

それまでもちやの鉄砲すらろくに触れたこともなかったのに、するすると所轄対抗の射撃大会などに勝ち上がったしまい、「国体に出れる」「いや、オリンピックも夢じゃない」などと周囲からおだてあげられ、ついつい調子に乗ってしまった。

そう、調子に乗ってしまったのだ。調子に乗って魔が差したとは思えない。

さもなければ、うかうかとあんな「悪魔」の甘言に乗って、こんな修羅場のど真ん中に迷い込むこともなかったらう……。

悔しさに唇を噛み締めながら辺りを見廻す。

事件発生から約五時間

夜明けもまだ迎えていない現場山荘内は、険しい表情の男たちでごった返していた。近隣の所轄の鑑識班から科学捜査研究所までかき集められるだけかき集められた鑑識官達、本庁捜査一課に所轄の刑事も含め、辺りは事件現場特有の殺伐とした空気が漂っている。自分など完全に場違いとしか思えない。

というか、周囲からちらちらと浴びせかけられる視線が冷たい。いや、痛い。何か明らかに敵視されているような、とげとげしい視線をひしひしと感ずる。少なくとも、歓迎されている空気はまったくない。

邀撃捜査班はいきなり新設された組織であり、実績らしい実績もまだない。にも関わらず権限も予算も潤沢に与えられていた。既存の警察官僚機構から好意的に受け入れられる要素は皆無だった。

正直、この空気だけでも、この場から逃げ出したかった。まあ、それが叶わないのを理解できる程度には社会人経験があるので、心の中でそつと涙を拭うだけに留めたが。

重いため息ひとつで眼前の穴だらけの壁面に視線を戻す。そこには、床にへたりこんだ人間の輪郭が白いテープで描かれていた。そ

れに合わせるように、壁面と床には赤黒い血の跡がべったりと残っている。遺体は既に屋外に運び出された後だが、ほんの数時間前、確実にこの場所で人の命が喪われたのだと考えると、陰鬱な気分になる。

いや。警察官たるもの、悲惨な事件現場に立会うことも、職務の一部だ。

だが、何十人もヤクザが一夜にして機関銃で塵にされるような事件は、もう警察の担当領域ではない気がする。ましてや自分のような、交通課上がりの新米婦警が首を突っ込むような事件ではないと思う、のだけでも。……。

脳裏を去来するそうした諸々の想いがざっとほぼ一周した挙句、由加里の思考は最初の位置に立ち戻った。

「……なんで、私、こんなところにいるんだろう……？」

「それは、ここがお前の職場だからだ」

虚ろな視線で壁を見つめ続ける由加里の耳元で、どすの利いた男の声が囁く。

「なっ!?!? 警部？」

引きつった表情で振り返った由加里は、むっつりとした表情で立つ大男 彼女の「悪魔」の存在に気づいた。

武藤 權 由加里の上司であり、彼女をこの絶望的な境遇に引きずり込んだ張本人である最悪の「悪魔」たるその男は、頑強そうな広い肩幅にスーツをラフに着こなし、その上にカラスのように漆黒のコートを羽織って、一八〇センチの長身からこちらを見下ろしていた。歳の頃は三〇代後半。癖の強い長髪に覆われた頭部から投げかけられるその視線は、「悪魔」というより「魔王」の傲岸さで蒼褪める由加里を一瞥する。

「手前の益体もない人生なんかどうでもいい。この壁の有様から、お前が読み取った情報は何だ？」

「はい。えつと……、犯人は機関銃を使ってます」

「どアホう」武藤はばしんと手元のクリップボードで由加里の頭を
はたいた。

「そんなものは誰が見たって一目で判んだらうが！」

「……痛い……警部、マジで叩きましたね？」

叩かれた頭を押さえつつ、涙目で恨みがましく見上げる由加里に、
武藤はさらに繰り返しその頭をぶっ叩いた。

「うるせえ！ このマジマジな状況が手前には目に入らねえのか？
何寝惚けたこと言っただやがるんだこのアホたれ！」

「痛い、痛い！ 判りました、真面目にやります！」

「ひいいと悲鳴を上げ、改めて穴だらけの壁面に視線を向ける。

と言っつて、さっき口にした以上の何かを読み取れるわけでもない。
救いを求めるように恐る恐る武藤の顔を見上げる。武藤は苛立つよ
うに舌打ちして、告げた。

「まず弾痕の大きさ」

「はい」

「壁の表面を大きく抉らず、すっぽ抜けてる。初速が早い弾種だっ
た証拠だ。弾速の遅い拳銃弾では、壁の表面で運動エネルギーを散
らして、大きく抉るような弾痕になっていたはずだ。おそらくは高
速なライフル弾を使用している。そしてこれだけまとまって弾がば
らまかれてるっつてことは、お前が言うように自動火器による集中射
撃であることは間違いない。犯人はフルオートでの射撃が可能な自
動小銃を使用していることになる。」

次に弾着の位置。

撃たれた時の被害者の立ち位置から想定して、撃ち込まれた銃弾
はすべて胸から腹の位置に収束している。ここに残っている弾痕の
数からして、複数の銃からの発砲なのは間違いない。にも関わらず、
これだけ同じ場所に弾着が収束しているということは、犯人達の射
撃の練度が高い水準で統一されていることを示している。

更にいえば、銃弾の壁への入射角だ」

武藤はボールペンの先を壁の弾痕に突っ込んだ。ボールペンは壁に垂直ではなく、わずかに斜め下に傾いだ形に刺さる。

「……斜め下……？」

「そうだ。この入射角からすると、その後ろの通路の角　それ
もかなり低い位置から撃ち込まれている。何故か判るな？」

由加里は嫌そうにその問いに答えた。

「……敵に見せる正面面積をなるべく小さくするため……」

競技射撃ではいざ知らず、軍隊組織では堂々と敵に身体を晒しての発砲はバカのやることだとされる。ほんの少しでも遮蔽物の陰に身を隠し、低い姿勢から撃つように叩き込まれる。それはつまり、敵から撃ち返されたとき、わずかでも弾に当たる面積を小さくするためだ。

ヤクザや警察なら「敵からの反撃」をそれほど意識しなくてもいいかもしれない。むしろ相手を威嚇するために、身を乗り出してこちらの存在をアピールする必要がある場合さえある。

だが、「戦争」を商売とする軍隊では、「こちらが殺されずに、
相手を殺す」ことがまず第一に求められる。それを合理的に追求し
尽くした運動を、兵士は骨の髄まで徹底的に教育される。

つまり、犯人は高性能の自動小銃で武装した「専門家」　それ
も個人として「専門家」であるだけでなく、部隊組織として「専門
家」として訓練され、編成されていることが、この穴だらけの壁を
見るだけで判ってしまう、ということだった。

……いや、もう、こんな知識、ミニパト婦警には一生無縁な知識
のはずだったのだが。武藤の説明を理解できてしまう、今の自分が
たまらなく嫌だった。

それもこれも、今現在勤務中のこの部署　邀撃捜査班に着任す
る直前まで、六ヶ月も陸上自衛隊第一空挺団、通称習志野空挺団に
交換研修生と称して放り込まれるという、異色のキャリアを持たさ
せられてしまった際に無理やり身につけさせられた知識である。

「……あたし、これからどうなっちゃうんでしょうか？」

思わずこぼれる愚痴に、頭部へのクリップボードの一撃が返ってきた。

「知るか」武藤が冷ややかに告げ、クリップボードを由加里の胸元に突きつけた。

「しつかり現場検証に参加して、気づいたことを後でレポートにまとめて提出しろ。腑抜けたレポートを出しやがったら、ただじゃ済まねえと思え」

ひいと小さく悲鳴を上げる涙目の由加里に背を向け、武藤はその場を離れた。

そこへ、

「やあ」ハンチング帽をかぶった小柄な老刑事が武藤に声を掛けた。「外は冷え込むね。中に入ると生き返るよ　ま、ここが何十人も殺された現場かと思うとぞっとしないが」

「劉は？」

老刑事　元捜査一課のベテラン刑事で、退職後の今は嘱託職員として邀撃捜査班に籍を置いている久住裕次郎くすみ ゆうじろうに、武藤は一緒に行動していたはずの中国人捜査官、劉秀英リウ・シュウエイの所在を訊ねた。

「もう少し外の様子を調べて廻るそうだ。日本人よりよほど真面目だよ、今時の中国人は」

「あいつはあの若さで香港警察特捜部（CID）出だ。本国でもバリバリのエリートですよ。中国人がみんなあだつてわけでもないでしょう。」

それより、機捜の方はどうです？」

「話をつけてきた。以前、所轄で面倒を見てやった奴がいてね。公式の報告以外に、後で個人的にいろいろ話を聞かせてもらえそうだ」

機捜こと機動捜査隊は、警視庁刑事部捜査第一課に所属する部署で初動捜査を専門に担当する部隊である。事件発生直後の関係者の記憶がもつとも鮮明な時間帯に聞き込みなどを行い、集めた情報をその後開設される捜査本部に引き渡す。本来なら同じ捜査一課に所属する重犯罪邀撃捜査班とは全面的な協力関係にあっても不思議

ではないのだが、諸々の事情で現実はむしろそれとは真逆な関係にある。

勿論、機捜が捜査本部に提出する公式の報告書ならいくらでも入手可能だが、得てして重要な情報とはそこからこぼれたものの中に埋まっている。

そこで久住に機捜隊員達に接触させ、非公式に話を聞く機会を作らせたのだった。

「ま、あくまで俺が『個人的に話を聞く』という体なので、お前さんや新庄管理官には遠慮してもらおうことになるが」

「充分です。助かります」

武藤は軽く頭を下げる。

『警部、結城です』耳穴に挿入された小さなヘッドセットから若い男の声が聴こえてきた。

『周辺地域のカメラから画像を押さえました』

「何か映ってたか？」

襟元に付けたネクタイピンほどの小ささの喉頭マイク（スロートマイク）を押さえながら、回線越しに虎ノ門の本部にいる電子情報担当の結城武史ゆづき たけしに問いかけた。

『ダメですね。どれも事件発生の直前から五分間のループ映像を繰り返しています』

『通信飛行船からの映像はどうだ？』

通信回線需要の高まりによって、数年前から東京上空二万メートルに三隻の通信中継用の飛行船が常時浮かんでいる。単純に通信衛星を打ち上げるより安上がりだからでもあったが、そこに防災対策と称して対地観測用の高画質（HD）映像カメラや各種センサーを積み、二四時間常時、全天候で地上を監視できるようにになっていた。

『それなんですけどね』結城は苦い口調で答えた。

『ちょうど事件の間だけ、それも現場上空だけに妙な「雲」が発生していて、地上の様子が判別できません』

「雲？」

事件当夜の天候は快晴だったはずだ。

『勿論、自然現象じゃありません。天候に左右されない合成開口レ
ーダー（SAR）画像にまで「雲」が映ってるんですから』

「クラッキングで書き換えられた……？」

『いやどうですかね。 グランドスラム のセキュリティはそんな
に甘くないはずだし、それなら一次情報が機材側の記録媒体デバイス
ストレージに残り
ます。でも、いろいろ当たって見る限り、一次情報段階から妨害を
受けてるようですね』

「電子妨害（ECM）……か」

『それも、おそらくどこかの大国の正規軍クラスの技術と装備を使
った、かなり本格的な奴です。一応、上に掛けあつて情報収集衛星
（IGS）からの映像が廻してもらえないか訊いてみるつもりです
が……』

「まあ、無駄だろうな」

『ですね』 あつさり^とと結城は認めた。

情報収集衛星（IGS）の所管は、内閣直属の内閣情報調査室（
内調）に属する内閣衛星情報センターで行われている。その利用は、
関係省庁の局長クラスで構成される運営委員会による事前審査でし
か受け付けていない。仮に犯行時刻に都合よく上空を飛んでいたと
して、今回のように後から映像が欲しいと申し立ててもまず何も出
てこないだろう。

『引き続き、本部での打ち合わせまでに情報を掻き集めておきます』
「判った。頼む」

回線を切つて黙り込む武藤に、久住が声を掛ける。

「あんまり芳かんばしくないようだね」

「どうも、そんな感じですよ」

「で、結局、何人死んだんだ？」

「ここまでに確認できている限りでは、四四人」武藤は抑揚なく口
にした。

「内二人は、この山荘の管理人だった五〇絡みの老夫婦でした。離

れにいたのを引きずり出されて射殺されたようです」

「……犯人はのんきに家探しまでしていったってのかい？」

「おそらく熱か音で機械的にスキャンして見つけたんでしょう。見つけるまでに大して時間は掛けてないと思います」

「よくよく金廻りがいいようじゃないか、犯人は」

久住は吐き捨てるように言った。

「しかし、何を考えてるんだかな。人ひとり殺しても、一生うなされる奴もいるつてのに。ヤクザとは言え、よってたかって、こんなに大勢を殺して」

「牛や豚の夢でうなされる奴は、肉屋にはいません」

武藤は素っ気なく告げた。

「『肉屋』……ね」

久住は目を細めて武藤の仏頂面を睨んだ。

「あんたはこれが本職の『肉屋』の仕事だと思つとるわけだ」

「間違いありません」

「やれやれ。いつからこんなに物騒になっちまったんだ、この東京まちは」

久住はハンチングを取つて溜息をついた。

「で、あちらのお嬢ちゃんが今度来る新人かい？」

「そうです」

肯く武藤と久住の視線の向こうで、へっぴり腰で現場をうろつく由加里が、年配の鑑識官に怒鳴られペコペコと頭を下げていた。

「……大丈夫なのかね？ どう見てもそこらの普通のお嬢さん、という感じにしか見えんが」

「『そこらの普通のお嬢さん』がこんな場所にくるわけがないですよ」

「……………」

無言でまじまじと武藤の顔を眺めた久住は、再び溜息を洩らした。

「あれも『肉屋』にしちまうつもりかね？」

「まさか」武藤は薄く口元を歪めた。

「元から、ですよ。あいつも」

「……まったく持って、やれやれ、だな」

「……………」

久住が肩を竦めるその横で、武藤は凍てついた視線で由加里の背中をただ睨み続けていた。

02 (前書き)

ご無沙汰しております。

すっかりお待たせしましたが、本日から本格連載開始です。

とりあえず、今日明日更新の「02」「03」の会議編です。

知り合いからは「読みづらいわボケ」と言われてしまいましたが、結局、大して直してません（ははは）。

え〜っと、専門用語ばかりで読みづらいかもしれませんが、頑張ってます。着いてきてください。お願い（涙目）。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「まず事件概要から説明する」

薄暗い会議室の正面に据えられた、六〇型の大型3Dモニター。それと相対する上座の席に座る、新庄克也しんじょうかつや警視 警視庁捜査第一課重犯罪邀撃捜査班の指揮官は、胸を張るかのような堂々とした姿勢で告げた。細身の眼鏡がモニターの光を反射して、表情までは読み取れない。

「事件発生推定時刻は昨深夜〇時。都下八王子市高尾山中の山荘が銃火器で武装した何者かによる集団に襲撃され、そこに居合わせた在日朝鮮人系犯罪組織の幹部、構成員を中心に四四人全員が殺害された」

「……………」
 今時、自然災害だって、一度にここまで大勢の屍者は出さない。やっぱり警察の仕事じゃないんじゃないかなるか。

そう胸で呟きながら、由加里はそつと周囲の様子を伺った。モニターを正面にコの字型に配置されたテーブルの上座には、いかにもパワーエリート然とした趣おもむきの新庄。横には、それとは対照的に、「ドレスコードなので仕方なく付き合ってるのだ」といわんばかりにだらし無くスーツを着崩した武藤が仏頂面で腕を組んでいる。

その横 由加里から見て正面斜め前の席に薄いノートパソコンを開いて座る車椅子の青年が、電子情報収集と技術支援担当の結城ゆづき武史たけし。スレンダーな体躯にこざっぱりとした私服を着こなした眼鏡男子で、歳の頃は見たところ二〇代前半。昨日の着任の挨拶時に聞いた話だと正規の警察官ではなく嘱託職員。

更にその横、由加里から見て正面の席に座るのが、久住裕次郎くすみゆうじろう。いかにも人の好きそうな近所の小柄なお爺ちゃんといった風情で、こちらも嘱託職員。もっとも、前歴は一刑事として警視庁捜査一課

を定年まで勤め上げ、現役時代に取った警視総監賞は一ダースを下らないという「伝説の刑事」とまで謳うたわれた人物だ。昨日の着任時には本部に不在で挨拶できなかつたが、今朝の現場で初顔合わせとなった。

そして由加里の隣、上座側に座るスーツ姿の青年が、劉秀英。リウ・シュウイン香港警察特捜部（CID）からの出向で警視庁に赴任してきているとかで、やや童顔ながら短くカットした髪にすっきりとした華流スターばりの顔立ち。多少幼く見えるが年齢は三〇歳。昨日少し話した限りでは、日本語の発音もネイティブ並に危なげがない。

スカウト時から教官役の武藤も含め、ここまでは既に顔合わせ済みの面子だったが、よく判らないのが、由加里の左隣り、モニター寄りの末席に座る白衣の美女だ。

肩より下まで伸ばした黒髪に、ちょっと日本人離れした肌の白さで、目鼻立ちもくつきりとしている。瞳の色も少し青みがかつていたような気もするが、あまりまじまじと観察する前に会議が始まって部屋の明かりを落とされてしまったのでよく判らない。あるいは欧米人との混血ハーフなのかもしれない。

白衣の上からもはつきりと判るくらいボディラインも見事で、脚もすうりと長い。日本人離れ云々以前に、ファッション誌のモデル並みのプロポーションだ。……とかくそちら方面の資質に著しく欠くと評価されがちな由加里にしてみれば、世の中の理不尽さを物理的に煮詰めて具現化したかのような存在だった。

挨拶も事前情報も抜きで、ついさつきいきなり会議室に駆け込んできたこの彼女だけが、何者なのかよく判らないままだった。

しかも定刻になっても始まらなかった会議が、一〇分押しで駆け込んできた彼女の到着を契機に始まった。よほどの重要人物らしいおまけに詫びの文句もなし。席についた彼女の「始めてちょうだい」の一言で会議が始まったのだったが、あの武藤ですら嫌味のひとつも口にしないというのは、よくよくのことである。由加里が同じことをしていたら、二丁三発ぶっ飛ばされるくらいでは済まないだろ

う。

そのくせ新庄の説明をあまり気を入れて聞いている様子もない。入室時に持ち込んだバインダーを開いて、ぱらぱらと挟んだ書類をめくったり、時折、何かを書き込んだりしている。そのことに気後れしているふうもなく、いきなり参加した会議で堂々とくつろいでいる感があった。

何しに来たんだ、この人……？

気になってそちらをちらちらと見ていたら、不意に背筋を悪寒が走り抜けた。

はたと我に返って顔をあげると、武藤が氷点下の目線でこちらを睨みつけていた。

「……………」

例によって、後でどんな目に遭わされるかを想像し、暗澹たる気分につき落とされる。

おかげで、確かに隣の謎の美女のことなど、どうでも良くなりはしたが。

事件発生から一二時間後

警視庁のある桜田門にほど近い、虎ノ門界隈。独法（独立行政法人）のいくつかが雑居するいわゆる「独法ビル」のひとつに居を構える重犯罪邀撃捜査班の本部会議室にて、主要スタッフを集めての捜査会議が開かれていた。

「捜査会議」と言っても、正規の捜査本部は警視庁捜査一課主導で現場最寄の高尾署に設けられている。だが、そこへの参加は丁重に断られており、そっちの捜査会議からは完全に締め出されてしまっていた。ただでさえ警備部（公安）からも人員をねじ込まれたいびつな編成となっているところへ、得体の知れない新参加者が首を突っ込む隙間はない、ということらしい。

邀撃捜査班は形式上、捜査一課の預りとなっている組織だったが、

本庁庁舎内に本部を置かせてもらえなかった時点で、その扱いは推して知るべし。事実、一課課長に報告義務もなく、国家公安委員長に直接報告と指示を仰いでいる。既存の警察官僚機構からすれば、身内の皮を被った外部から侵入者エイリアンも同然だった。敵視と排除の対象でこそあれ、決して身内ではない。

もつともその代わり、捜査会議の録画データと議事録に目を通す権限が彼等には与えられていた。各捜査官が警視庁の捜査支援データベースにアップロードする資料にも、フルアクセスの権限が与えられている。鑑識結果は捜査本部と同じものがほぼ同時に届けられることになっているし、何より グランドスラム への優先アクセス権がある。それこそが、既存の警察機構から蛇蝎のごとく嫌われる、最大の理由でもあったわけだが。

勿論、そうした電子的な情報収集の網からこぼれ落ちる情報があるにしても、既存の警察官僚機構とは異なる手法で捜査を行うことを求められている彼等邀撃捜査班にとっては、必ずしもそれは致命傷とはなりえない。

この場に集まった遊撃捜査班の主要メンバーは新庄を含めわずか七人。その内、ひとり是由加里の隣りに座る正体不明の白衣の美女で、ここで彼女を頭数に入れてしまつていいものかどうか、由加里には今ひとつ判断がつかなかったが、だが、元よりこの人数で地道な地取り捜査や戸別訪問作戦ローラーなぞ望むべくもない。大勢の捜査員を動員しての人海戦術が効果がある場面では、正規の捜査本部がその役割を果たせば良いのだ。少数精鋭の遊撃部隊には、それなりの戦い方がある。

それぞれ特異なキャリアの捜査員達が力を合わせれば、大人数の捜査本部の鼻を明かすことだって不可能ではないだろう。

……もつとも、その「少数精鋭」に自分が含まれていることが、いまだまったく腑に落ちていない人間も、約一名、この場に参加していたりもしたが。

そんなごくごく一部の困惑をよそに、新庄は概要説明を続ける。

「被害者の内、事件当夜のこの集まりを主催したのが、横浜で貿易業をフロント企業として営む李元碩^{イ・ウォンソク}」

モニター画面上に、浅黒い肌に禿頭の中年男 李元碩^{イ・ウォンソク}の顔写真が表示される。

「外事二課（警視庁公安部外事部二課）に保護を求めて逃げ込んできた李元碩^{イ・ウォンソク}の部下の話によれば、北朝鮮本国政府高官の口利きで、組織の息の掛かった貨物船が、アフリカ・ソマリア北部の港湾都市ボサソでコンテナ三基を積み込んで日本まで運び込んだのが昨年暮れ。新潟で荷降ろしした時点で、本国からの指示があり、封印された積荷のひとつを開いたところ、大量の銃火器が満載されていたことが発覚した。

本国政府からの指示は『そのまま公安当局に通報し、手を引け』というものだったそうだが、李元碩^{イ・ウォンソク}はこれを無視した」

「アホだ」武藤が呆れきった口調で呟く。

新庄は無視して続けた。

「李元碩^{イ・ウォンソク}はレアメタルの先物取引で、本国から預託されていた資金に数億もの大穴を開けていた。おそらくその穴埋めを狙ったのだろう。荷主への引渡しを拒否し、料金の再交渉を行おうとしたらしい。

だが、荷主の逆襲に遭って、コンテナは強奪された。

そしてその際に犯人側に誘拐された幹部の生首が、横浜の李元碩^{イ・ウォンソク}の事務所に届けられたのが昨日。口には『戦線布告』の一文を書いた紙が突っ込まれていたそうだ。

慌てた李元碩^{イ・ウォンソク}は在日朝鮮人系の各組織に連絡をとり、緊急の対策会議を招集した」

「で、その場所の情報が洩れていた、と」
武藤がつまらなげに口にする。

「そのようだな」

「捲きぞい喰らって殺された奴らはいいい面の皮だな」

「その荷主は一体何者なんですか？」

劉^{リュウ}が訊ねる。

「不明だ。元々は本国から持ち込まれた話で、詳しい話は誰も聞かされてなかったらしい。途中で契約が反故にされた理由も不明だが、何等かの形で犯人側の正体に気付いたのかもしれない」

「待つてください」劉リュウは疑問を口にした。

「犯人の動機は何なんです？ 積荷のことで李元碩イ・ウォンソクの口を封じるためにやったにしては、筋が通りません。他の組織の幹部まで捲き添えにして彼を殺しても、その実、こうして日本の公安当局は李元碩イ・ウォンソクの部下から情報を入手しています。」

李元碩イ・ウォンソク本人だけでなく、在日朝鮮系犯罪組織全体に対する攻撃が目的だったのでしょうか……？」

「劉リュウよ、だとすれば、なおのこと犯人は何者だって話になるぜ」

武藤が不敵な笑みを浮かべて訊ねた。

「それは……？」

「彼等、在日朝鮮系組織は、北朝鮮本国政府だけでなく、日米韓の各国政府の暗黙の承認を受けて存在していた」

困惑する劉リュウに代わって、新庄が説明する。

「承認……？ でも暴力団なんですよ？」新庄の言葉を理解できず、由加里が首を傾げる。

「北朝鮮は前指導者、金正日キム・ジョンイルの死後、中国政府の承認を取り付けた三男の金正恩キム・ジョンウンが跡を継いだが、内部では中国政府の後盾を経済官僚団と核兵器を持つ軍との間で常時、熾烈な権力闘争が行われており、情勢は常に流動的だ。」

事実上の核保有国である北朝鮮国内で今現在、どの勢力が権力を掌握しており、何を考えているのか、周辺国としては看過し得ない。それを知るためのチャネルとして、彼等在日朝鮮人のアンダーグラウンド組織が機能していた。彼等は本国政府から見れば貴重な外貨の稼ぎ手であり、西側諸国政府との非合法な接点であり、技術や資源の調達手段だ。本国政府中枢による深いレベルでの管理と支配を受けている。

それは逆に言えば、彼等を監視していれば、北朝鮮政府中枢の動

静を掴むことができるということでもある」

「……いや、でも覚醒剤とか武器とか密輸してる組織なんですよ？ 前にテレビの報道番組でも」

「アホう」武藤が呆れたように由加里に言った。

「そんなこたあ、百も承知なんだよ。そんなの全部織り込み済みで、それでもメリットの方が大きいからあいっすら目こぼしされてたんだろっが」

「いや、でも……」

「彼等からもたらされる情報の精度は高く、そのお陰もあって、我が国の北朝鮮情勢分析は古くから評価されてきている。少なくとも日米当局による北朝鮮情報の分析は彼等の存在に大きく依存していた。また拉致問題に依然として解決の目処が立たない以上、北朝鮮と日本はこれからも当面は国交断絶状態が続くと見ねばならない。

そんな状況で外交のバックチャネルとして機能する彼等を潰すわけにはいかない。それが、彼等の存在が黙認されていた理由だ。

更に言えば、昨夜殺された連中は、いずれも日米韓の軍・公安・諜報機関のどこか、あるいは複数の息の掛かった貴重な『資産』^{アセット}たちだっ

た」

カウンターパート

「ま、対応窓口になつてる連中にとつても、立派な『利権』だしな。パチンコ業界に毎年何人警察から天下つてるんだって話だし、そういや、十年位前に公安調査庁のお偉いさんが絡んだ汚職疑惑もあつたよな」

めちやくちやな話だった。組織の持ち込んだ覚醒剤や拳銃で傷つく人たちのことは、どうでもいいのか。その問いが喉まで出かかったが、結局、由加里は黙って呑み込んだ。そつと周囲を伺うが、動揺しているのは自分ひとりらしい。皆、当たり前話を聞くかのように平然としている。この場に常識人はあたしだけか？ ますますもつて己の存在の場違い感が募^つってゆく。

「その辺にしておけ」新庄が無然とした口調で武藤を黙らせた。

「いずれにせよ、自分から好んで己の『資産』^{アセット}を潰したがるバカは

いない」

「……………」
由加里の困惑を遮るように、久住が口を開いた。

「しかし、となると、犯人は当局の対北朝鮮チャネルを潰して得をする人間ってことかい…………？」

「あるいは、『それで困る人間の面が見たい』ってだけなのかもしれませんね」

意地の悪そうな笑みを口許に浮かべながら、武藤が指摘する。

「結城」新庄が告げた。

「鑑識結果と電子情報関連についての報告」

「はい」

結城は肯いて手元のノートPCのマウスをクリックした。

「まず犯人側の推定人数について。」

現場に遺された靴跡から犯行に直接関わったのは一六名前後、この内、屋内に侵入したのは六名前後と考えられます。犯人側と思われるほとんどの靴跡がイスラエル製の軍用ブーツで、ひとりだけ米国製ハツシュパピーのビジネスシューズ。これは被害者のいずれとも合致しないことは確認済み。またサイズからほぼ全員が男性だったと推測されます。

その靴跡から推測される犯行時の犯人達の動線がこちらです」

3Dモニター上に犯行現場である山荘の透過図と周辺の地形図が表示され、小さな黄色い靴跡のマークと被害者の位置とおぼしき赤い点がマッピングされてゆく。

画面左 北が上なので、西から侵入した犯人グループは山荘周辺に配置された警備要員六人に背後から襲いかかって殺害し、そのまま山荘を包囲。一方、画面下、南から侵入した一隊は駐車場の車輦に居残ったヤクザ一〇人を殲滅すると、一部が山荘に突入。玄関前のエトランスに居合わせた一人を射殺。そこから一〇二人が分派して警備室を襲撃してその警備要員三人を手榴弾で殺害。それ以外の人間は迷うことなくまっすぐに山荘中央部に向かい、途中で

居合わせたヤクザを射殺しながら李元碩等イ・ウォンソクのいる会議室に雪崩込んでその場の全員一二人を殺害。その間に屋外で待機していた要員の一部が、離れの別棟にいた管理人夫婦を外に引きずり出して射殺している。

最終的に確認された被害者数は四四人 一度に発生した殺人事件としては未曾有の数であり、しかも首都近郊で発生したこの大事件に、警視庁のみならずマスコミも震撼し、テレビは各局とも朝から特別報道態勢を敷いて大騒ぎになっている。

「しかし、本件が極めて特異な理由は、犠牲者数や自動火器の多用だけに留まりません。本件は高度な準軍事作戦として計画、実施された形跡があります」

「ぱらみり……おへ……？」

結城の使う言葉について行けない由加里が思わず呟く。気にする様子もなく、結城はそのまま説明を続けた。

「たとえば犯人に関する画像情報が一切回収されていません。ご存知の通り、五年前に施行された防犯カメラ設置規制法によって、公設カメラや公道に面した場所に配置されたカメラには、大規模都市防災システム グランドスラム への画像データ提供が義務付けられています。本来であれば、これにより犯行現場に乗り込んだ犯人グループの車輛の特定や、あるいは運が良ければ犯人の外見や容貌などの画像が得られたはずです。

しかし、周辺道に配置された公設カメラ、民間カメラともに事件発生の少し前から五分間のループ画像に差し替えられていました」

「 グランドスラム クラッキング が侵入されたのか？」

新庄が眉をひそめて訊ねる。

「いえ、そこまではまだ断言できません」 結城は首を振った。

「今のところ判っている範囲では、近くの共同溝内に設けられた、周辺カメラの画像データを束ねているハブとルータが侵入クラッキングされたようです。共同溝が開いた際に鳴るはずの警報も、回路をバイパスされて無効化されていました」

「デバイス側にデータが残ってるはずじゃないのか？」

武藤が訊ねる。

防犯カメラ設置規制法では、カメラ本体内にも記録媒体ストレージを設け、そこに最低七二時間分の画像データを保存することが義務付けられている。武藤が口に行っているのはそのデータのことだ。

結城は再び首を振った。

「だめです。事件発生前に各カメラを巡回して強力な電磁石を設置していった人間がいます」

「電磁石？」

「こんなやつです」

結城がクリックすると、モニターに円筒形の部品の画像が表示された。

「大きさは五センチくらい。こいつの内部部品自体、既に焼き切れてはつきりしたことは判りませんが、バッテリーと強力な電磁パルス発生装置が内蔵されていて、外部からの始動信号を受けると電磁パルス（EMP）を発振し、瞬間的な過電流で電子回路を焼き切る仕掛けらしいです。」

警官とメンテナンス業者を装った二人組が、事件前にミニバンで辺りを巡回して、こいつを仕掛けて廻ってました」

「何者なんだ？」

「判りません」久住の問いに結城は首を横に振った。

「捜査本部の方で似顔絵を作ってるそうなので、その内、何か見つけてくれるかもしれません。現時点ではおそらく犯人側の一味と以外以外はまったく不明です。カメラ本体の記録媒体ストレージもこいつで焼かれてますし、彼等が巡回を始めた時点で周辺地域のグラブドスラムへの画像も乗っくら（インターセプトさ）れてしまっており、それらしい画像も残っていません」

「……通信飛行船コムシップからの地上監視映像は？」

「それも、問題のひとつです。これを見てください」

新庄の問いに肯き、結城はマウスをクリックした。

モニターに山荘周辺の地域を上空から俯瞰で写した夜間映像

だが、山荘の周囲は白い雲のようなものに覆われており、下の状況が判別できない。

「これが光増幅映像、次に熱分布画像、さらに合成開口レーダー（SAR）画像です」

次々と表示された映像のいずれにも、白い雲が映っている。

「ご覧のように、すべての画像にこの白い雲が写っていて下の様子が判りません。勿論、人工的なものです。昨夜の関東上空はシベリア寒気団の影響で見事な快晴でした」

「どうということなんですか？」

劉の質問に、結城は困ったような表情で答えた。

「判らない　ではさすがにまずいので、一応、調べましたよ。それで出てきたのが、これです」

結城がマウスをクリックすると、モニター上に中国語の標記の入った荒い画像で、移動レーダー車のような画像が表示された。

「いろいろ探しまわった結果、何年前かに香港の軍事系サイトに掲載された記事を見つけました。中国軍が米国の偵察衛星に対抗するために開発した装備だそうで、地上から電子ビームを打ち上げて衛星のカメラにノイズを載せるという理屈みたいですよ」

「……こんなでかい代物を持ち込んだってのかい？」

呆れたような久住の声に、結城は慌てて否定した。

「いや、違いますよ。衛星軌道上の偵察衛星を相手にするのと違って、上空二万メートル程度を飛ぶ通信飛行船を狙うなら、ここまでの大きさはいらぬはずですよ。そもそもこいつは想像上のイメージ画像ですし、中国政府が公式に存在を認めたくてもありません。正直、胡散臭い話ではあるんですが、実際に残された画像を見る限り、この手の技術でも使ったんじゃないかと思われます、という話です」

「結城、実際に犯人グループがそいつを使ったとして、大きさはどれくらいで、操作要員は何人必要になる？」

武藤の問いに、結城は眉間に指を添えながら探るように答えてゆく。

「うーん、ここ最近、バッテリーの小型化が進んでるし、さっきも言ったように高度二万くらいの標的を狙う程度なら車載程度の大きさの発振器で足りると思うので、運転手と機材の操作要員で最低二人

人
「通信飛行船の座標はどうやって追跡する？」

武藤が重ねて訊ねた。

「あらかじめ飛行計画が出てますから、航空管制の情報を入手できればいけるんじゃないですか？ まあ、専用機材は必要になりますけど」

「上空で風に流されれば、座標がずれるぞ」

「『電子ビームで狙い撃ち』といってもそんなピンポイントに収束させなくてもいいはずですよ。上空である程度拡散しても。」

それでも、やっぱりレーザーで追跡する必要はあるかな。でも、ある程度、方角が絞り込めてるなら、そんな広域の搜索能力は必要ないだろうし、レーザー出力はそれほど強力じゃなくていいとして……。レーザーと電源はトラック一台に収められるくらいのサイズ。これも運転手に機材操作員が最低でももう二人」

「武藤、何が言いたい？」

考え込む結城をよそに、新庄が訊ねた。

「犯人グループの規模だよ」武藤は指摘した。

「現場の突入要員が六人、周辺の制圧要員が一〇人、電子妨害（ECM）要員が機材関連で最低四人、さっきの巡回組が二人、共同溝で作業したやつも別に分けるならそっちにも二〜三人はいるな。ここままで二四〜五人。それ以外に、離脱用の車輛に残る奴、警察や消防の動きを監視し、必要なら妨害や陽動を行うチームがいる。

他に人員が必要な要素は？」

「携帯電話回線の妨害もやってるみたいだな」久住が告げる。

「犯行時間の前後で携帯が使えなかったという証言を、付近の住民

から機捜が拾つとる」

「それもアンテナ立てた車輛が最低一台　いや、山間部だから、もしかするともう一台くらいないときついかも……」

「その他のバックアップの人員も見積もるなら、最低でも三〇人以上、あるいは四〇人ほどの規模になる。」

その一方で、犯人は周辺道の道路封鎖に地元の警備会社を使つてゐる。総数で二〇人位だが、本音ではそこも自分たちで押さえたかっただけだ。強行突破でもされたら、素人の警備員じゃ対処の仕様がなからぬ。だが、そうしなかつた。手が廻らなかつたんだらう。つまりそこまでの規模じゃないってことになる。

いずれにせよ、それだけの規模の人間が組織だつて行動し、相手はヤクザとは言え、大量殺人に参加して脱落者もない。死刑制度が未だに残つていて、二人も殺せば絞首刑になるこの国で、だ。今時、その辺のヤクザでもここまで度の胸はないぜ。

だが、こういうことのできる組織形態が世の中にはひとつだけある。「

「軍隊か……」

武藤の言葉を引きとつて、新庄が苦り切つた声で告げる。

「そういうことだな。ざつと歩兵一箇小隊だ」

その結論は現場検証の時点で出ていた。だが、改めて聞くだけに真剣にこの場から逃げ出したくなるな、と由加里は胸で呻いた。

「武藤、お前の所見を聞きたい」新庄がストレートに訊ねる。

「こいつらは何者だ？」

「スタイルとしては西側の軍特殊部隊、それも米軍かCIAの準軍^パ事部隊^{ラミ}っぽいな。後方支援活動に手間暇惜しまない辺りとか、テクノロジーへの過剰な執着とかがな」

「米軍が関与してる……？」

「断定はできんさ。米軍の下請けをやつてる大手の民間軍事会社（PMSCs）だつて、米軍流のスタイルが身についた連中が少なくない」

「民間軍事会社（PMSCS）って、傭兵のことかい？」

久住が訊ねる。武藤は肯いた。

「だとすると、問題は誰が雇ったかだな。よくよく金廻りがいい奴のようだが……」

「それも重要ですが、それとは別に考えなきゃいけない問題があります。おい、潮！」

「は、はい！」

いきなり名前を呼ばれて、由加里は思わず立ち上がった。

「ここまでの話で何か違和感を感じた点はあるか？」

「え……違和感……？」

いきなり話を振られ、混乱したまま由加里はしどろもどろに答え

た。

「えと……軍隊が何でヤクザを襲うのかが、そもそもよく判らない」

「どアホう！」武藤が怒鳴りつける。

「そんなことを聞いてるんじゃないねえ！　ここまで何を聞いてやがったんだ手前は？」

「はあ……」
そんなこと言われたって、こっちは話について行くだけで精一杯だった。内心むくれる由加里をよそに、武藤は自分から答えを口にした。

「時間だ」

「……時間……ですか？」

「そうだ。今回の被害者どものような後ろ暗い奴らは、会議をやるからっていつも決まった場所に集まったりしねえ。毎度同じ場所ばかりを使ってたら、待ち伏せされたり、盗聴器を仕掛けられたりするからな。なるべく土壇場まで場所は伏せるもんだ。だが、それでも事前の準備や、全員の集合までにかかる時間を考えると、さすがに何時間か前には場所を決めて、関係者に通知する必要がある」

「はい」

由加里は肯いた。そこまでは理解できた。

「犯人は李元碩イ・ウォンシクの事務所イ・ウォンシクに盗聴器を仕掛けたのか、内通者がいたのか、どうにかして会場が決まると同時に場所の情報を得た。そこはいい。

犯人はそこから作戦を立て、機材を用意し、人員を配置した。そこもいい。機材はあらかじめ手元にあつて、兵隊も待機させていたんだろう。

だが、どうしても帳尻が合わない要素がある」

「何だ、それは？」

新庄の問いに、武藤は答えた。

「奴ら、どうして現地のカメラの配置だの、どこの共同溝にグラインドスラム につながるハブやルータが敷設されてるだのという情報を知ってたんだ？ どこかのホームページにでも乗ってたのか？ それにその手の機械がどんな仕様で、どこをどうすれば情報をカッタアウトできるだなんて知ってたんだ？」

結城が慎重に探るように口を開いた。

「……機材の仕様でしたら、今時はどこのメーカーも民生化コモディティが進んでますから、ある程度知識のある人間なら何とかなると思います。特注の仕様を出して発注金額が跳ね上がったら、担当者の人事評価に関わるご時世ですね。警察や防衛関連機材だって、蓋を開けばほとんど民生品と変わりやしません。

それと、カメラの設置は、まあ、所詮は公道が映るような判りやすい位置に設置されたものですから。地道に調べてけばその内、判るでしょう。

共同溝の内部配線は、敷設に携わった業者が警察以外に知らないはずですよ。そこをクラッキングされたか、あらかじめ内通者を「結城、俺はそんな話をしてるんじゃない」武藤は結城の言葉を遮った。

「今は『時間』の話をしてるんだ。たった数時間前に決まった襲撃対象の周辺インフラの情報に、何でこいつらはそこまで詳しいんだ

「？」

「ですから、あらかじめ調べてたんですよ、きっと」

「都内全域をこの調子でここまで調べ上げていたっていつのか？

いつどこで行われるか判らない襲撃に備えて。何人掛りで、何年前から、いくら金が掛かるんだ？」

「……………」

押し黙る結城に、武藤は告げた。

「こいつらはな、必要な時に、必要な情報を、必要なだけ オンデマンドに情報を引き出す手段を持ってたんだ。都市基盤インフラに関するデータベースだ。それも自前で一から作るより手っ取り早い方法があるだろう」

「いや、それは」

絶句した結城が、救いを求めるような視線を由加里に向ける。

え？ あたし？

こんなところで話をこっちに振られても、引き取りようが

「廻りくどいわよ、あんた達」隣で物憂げな女の声が出た。

「それで私を呼んだんでしょ」

ぎよつとして視線を向けると、新庄が女の言葉を肯定した。

「そういうことだ、梶浦」

03 (前書き)

え、まだまだ続く会議編です。

前回「02」「03」の会議編などと書いてしまいましたが、
更にもう1話分続きます。

いや、説明しとかなきゃならない設定が多すぎて……(とほほ)。
懲りずについてきてください。お願いします。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「本題に入る前に、まず自己紹介から始める。ここには初顔合わせの人間もいる」

「判ったわ。結城クン、明かりをつけて」

梶浦と呼ばれた女の指示に従い、結城が手元のパソコンのキィを叩き、会議室の照明をつける。

「……それで、お前はいつまでそこに突っ立ってるつもりだ？」

冷やかな武藤の指摘に、由加里が慌てて席に着く。

その横で入れ替わるように梶浦が席を立ち、その場の皆の視線を集めながら、モニター前に立った。

「この面子だと劉さんと潮さん、あなた達には自己紹介がまだだつたわね。」

初めまして、総務省の外郭団体、社会安定化機能研究所所属、グランドスラム 運用企画部主任、梶浦ミチルです。邀撃捜査班にはオブザーバーの立場でちよくちよく顔を出させてもらってます」

「……」
につこりと笑う梶浦に、というより、いきなり漢字の多い肩書に面食らつて由加里は目を丸くした。誰か補足説明をしてくれないものかと視線を泳がせかけたそこへ、新庄が告げる。

「彼女は我々、重犯罪邀撃捜査班の産みの親でもある」
「ますます判らん。」

「『産みの親』は言い過ぎよ。実際にあちこち掛けあつて予算や人員を掻き集めてきたのは、あなたと武藤クンでしょ。あたしはただ、企画書をいくつか書いて、呼ばれた先でプレゼンしただけなもの」

「……」

「社会安定化機能研究所」なる団体が何なのかはよく判らないが、どうも警察外部の人間らしいことは判った。だが、その梶浦の企画でこの邀撃捜査班が組織されたというのは、どうということなのだろう

う。

「こちらの部署が グランドスラム の運用上の必要に基づいて設立された、という話は伺ってます」

劉リウが言った。

「ただ、具体的な背景事情までは伺っていません。よろしければ、お聞かせ願えますか？」

「ええ。その前に、劉リウさんと潮さん、 グランドスラム についてどこまで知ってる？」

梶浦の問いに、由加里はミニパト警官時代に通り一遍覚えさせられた グランドスラム についての説明を必死で思い出して言った。「え〜っと、正式名称が『大規模都市防災システム』で、市民からの通報や防犯カメラからの映像なんかを基に、パトカーや消防車を効率的に配置して、事件の初動解決率を高めるとり、救急車の到着時間を短縮するためのシステム、だったかと……」

「私の認識も同じです。香港時代に、そういった趣旨に沿って日本で取材されたWEBニュースを観たことがあります」

「ふたりとも、一般市民への広報説明としてはそれで正解。でも、それは グランドスラム の機能のほんの一部に過ぎないわ。

グランドスラム の本質は、『未来予知』にあります」

「未来……予知……？」

ネットワーク回線の向こう側に「新宿の母」みたいな水晶玉を抱えた占い師がいる姿をイメージして、ますますよく判らなくなる。

「結城くん、こないだ警視庁のお偉いさん達の前でプレゼンした時に使ったパワーポイント、手元にある？」

「ありますよ。今モニターに出します」

モニター上に図形を組み合わせた グランドスラム の概念図が表示される。

「例えば今、潮さんが説明してくれたように警官やパトカーの最適配置を行うに当たって、グランドスラム は事件発生後の通報情報パラメーターだけでなく、より多くの複雑な要素情報を勘案し、事件発生前か

ら抑止的な車輛配置を行っています」

「抑止的な配置、ですか？」

「そう。たとえば当日の気温や湿度、天候、月の満ち干き、地理的条件、電車の遅延、道路の渋滞状況、地域的なイベント、防犯カメラからの街頭映像、VIPの動向や、政治日程　そういった様々な要素情報パラメーターを元に、あらかじめ犯罪を抑止。あるいは発生した犯罪に対して可能な限り少ない所要時間リードタイムで対処できるように、最適な車輛や人員の配置を指令センターに提案しています。」

そのために、国や自治体、民間が保有するさまざまな監視システムセンシング、データベースと連結し、情報を収集する　すべてを統べるもの（グランドスラム）という名前は、そこから来ています。」

つまり、これから起きるかもしれない犯罪を時々刻々と『未来予知』し続けるシステムってことです」

「……高度なシミュレーション分析を都市の治安維持に使っている、ということでしょうか？」

劉リウが訊ねる。

「そうであるとともに、それに留まりません。警察・消防等の防災用途への利用を目的としたフェーズ1は既に運用実証を終え、一般行政支援まで拡大したフェーズ2の運用実証に入っています。」

フェーズ1始動の時点で、都庁や各市区町村役場からの申請業務を受け持つクラウド・システムとのデータリンクが行われていましたが、フェーズ2からは精密な人口動態予測に基づく人員配置計画や予算措置、都市計画への提言も行ってゆくことになります。」

グランドスラム　の最終目標は、東京の都市行政全体を未来予知技術で最適化することにあります」

「……いろいろ偉そうな話をしてるが、要は行政サービスをコンピューターで効率化して、公務員の首切ろうって話だろ？」

つまらなさそうに武藤が突っ込みを入れた。

「相変わらずな身も蓋も無い物言いが素敵よ、武藤くん」梶浦が軽く睨みつける。

「ま、ぶつちやけてしまえば、そういうことでもあるわね。」

この国は元々、人口に対する公務員数は必ずしも多くはなかったけど、国も地方も巨額な債務を抱えて、人件費の抑制に手を付けざる得なかった。当初は正規職員の半額の給与で雇う準公務員や補助職員で穴埋めをしたけど、それもあれこれ批判が高まってその手も使えなくなってきたし、そもそも少子高齢化でこれから若年人口が減ってゆくことが判りきっていた。加えて国民感情から移民もダメとなれば、いよいよ本気で情報システムを導入して生産性の向上を進めなければならなくなっただってわけね。

それで一〇年ほど前からクラウド・コンピューティング技術の導入や、電子自治体規格の統一、国民ID制の導入などが本格化して、地方自治体や国の機関への行政支援システムの導入が進みました。今回の グランドスラム 計画もその延長線上にあります」

そういえば所轄時代の先輩が、「コンピューターのおかげでひとつひとつの仕事は楽になったけど、仕事自体が増えてちつとも楽にならない」とぼやいていたのを由加里は思い出した。元々、個別の仕事電子化で楽にするのは全体の公務員数を減らすためなのだから、現場が楽になんかなるわけがないのだ。

「それとは別に、これからの日本の成長基盤として未来予知技術を育ててゆく方針も一〇年前に定められました。」

未来予知の技術は、グランドスラム のような行政支援のためのシステムだけでなく、さまざまな分野でも利用可能です。気象予報や地震予知のような自然科学の予知・予測から、金融工学、経済分析などの社会予測。宇宙開発や原子力などの巨大技術。電力需要予測と不可分なスマートグリッド電力網の運営。製造業の分野でも熱や振動による物質の特性変化を予知して効率的な機械開発や冶金技術開発に使われたりしています。医療分野では、新薬の開発や、患者の容態の変化をモニタリングして最適な治療法を提示したりね。このように、ミクロからマクロまで、未来予知技術は、社会の隅々にまで広がる非常に裾野の広い技術として利用されています。

故に製造業の急速な一般化から、いわゆる『ものづくり大国』としての地位の揺らいだ日本にとって、経済大国の地位を維持するために欠かすことのできない基盤技術として、未来予知技術の確立に力を注ぐことが求められたんです」

さすがにプレゼン慣れしてるのか、梶浦の説明は淀みなかった。ただし、この未来予知技術は、いずれも膨大な要素情報パラメーターを、高速に計算し続けることで成立する技術です。その普及には、基盤インフラとして基礎的演算能力の強化 要するにスーパーコンピューターの普及が前提となります。

そのため、中規模のスパコンを量産して全国の自治体に預け、行政事務の支援に使ったり、未利用の時間を民間に有償でまた貸しして地域振興や財政の足しにするという政策 いわゆる国家演算能力増強法が施行されました。それに基づいて一定規模の自治体、全国で約八〇〇の市区町村役場にスパコンが設置されています。これらの市区町村役場のスパコンに加え、その他、国の機関や国立大学などの保有するものと併せて、現時点までに約二、〇〇〇台のスパコンが全国に設置されています。

これらは地域社会の演算能力の底上げの役目を果たすと同時に、相互にネットワークで接続され、必要に応じて仮想的に一台の巨大なコンピューターとして機能するような設計もなされています。言ってみれば、スパコンのスマートグリッド化ね。これにより、どこかのスパコンが突然システムダウンしたり、あるいは急に業務が忙しくなると地元のスパコンへの負荷が増えても、まったく支障なく業務を続けることのできる強固な冗長性を獲得することができました。

グランドスラム はこの仮想化されたスパコン・ネットワーク上に存在し、稼働しているのです」

「……………」
思いの外、大掛かりな話になってきた。しかし、ここまでの話だけでは、その グランドスラム と邀撃捜査班創設の繋がりがよく

判らない。

「ちなみに私の所属する社会安定化機能研究所は、総務省の外郭団体で、グランドスラムの仕様設計や導入計画などを行っている団体。そして運用企画部は、自治体がグランドスラムを導入するに当たって、どのような手順プロセスで導入すべきか、どのような体制で受け入れるべきか、必要とされる法律や条例の改正などを調整したり提案する部門です」

それで何で白衣なんだろう？ 素朴な疑問が湧いたが、それは後で聞くことにして、とりあえずはおとなしく梶浦の説明に耳を傾ける。

「グランドスラムのフェーズ1導入から約半年で、東京では犯罪発生件数、または犯罪発生から二四時間以内に犯人が逮捕される初動解決率が、統計データ上、目に見えて判るほどはつきりと改善されました。これ自体は喜ばしい結果ですが、その一方で明らかになってきたのが、既存の警察組織に手に負えない、職業的犯罪者による犯罪の増加です」

「？ どういうことですか？」

劉リウの問いに、梶浦は肯いて続ける。

「犯罪者側も学習し、グランドスラムの存在を前提に折り込んで犯行を計画するようになってい、ということ。今回の犯人なんか、その典型ね。グランドスラムの存在が、逆説的に犯罪者による技術革新イノベーションを加速させているんです。

こういった未来予知の結果自体が原因となって、今の現実の状況を悪化させてしまうことを、私たちは『カサンドラ・フィードバック』あるいは『カサンドラ・パドクス』と呼んでいます。カサンドラとはギリシャ神話に出てくる悲劇の預言者のことです。彼女は自身の予言によって恋人アポロンの愛を失い、悲劇的な人生の果てに破滅しました。

それとはかく、こうした強い意志を持って犯行に挑む職業的犯罪者には、グランドスラムはあまり有効に機能しません。こう

した犯行は、その時点ではひとつひとつが既存の犯罪と類似性が少ない、^{イレギュラー}特異な犯罪だからです。グランドスラムの未来予知はあくまで機械によるものですから、データベースに記録のない、まったく新しい犯罪パターンには対処できないんです。

同時に、一般警察がそうした先進的な犯罪への対処能力を急速に落としてきていることも判りました。グランドスラム導入によって、人員の削減を進めてるんですから、当然といえば当然の結果です。警察組織もまた、グランドスラムを前提とした体制に移行しつつあります。

しかし、だからといって、^{イレギュラー}こうした特異な犯罪を放置しておくわけにはいきません。治安の悪化、市民生活の不安に直結するというのは勿論ですが、社会環境の変化に適應する形で発生するこうした先進的な犯罪は、^{コモディティ}やがて必ず一般化し、一般に普及します。犯罪捜査にも^{イノベーション}不断の技術革新が必要なんです。

そして、こうした新犯罪への対処方法を、グランドスラムは早急に実装しなければなりません。

そのためには、こうした先進的な犯罪をまず^{ようげき}邀撃して解決し、その過程で集められるだけのデータを収集して、新しい捜査手法を開発する集団が必要となると、私たちは考えました。

その考えの下、ここにいる新庄警視の協力を得て、政府要路に働きかけて結成されたのがあなた方 ^{カウンター・ストライカーズ}重犯罪邀撃捜査班なのです」

04 (前書き)

ようやく会議編終了です。おつかれさまでした。
今回は由加里の帰宅とガールズトークの回です。

では、ごゆるりとお楽しみください。

つまり、邀撃捜査班とは捜査機関であると同時に、実験部隊であり、研究開発部隊でもある、ということらしい。

驚くと同時に、なんでそんな特殊な組織に自分のようなミニパト婦警上がりの人間が紛れ込むことになったのか、ますます持って理解に苦しむ由加里だった。

「自己紹介はその辺でいいだろう」武藤が割り込んだ。

「そろそろ本題に移らせてくれ」

「いいわ」

梶浦が肯く。

「俺は犯人グループが グランドスラム をクラッキングして、防犯インフラ情報を奪取したと想定している」

「ありえない と言いたいところですけどね。まあ、可能性だけなら何だってゼロではないわ。だからこそ、あなた方が組織されたわけだし」

「詳しく話が聞きたい」

「だったら、改めて社会安定化機能研究所の技術者へのヒヤリングの席を設けます。私はあくまで運用企画担当ですから。実装の細かい仕様まで把握してるわけじゃないもの」

「それはそれで後で結城と詰めてくれ。俺が知りたいのは、犯人が利用したと思われるレベルの情報にアクセス出来るのは、どこのこといつかって話だ」

「……………」

梶浦は口許に手を当てて、しばらく考え込んだ末、じろりと武藤を睨んで訊ねた。

「研究所の人間を疑ってるの………?」

「可能性のある奴は全員容疑者だ」

無茶苦茶なことを言う。梶浦が溜息をついて、答えた。

「……まあそりゃ、研究所で運用開発やってるSEチームのメンテナンス権限でも、このくらいの情報はさわれるでしょうけど。でもそれを言えば、警察おたくや防衛省にも同じくらい高位のアクセス権者はいるわよ」

「そつちはこつちで別に当たる。とりあえず今は研究所おまえらの話だ」

「自覚なしに踏み台にされてるだけの可能性もあります。必ずしも本人が自発的にクラッキングしているとは、僕らも考えていません」「その可能性は低いわね」結城の言葉に、梶浦は首を振った。

「知つての通り、グランドスラムは一般のインターネットなんかとは完全に通信規約プロトコルの異なる、独自の仮想プライベート・ネットワーク（VPN）として構築されているわ。物理的に一般回線に相乗りしている経路があっても、専用のVPN設定がなされていないマシン以外では接続さえ確立しない。」

しかもそのVPN設定は動的に変更される仕組みだし、一般ネットワークからの侵入クラッキングの形跡があれば即座に遮断されるようになってるの」

「……………」
専門用語ばかりで何を言ってるのか半分も判らない。とりあえず、グランドスラムには外からクラッキングができないようになってるという理解で、いいのだろうか？

「となると、誰だか知らんが、犯人側に専用機材なり仕様書一式を引渡したバカがいるってことか」

「……判ったわ。一応、内部監査を掛けてみます」

「対象者リストをこつちにも寄越せよ」
「運用委員会の裁定もなしに、そんな勝手な約束出来ません。こちら、舌打ちとかすんな。一応、要望は上げておくわ。それでいいでしょ」

「梶浦さん」結城が付け加えるように言った

「グランドスラム上の関連情報への接続記録アクセスログを、加工なしの一次データで貰えませんか。こつちでも解析をやりたいんですが」

「それも裁判所命令が必要よ。私に頼む前に、あなたの上司に言うてちょうだい」

「すぐに手配する」

新庄が肯いた。それを受け、改めて結城が依頼する。

「令状が届いたら、すぐに連絡します」

「了解^{りょかい}。後で担当者の連絡先を教えるから、ここから先はそつちで詰めて」

「よし、各員の行動についてまとめる」

新庄がはつきりとした口調で宣言した。

「結城、^{アクセスログ}グラントスラムの接続記録の解析と、引き続き捜査情報を取りまとめ」

「はい」

「久住、^{リュウ}劉コンビは在日朝鮮系アンダーグラウンドの線を追って、犯人グループに関する情報を収集」

「はいよ」「了解しました」

「武藤、貴様は現場の指揮を頼む」

「おう」

「それと、潮ともども^{フロント・アタッカー}前衛要員として、いつでも出動できるようにしておいてくれ。犯人が動き出したら、即座に噛みついてもらうぞ」

「……………」
「いやいや、^{フロント・アタッカー}前衛要員」って何ですか？ こないだまでミニパト

婦警やってた小娘にそんな物騒な肩書つけられて、「噛みついてもらう」とか言われても困りますから！ それも正体不明の特殊部隊相手とか、ありえないから！ それもう警察の仕事じゃないですから……………！

血の気の失せた真つ青な顔でひとり、痙攣するように小刻みに首を左右に振る由加里を知ってか知らずか、新庄は会議を締め掛かっただ。

「本件は我が重犯罪邀撃捜査班にとって、設立以来、最初に取り組む事件となる。」

しかしながら、犯人は一、三〇〇万人の都民が住むこの東京で、堂々と大量殺人を行って姿を晦くらました。しかも、自分たちの能力を誇示するかのような犯行スタイルから見て、この一件のみで終りとは考え難い。必ず第二、第三の犯行を企図しているものと推測される。

我々の任務はこれを邀撃ようげきし、阻止するにある。

犯人が軍人だろうと傭兵だろうと関係ない。これはこの国の警察機構に対する侮辱であり、挑戦だ。警視庁はその面子にかけて、全力で事件解決に取り組むことになることになるだろう。捜査本部も更に増強される。

一方、それに対して、我々は設立早々の限られた資源リソースで挑まねばならない。

だが少数精鋭の部隊には少数精鋭なりの戦い方がある。諸君等は、皆、それをよく知る者たちだ。大部隊の正規の捜査本部とは異なるアプローチで、必ずや事件を解決に導いてくれると確信している。本件は必ず我々の手で解決する。皆、その覚悟で捜査に臨んでもらいたい」

裂帛の気迫を込めて、新庄が断言する。

要するに大人数を擁する正規捜査本部を出し抜けと言っている。犯人への怒りや、第二、第三の犯行阻止といった話の最初の方の趣旨が、さりげなくすり替えられていた。

この上、警察内部の生臭い権力闘争にまで捲き込まれつつあるのを肌で感じ、由加里は改めて目眩を覚えた。みんな仲良くしようよ。本当。いがみ合っても、いいことないよ。

ただ、この激しさは何だろう、とふと疑問に思った。眼鏡の下から垣間見える眼光の鋭さには、武藤のそれとはまた異なった威圧感がある。単に設立早々の部隊の指揮官として、気負い立ってだけでは説明が付かない。部下にやる気を奮い立たせるための言葉というより、もっと冥くらい、ぐつぐつと煮え滾たぎる怒りを無理やり押さえつけているような

「以上だ。他に質問はないか？」

いかん。余計なことを考えていたら、会議終了の宣言がなされようとしていた。

「あ、いや、ちょっと待つてください！」

由加里は慌てて片手を上げて立ち上がった。このままなし崩しに現場に放り込まれるわけにはいかない。これだけは確認しておかないと、と焦りながら新庄に訊ねた。

「あの、警視、あたし、何で邀撃捜査班（こく）に配属になったんでしょうか？」

しん、と会議室が静まり返る。

……あ、いや、そりゃあ今更な質問だとは自分でも思うけど。思うけども！

だいたいスカウトされてから実際に着任する昨日まで、武藤からは「お前の才能を活かす専門の部署だ」としか言われてこなかったのだ。ずっと国体の強化選手かなにでも選ばれたのだとばかり思ってきた。

確かに、自衛隊に放り込まれて、真夜中の富士山麓で行軍実習やら、自動小銃（ライフル）抱えて家屋突入の訓練やら、パラシュート背負わされて飛行機から突き落とされる降下訓練やら、水中（アンダーウォーター）の格闘戦訓練やら、軍事知識の座学やら……その他あれやこれやの訓練を何ヶ月も受けさせられた時は、さすがにどこかおかしいとは思いはしたが。だが、それも「きつと何かの間違いだ」と自分に言い聞かせて過酷な訓練をやりすごしている内に、傭兵部隊を相手に噛み付けたのなんだのという、いよいよ持って洒落にならない状況に追い込まれつつある。

思い返せば気の小さい性格が災いして、小さい頃から周囲の状況に流されやすい子供だった。流されたら流されたで、ついついそれなりに頑張ってしまうって状況に適応してしまうので、周りからは自

分から望んでそこにいるかのように誤解を受けるのだが、決してそんなことはない。断じてない。いつだって、本人はそこから逃げ出したくてたまらないのだ。

それでも、さすがに　　今回ばかりはさすがに、このまま放置してはまずかろう、と思う。

だから、「自分のような者がこのような場所にいるのはおかしい」と、今日こそははっきりと主張しなくては。

重い沈黙に耐えながらまっすぐに向けられた由加里の視線を真っ向から受け留め、新庄はやがてぼそりと言った。

「君を選んだのは私ではない」

「は？」

何だそれは？

「私からは選抜のための条件を提示しただけだ」

「……え？　では誰があたしを　？」

「ああ、それ私。私があたしを選んだの」

「はいいい！？」

いきなり隣の梶浦がへらへらと苦笑しながら告白する。

「ほら、ここ男所帯でむさ苦しいじゃない。若い女の子のひとりもいた方がいいかなって」

「そんな理由っ！？」

思わず声が裏返る。

そんな理由で、あたしはこんな物騒な組織に放り込まれたのか！？

あたしや、野球部の女子マネか　　と思わず突っ込みを入れかけた

たそこへ、ふと背筋を悪寒が走り抜ける。

「潮うしほ」

地の底から聴こえてくるような男の声。慌てて振り向こうとするその首に、いきなり背後からヘッドロックが掛けられた。

「け、警部！？」

「手前え、会議の間中、ずっとそんなくだらねえこと考えてやがったのか！」

「いや、だって、誰もあたしの配属理由、まともに教えてくれなかったじゃないですか！」

自衛隊研修で教わった格闘戦技（CQB）を駆使して、何とかヘッドロックから逃れようとする。が、何をどうしても、首に捲きついた武藤の太い腕がびくとも緩まない。それどころか、気を抜くとどんどんきつく締まってくる。

「手前が邀撃捜査班に来たのは、他で潰しが効かねえ役立たずだからだ。何度言やあ判るんだ、この間抜け」

「ひ、非道い！ パワハラ……つか、この体勢自体、立派なセクハラですよ、警部！」

「うるせえ。手前えみたいな薄っぺらい身体でセクハラ口にするなんざ、百万年早い」

「非道い！ 非道過ぎる！ 絶対に本庁のセクハラ対策室に訴えてやる！」

「生憎だったな。本庁のどこに駆け込もうと、邀撃捜査班には手出しができませんようになってるんだよ」

「は……？」

今、さらりとんでもない発言を聞いてしまったような

だが、そこに気を取られて気を緩めた隙に、武藤の腕が一気に締まる。由加里の意識は瞬時に刈り取られていた。

「お前はこれから夜まで地下の射撃レーンで射撃訓練だ。おら、いくぞー！」

完全に意識を失った由加里の襟首を掴んで、武藤は会議室を出ていった。

「結構仲良くやってんじゃない、あの二人」

「……そう見ますか、あれを」

梶浦の感想に、やや引き気味に結城が呟く。

久住と劉も武藤の後を追って既に席を立っている。

「梶浦さん、さっきの潮さんの配属理由、どこまで本当なんですか？」

「一応、嘘ではないわよ」

「そこで、一応、とかつけるし……」結城は眉をしかめた。

「武藤さんと組ませるなら、もつと別の人選があつたんじゃないですか？　いくら彼女が射撃の成績が良いって言つたつて、年中、射撃訓練をやつてる特殊強襲部隊（SAT）隊員辺りとは比較にならないでしょう。本来なら、そっちからスカウトしてくるのが筋なんじゃない……」

「それはもうやつたのよねえ、新庄くん？」

梶浦がちらりと視線を流す。無視して手元の書類を整えている新庄の返事を待たず、梶浦は話を続けた。

「結城くんがここにくる前に、新庄くんが警備部の偉いさんに頭下げて、三人ほど隊員を廻してもらつたのよ。皆、武藤くんが泣かせて追い返しちやつたけどね」

「泣かせてつて……。どんだけ酷い目に遭わせたんですか？」

「聞きたい？」

いかにも話したくたしょうがないという表情を浮かべる。

「いいです。そんな話、デイトールまで知りたくありません」

結城は溜息をついた。

「でも、屈強なSATの猛者を追い返した武藤さんのお眼鏡にかなつたわけですよ、彼女。それに陸自のレンジャー資格を取つてくれたり　何者なんですか？」

「所轄でミニパト転がしてた婦警さんよ。彼女の経歴書、見てるんですよ」

「見たから言つてるんじゃないですか！　そもそも武藤さんだつて、前歴二〇年間小笠原の離島勤務だなんて、あんなあからさまに嘘くさい経歴書、誰が信じるんですか？」

「そこはさ、お互い様なわけだし」

梶浦が満面の笑みで告げる。

「……ま、いいです。こつちで勝手に調べます」

「ほどほどにね。せつかく綺麗にした経歴、傷つけちゃもつたいな
いわよ」

「そんなへまはしません！」

むつとした表情で結城が応える。

「その辺にしておけ」

新庄が手元の書類をブリーフケースに入れ、席を立つ。

「俺はこれから本庁に顔を出してくる。それから」新庄は冷たい
眼光で結城と梶浦を一瞥した。

「潮の件は、武藤に一任してある。余計な詮索はするな」

「いや、でも、これから一緒に仕事をする仲間なわけです」

「仕事をするのに支障がない程度の情報は渡してある。それで都合
があるなら、その都度、俺に言え。必要なだけの情報を開示する
か、貴様を任務から外す」

「はあ……」

あっけに取られる結城を残し、新庄も会議室を後にする。

そこまでして隠したい新人の秘密って何だよ？

結城は、傍らで紙コップの冷めたコーヒーを不味そうに顔をしか
めてあおる梶浦を見た。

「何を考えてるんですか、あなた達？」

「大人はいろいろ考えなくちゃいけないことが多くて、大変なのよ」
紙コップをテーブルに置き、梶浦も席を立つ。

「コーヒーごちそうさま。私もこれから霞ヶ関廻りですばらく電話
には出れないから。何かあったらメールで連絡して」

「はいはい。判りました」

呆れ気味に言い、結城も手元のパソコンや資料を片付け始めた。

「ああ、そうだ」ふと思いついたかのように、梶浦が声を上げた。

「このコーヒー、酷過ぎるわ。次に来るときまで業者を変えてお
いてちょうだい。どうせ邀撃捜査班の経費の半分は研究所で出して
るんだし」

「知りません。自分でうちの総務に掛け合ってください」
無然とした声で、結城は答えた。

05 (前書き)

会議編が終わってほっと一息、ガールズトーク編です。

次回は年明け1月2日更新。いきなりテロ現場から始まります。
では、ごゆるりとお楽しみください。

その後、本部ビル地下にある射撃練習場で、夜中まで射撃訓練をさせられていた由加里は、へろへろになった身体を引きずって所轄時代からの住まいである向島の警察女子寮までたどり着いた。

皆、心配してるんだろうなあ……。

由加里は女子寮の前で、感慨深くオレンジ色の玄関灯を見上げた。心持ち気後れするのは、この六ヶ月、寮監のおばさんや知り合いへの連絡もできなかったからだ。

半年間の自衛隊研修を終えて東京に戻ってきたのは昨夜の話のだが、夜遅い時間だったことと、高尾事件の現場に駆り出されたこともあって、結局自宅には帰り損ねた。つまり半年振りの帰宅な訳だが、そもそも自衛隊研修に放り込まれた時も拉致同然にいきなりだった。携帯も速攻で取り上げられてしまったし、放り込まれたのが自衛隊でも機密度の高い訓練施設だったとかで、公衆電話ひとつ置いてなかった。

「あたしの部屋、残ってなかったりして……」

思わず自嘲気味に呟いてしまう。まるで家出娘が実家に帰るような心境だった。……いや、実家とかないけど、自分の場合。

「ただいま……」

そつとドアを開けて中に入ると、玄関脇の寮監室に声を掛ける。

「あらあら、由加里ちゃんじゃない」

寮監のおばさんが驚きもあらわにロビーに出てきた。

「何をやってたの、半年も！ 皆、心配してたのよ」

「ええと、それが色々あります……」

「任務のことは守秘義務があるから、軽々しく口にすんじゃないぞ」と帰り際に武藤に凄まれてきたばかりなので、話せることはほとんどない。ちなみに「うっかり口滑らせたなら、どうなるんですか？」と訊ねたら、「泣かす」と一言だけ帰ってきた。小学生か。だが、

それはそれは半端なく泣かされる目に遭わされるんだろつなと思つと、確かに口も重くなる。

「晩御飯、今暖めるわね」

「いえ、外で食べてきましたから。それより、早く部屋に戻りたいんですが……」

「あー、そうか。そうよね……」

おばさんは何かひどく想定外の質問を受けてしまったような困った顔をした。

「そのことなただけだね、由加里ちゃん」

半年振りにたどり着いた自室のドアの前で、由加里はどさりと荷物を床に取り落とした。

「……………」
室内は所狭しと段ボールが積み上げられ、とても横になれるようなスペースは見当たらない。

「ごめんなさいね。来週、着任する人の荷物が先に届いちゃったもんだから。日曜日に寮を出る人の部屋が空くまで、二三日、荷物を置かせてもらおうって話になって。由加里ちゃん、いつ帰ってくるかも判んなかったし……………」

だからって、いくら何でも、これは酷いのではないだろうか。こっちは死ぬような思いで自衛隊研修を生き延びて帰ってきたというのに……………」

思わず涙腺が緩みかけたそこへ、

「あら、由加里、帰ってきたの？」

風呂道具片手に頭にタオルを捲いた、ラフなジャージ姿の女が声を掛ける。

「せ、先輩っつー！」

「わっ、ちよつと何？ どうしたのよ？」

思わず泣きながら由加里が抱きついたのは、つい半年前まで一緒

にコンビを組んでパトロールをしていた、向島署交通課勤務の婦警、三上香織みかみ かおりだった。歳はさほど離れてはいないが、高卒でそのまま警官になった香織の方がキャリアは長い。現場着任以来、業務をいちから教えてもらってからのというもの、何かと世話になっている先輩だった。

「か、帰ってきたら、あたしの部屋が、段ボールで一杯で」

「あー、ごめん。寮母のおばさんにあんたの部屋使うの提案したの、あたしなんだ」

「……………」

ばつの悪そうに告白する香織に、ああ、確かにこういう人だったけど、由加里は改めて自宅に戻ってこれた実感を覚えた。

「だから、悪かったって謝ってんじゃん。いつまでも拗ねてないで、こつち向きなさいよ」

「……………」別に拗ねてなんかありません。ただ先輩にとってあたしの存在がそんなものだったって事実を再認識して、寂しさを噛み締めてるだけです」

自室から持ってきた枕をぎゅっと抱きしめて、由加里は香織に背を向ける。

結局、今夜は香織の部屋に泊めてもらうことになり、寮母から借りた布団を床に敷いて寝床を整えた。

で、風呂から戻ってきた由加里はさっそく不貞腐れてむくれているというわけだった。

「めんどくさいなー、もう」呆れたように告げると、だが香織はほつと安堵の吐息をついた。

「でも良かったわ、無事に戻ってきてくれて。いきなり姿が消えて、これでも心配してたんだから」

「すみません。ご心配掛けました……………」

振り返った由加里が、しおらしく素直に頭を下げる。

そもそも香織とは半年前、パトロールから署に戻った際に署長室呼び出されて別れて以来である。由加里は、そこで待ち受けていたあの悪魔のような武藤にスカウト　　というより、あれは充分「拉致」と呼んで差し支えない所業だったが　　されてしまい、そのまま自衛隊に放り込まれていたのだ。

つい昨日のことのように思えるが、その間に経験した諸々の出来事　　まあ、概ね自衛隊で延々訓練受けてただけだったが　　を思い返すと、万感胸に迫るものがあつた。

その苦勞を理解してもらいたくて、守秘義務を無視して口を開く。「先輩、聞いてください！」

「いや、聞きたくない」

「えー!?!」

耳を塞いで首を振る香織に、由加里が抗議の声を上げる。

「えー、じゃない。あのね、あたしはあんたの行方探ろうとして、酷い目に遭つてるんだから」

由加里が唐突にいなくなった後、上司である交通課課長から「特別な任務で転属になった」とだけ聞かされた香織は、猛然と抗議したが聞き入れられなかった。署長室に殴り込み同然に押しかけてみたが、嚴重注意の訓告処分と引換に得られたのは、どうも署長、副署長クラスでも何も聞かされてないらしいということのみだった。

ここで引き下がるのも癪だったので、本庁勤務の知り合いの刑事に一日デートを交換条件に探りを入れてもらうように依頼したら、数日後に本庁警備部を名乗る人間が向島署に乗り込んできた。そして、その人物に取調室に丸一日監禁され、余計な詮索をするなど懇々と説教されたのだ。

「それは、また……」

武藤が手を廻したのか。あるいは新庄の方だろうか。何にせよ、新しい自分の赴任先がどうもまっとうな職場ではなさそうな現実に、改めて戦慄する。

「……まあ、それ自体は別にいいんだけどね。だけど、あたしの人

生を微に入り細に入り調べ上げられて、流石にびびったわ。高校のときに始めて付き合った彼氏から、こないだ振られた男まで、どこで調べたんだか、付き合っていた期間にどこでデートしてたかまで克明に指摘されるし。

特に何がダメージでかかったって、最初の彼氏があたしと別れた後、歌舞伎町のゲイバーでドラッグクイーンやってる事実を聞かされたのが、一番魂削られたわね……」

翳^{かげ}を帯びた虚ろさで呟いた香織は、ふとある事実気付く。

「あれ？ でもあのバインダー、あのままあいつ持って帰ったってことは、今でも本庁のどこかにあるってことよね？ あたしに何かあったら、誰かがいちいちあの資料に目を通すってこと？」

「いやーっ！ そんなの耐えられない！」

「えと、あの……ご愁傷様です」

髪を振り乱して頭を抱える香織に、由加里から掛けられる慰めの言葉はそのくらいしかなかった。

ひとしきりベットの上的た打ち廻ると、やがて気が済んだのか、香織は身体を起こした。

「で、これからどうするの？ このまま女子寮^{こじせう}に住み続ける気？」

「先輩は、あたしに女子寮^{こじせう}を出ていつて欲しいんですか？」

「そんなこと、言っていないでしょ」涙目で訴える由加里を軽くいなし、香織は続けた。

「本庁勤務ならそつちの女子寮があるんじゃないの、って話。

異動になつたつて聞かされても、誰も荷物を取りに来ないから、寮母のおばさんとは、当面はあんたの部屋をそのままにしとこうって話をしてただけだ。

その辺、どうなの？」

「ええ、まあ、本庁勤務つてわけでもないんですけどね……」

その辺は守秘義務に抵触せずに説明するのは難しい。だが、転属後の住まいはどうすればいいのだろう。特に何の指示もないので、当面はこの女子寮から通勤するつもりだが、いつまでも所轄の寮

住まいというわけにもいかないだろう。

「たぶん、近い内に引越すことになると思いますけど……」

「そう……寂しくなるわね」

ぼつりと香織が告げる。

由加里は努めて明るい声で言った。

「でも、勤務先は都内ですし。またちよくちよく顔を出しますよ！」

「そうね。でも手ぶらでくるんじゃないわよ。ちゃんと土産くらいもってきなさいよ」

「はい！」

由加里は笑顔で肯いた。何だか本当に久しぶりに人間らしく笑うことが出来たような気がする。戻ってきてよかった、と由加里は心の底から思った。

「よし、じゃあ今夜は朝まで寝ないでガールズトークするわよ！」

「えー！ いや、だからあたしは疲れてるんで、早く寝たい」

「うるさい！ 何の連絡もなしに、行方を晦くらましてたあんたが悪い」
香織は断言すると、交通課の誰それと捜査課の某なにがしが付き合い始めたのだ、入院していた担当区域のお爺ちゃんが無事に退院できたのだという話を次々に繰り返し出した。

最初は形ばかりの抵抗をしていた由加里も、すぐに身を乗り出して話に参加しはじめる。

久しぶりのガールズトークは、そのまま夜が白み始めるまでいつまでも続いた。

06 (前書き)

仕込みは終了。ここからが本番です。

軍用爆薬で吹き飛ばされた新宿歌舞伎町のテロ現場から、物語は加速を開始します。

そして次回は犯人追撃のエピソード。

なお今週から毎週日曜日深夜零時の更新となります。
よろしくお願いします。

では、ごゆるりとお楽しみください。

新宿、歌舞伎町

この界限で夜通し遊んだ客や、風俗店の深夜勤務明け従業員を狙った早朝サービスもぼちぼち手っ早い。飲食店でランチサービスが始まるうかというちょうどその場合に、それは起こった。

突然の爆轟とともにビルの中層に位置するワンフロアが、一斉に内側から吹っ飛ぶ。

支柱となる部分を残して、壁面のガラスやコンクリートがあっけなく砕け散った。内部の調度品の残骸がこなごなに砕かれて噴出し、目の前のビルの壁面に叩きつけられ、周囲の道幅の狭い路上に降り注ぐ。かつて人の身体であった血塗れの肉塊が、ベントツの屋根に落下し、天井やボディを大きくへこませて、窓ガラスを叩き割る。

悲鳴は時間を於いて発生し、やがてほどなく怒号や泣き声とまじり合って混然となった。

やがて爆発のあったビルから避難者や怪我人がふらついた足取りで出てくる頃には、最寄の新宿署から派遣されたパトカーが周辺の道路に殺到していた。

「……………」

完全に吹き抜けとなってしまったフロアに立ち尽くして、霞かすみを帯びた遠くの富士山を眺めながら、あー、何か、この所、こんなんばっかしたな、と由加里はひとり胸でこちた。

現場は、新宿・歌舞伎町、風林会館裏の雑居ビルが集まる一角。元々、暴力団の金融系フロント会社が入っていたそのフロアは、きれいさっぱり吹き飛ばされて、事務所として使用されていた痕跡さえも残っていないかった。

推定される犠牲者は三〇人以上。ただし、そこそこの人の出入りが

あつたらしく、正確な人数は不明。鑑識が総出でバラバラになった遺体をかき集めているが、それなりの結論が出るまで時間がかかりそうだった。ましてや、被害者の名前の特定に至っては目処すら立ってない。

ほんの二日前に発生した、高尾での朝鮮系ヤクザの大量虐殺事件に引き続きの大量殺人だ。当然のことながら、新庄も武藤も、ふたつの事件を同一犯の犯行と睨んで、新宿署主導の現場検証に無理やり割り込んだ。

そして所轄側担当者と武藤との殴り合い寸前の調整が行われた結果、由加里ひとりが現場に入ることが許されたのだった。

いやいや。おかしいだろうそれは。

鑑識の研修を受けたこともなければ、捜査の基本も知らないど素人の新人を現場に送り込んで、何を期待しようというのか。

そう突っ込みを入れようとしたが、武藤の鬼のような一睨みで諦めた。

本気で現場検証をやりたければ、捜査経験の豊富な久住や劉リュウを連れてくるべきだろう。だが、今ふたりは周辺の聞き込みを行っていて、ここにはいない。武藤本人はと言えば、新宿署担当者と揉めた結果か、何のかんのと理由をつけられて現場に足を踏み入れるのを拒否されてしまった。それで消去法で自分、ということらしい。

それでもわざわざ素人の自分を現場に送り込んだのには、武藤なりの何か深い考えがあるのだろうか……？

いや、ないな。由加里はあっさりと否定した。所轄と揉めて意地になっただけだ、きつと。

うんざりとした気分には陥る由加里の耳元で、いきなりデジタル回線越しに武藤の怒声が炸裂した。

『潮！ 手前え、ぼーっとしてんじゃねえ！』

「……何で、ぼーっとしてるって判るんですか？」

由加里が眉をしかめて訊ねる。

『手前えのことなんざいつもお見通しだ、どアホう』

……絶対、当てずっぽうで決め付けたな。畜生。

『それで、何か見つけたか？』

『何って……』

周囲に視線を巡らせる。

ものの見事に何も無い。屋内の壁もきれいに吹き飛ばされて、粉々になった残骸が砂利のようにつつすらと床に積もっている。

そこを、宇宙服みたいな防爆スーツを着込んだ鑑識員が、携帯電話みたいなサイズの小さな白い棒状のセンサーを持ってあちこちうろつき廻っていた。……というか、専門家があんなごつい防護服着ている現場に、何でただのスーツにコート姿なんかであたしはここに居るんだろう、という素朴な疑問がふつふつと沸き起こる。勿論、理由は単純で暴虐な上司の命令に逆らえなかったからだ。一刻も早く転職を考えないと、真剣に生命の危機に関わりそうな気がしてきた。

『潮？』

「あ、はい。えーっと」「慌てて周囲を見廻し、ついつつかり見たままを口にしてしまう。

「何にもありません。壁もなくなって、風が吹き込んで寒いです」「どアホう！」

また怒鳴られた。いい加減、鼓膜に障害でも残るんじゃないだろうか。その場合、これは労災として認められるのかしら？

『何でもいいから、犯人の手がかり見つけてこい。見つけるまで、降りてくんな』

それだけ告げると、一方的に回線は切れた。

とほほとばやきながら、由加里は辺りを見廻す。

鑑識員から「こっちくん」と身振りで追い払われたりしながら、ふらふらとフロアをさまよう内に、足元に青い生地の手切れを見つけた。被害者の衣類の切れ端だろうか。そと手を合わせて屍者の霊を弔ってから、鑑識用の白手袋をつけた手で布切れを引っ張り出す。

しばらくぼろぼろのその布をひっくり返したり裏返したりする内に、それが何なのかふと思いついた。

「帽子……？」

「帽子だと？」

「はい」

爆破されたビルからワンブロック先に停めたBMWのボディに背を預けながら、武藤は回線の向こうの由加里に訊ねた。

「どこで見つけた？」

「エレベーターのそばです」

武藤は眉をしかめて手元のタッチ패드PCの画面に視線を落とす。B5サイズの有機ELディスプレイには、爆破前のフロアの平面図が表示されていた。消防署が地元不動産業者を通じて収集している家屋建物データベースを、グランドスラム 経由で検索して入手したものだ。

「その帽子には、何か手がかりになるようなものはないか？」

「えと、作業帽みたいな、布の薄い奴です。正面の鍔の上の方にワッペンがついています」

「ワッペン？」

「ええ、会社名みたいですね。今写真を送ります」

由加里の携帯から撮影された映像が捜査資料データベースにアップされ、武藤のタッチ패드PC上にも表示された。だいぶぼろぼろになりながらも、そこから辛うじて「観葉植物・ガーデンセンター たちばな」の名前が読み取れる。

「結城！」

『聞いてますよ』回線越しにキーボードを叩く音を響かせながら、本部にいる結城が応える。

『「ガーデンセンター・たちばな」。非上場の株式会社で、新宿を中心にオフィスビルに観葉植物なんかをレンタルしています。本籍

は横浜、ただし問い合わせ先は新大久保。こつちがメインの事務所でしょう。社員数は正社員が二人、非正規が三〇人ほど。設立から一八年。税金もちゃんと納めてますし、経営者もまともそうです。どこかのフロント会社ってわけでもなさそうですね」

「……………」

無言で考え込む武藤へ、久住が回線越しに会話に割り込んでくる。

『被害にあった東亜グローバルビジネスについてなんだがね』

「お願いします」

『表向きは、いわゆる街金だ。この辺の風俗業者なんかの開業資金やら運転資金を融通して、それで喰ってることになってる』

「表向き、というからには裏がある？」

『そうだ。本業は裏街道の在日外国人に活動資金を融通したり、海外に送金したりといった稼業で、そのために社員は全員、日本語、中国語以外にもうひとつどこかの国の言語が喋れたそうだよ』

『下手な日本企業より、国際化してるじゃないですか』呆れ気味に結城が呟く。

『それでだな。この会社の質たちの悪いのは、ただ金を貸しているだけじゃなかったってことだ』

「それは？」

『犯罪を完全に投資ビジネスと見做していたらしい。中国系やその他のアジア系暴力団の実行する犯罪を金融商品よろしくファンドやらポートフォリオにして、日系の暴力団やそのフロント企業に売り捌いていたらしい。そこで調達された資金を元手に、在日外国人の犯罪集団は犯罪の規模を拡大したり、新しい犯罪を企画したりしていたそうだ』

『酷いな、それ』

「表の世界で起きることは、裏の世界でも起きる。別段、不思議な話じゃない」

武藤はそっけなく言い放った。

「久住さん、吹き飛ばされた会社が海外との資金の動きを扱ってい

たというのが気になります。殺された李元碩は犯人グループの武器の持ち込みに絡んでいた。こいつらも、犯人グループの資金を国内に持ち込んで用済みになって消された可能性がある」

『判った。生き残りを探して、その辺を探ってみよう』

「お願いします。手が足りなければ、本庁の捜査本部に情報を流しましょう。人海戦術なら連中にやらせればいい。それ以外に何か情報は？」

その問いに、結城が告げた。

『爆弾の種類が判明しました』

「早いな」

ジェネラル・エレクトリック

『GEの最新のガスクロマトグラフィーを導入したって、こないだ科捜研の知り合いが自慢してましたからね。それを使ったんでしょ』

爆発物が炸裂した直後の現場周辺大気には、目に見えないサイズの爆弾残留物がガス化して漂っている。それを気体の成分分析に使うガスクロマトグラフィーを使って解析してやれば、爆弾の種類を特定することができる。また爆弾に限らず、あらゆる化学物質にとって分子レベルで完全に同一な存在はあり得ないから、うまくすれば製造ロットまで特定することだって可能だ。米軍や先進諸国の軍隊から横流しされたものなら、部隊名まで特定できる。

「鑑識が現場で使ってたあれか。あんな大きさで使い物になるのか？」

『大きさはあんまり関係ないです。国産でもっと小さなサイズのものもありますし。それよりも、採取した残留分子情報をFBIが持つ膨大な化学物質データベースと照合して、瞬時に解析を終えるデータベースが売りだそうで』

『今時は、何でもデータベースだな』

「アホか。そいつは、どこでどんな爆弾が使われたかFBIに筒抜けって話じゃねえか」

『……ああ、まあ、そうとも言いますね』

「そんなことより、何の爆弾が使われたんだ？」

『C4（コンポジション・フォー）です』

米軍も使っている一般的な軍用プラスチック爆弾だ。可塑性が高く、粘土のようにどんな形にでも加工することができる。その反面、信管を使って起爆しない限り、叩いても火にくべても爆発しないという、軍用爆薬としては理想的な爆薬だった。

「……爆弾の設置箇所は判明したのか？」

『現場の鑑識から仮の推定設置箇所が上がってきてます。そっちの平面図に重ねます』

タッチパッドPCの平面図上に爆弾の配置を示す赤い丸が表示される。妙に数が多い。C4の本来の破壊力からすれば、単にこの程度の規模のオフィスを吹き飛ばすだけなら、小包ひとつ送り付ければ済む話だ。だが、画面上の爆弾の配置は、オフィスの出入口だけでなく、役員室から会議室まで、トイレと給湯室以外、満遍なく各部屋にひとつかふたつ配置されている。よほど念入りにこのフロアを吹き飛ばしたかったらしい。

武藤は結城に訊ねた。

「このビル界隈の継続監視映像はあるか？」

『自治会の防犯カメラに見せかけた、新宿署設置のやつがいくつか』
「それだけじゃねえだろう。被害者企業の裏稼業を考えれば、本庁の組対（組織犯罪対策部）がビル正面をどんぴしゃで押さえた継続監視をやってるはずだ」

組織犯罪対策部は、組織暴力団や外国人犯罪組織を捜査対象とする部署だ。東亜グローバルビジネスのような怪しげな企業を見逃すはずはない。

『……でもそれ、正式に組対に申し入れして入手しろ、って話じゃないですよね？』

「あたりまえだ」

『いいですけどね。また報告書に載せられない話が増えるな』
「ぼやぐわりに、結果はすぐに出た。」

『はい、押さえました。正規の捜査資料データベースには上がってなかったので、組対が グランドスラム から切り離して運用している専用サーバ内を漁ったらありました』

グランドスラム の導入後、すべての捜査資料は警視庁共有の捜査資料データベースにアップされ、警視庁全体で共有する建前になっている。だが、現場捜査員にとっては自分で集めた情報こそが命であり、その使い道も自分で決めたがる本能がある。個々人の捜査員でさえ情報を隠匿しがちなのに、グランドスラム を介して見ず知らずの余所の部署の人間に何もかもくれてやる義理はない。それで自分達の手柄が増えるわけでもないのだ。

それを止めさせるためのクラウド・システム導入のはずだったが、何のかんのと理由をつけて、どこの部署でも自前のサーバを立ち上げてそこに情報を囲い込んでいた。結局、部内で出しても良いと判断された情報のみを、共有の捜査資料データベースにアップしているに過ぎない。

典型的な情報システム導入の失敗例みたいな話だったが、それでも外廻りの捜査官とパソコンや携帯などで情報を共用しようと思ったらネットワークには接続せざるえない。そうなれば、後は結城の腕にかかればどうとでも料理のしようがある。

『……でもこれ、後では絶対組対に殺されますよ』

「構わん。それより事件発生の一時間前から遡って、こっちに転送しろ」

『組対データベース上の監視映像のパスを直接そっちに送ります。警部の端末ならストリーミング再生に支障はないでしょう』

武藤は、タッチパッドPC上にぼんと浮かび上がったショートカットのアイコンを軽く叩く。動画再生アプリが立ち上がり、早朝のビル正面を捉えた映像が滑らかに動き出す。更に画面を叩き、再生速度を早廻しにする。

やがて事件発生から一時間前の時点で一時停止をタップした。

「見えてるか、結城？」

「見えてます、「ガーデンセンター・たちばな」！」

画面上には、横腹に「ガーデンセンター・たちばな」と大きくペイントされたトラックがビル前に横付けされ、後部ドアから複数の作業員が観葉植物の鉢植えを降ろし始めている。

「やっぱりだ。奴ら、観葉植物の鉢の中にC4詰めて持ち込みやがった」

平面図上の爆弾の配置は、オフィス内の観葉植物の配置だったのだ。

「バクダツトで官公庁のオフィスを吹き飛ばすのによく使われた手だ」

「搬入したトラックを指名手配します！」

「どうせ偽造だ、ほっとけ。それより起爆直前に現場周辺で使われた携帯電話の番号をリストアップしろ」

「携帯電話？」

「起爆コードの送信だ！」

結城が興奮した声を上げる。

「待つてください」それまで黙って聞いていた劉リュウが指摘した。

「メールを使って起爆させた可能性もあるんじゃないですか？」

「それはない」武藤が即座に否定する。

「メールだと、メールサーバーと回線状況の都合で延着し、時間通り（オンタイム）に起爆できない場合がある。誰を狙ったか知らないが、犯人はターゲットがオフィスに入ったことを確認してから起爆コードを送って、確実に殺害することを狙ったはずだ。犯人が紛争地帯でキャリアを積んだやつなら、なおのことメールなんざ信用するはずがない」

「携帯キャリア各社から通話記録を入手」結城が告げた。

「起爆直前に三秒以内で回線を切った番号、起爆後に通話先の電源が切れた番号を条件に検索しろ」

起爆コードを打ち込むのにそんな長時間の接続をするわけがないし、爆弾に組み込まれた携帯電話が起爆後に電源が入っているわけ

もない。

『番号を特定しました！ 番号から端末の現在所在地を検索 所在を確定！ 首都高中央環状線を港北 JTCジャンクションに向けて移動中です！』

タッチパッドPC上に表示された首都高のマップ上を移動する被疑者のマークを見下ろしながら、武藤は肉食獣のようにつつすらと口許を歪めた。

07 (前書き)

新宿歌舞伎町のテロ現場から、首都高を移動中の犯人の追跡開始。
次回は向島の住宅街で市街戦開始です。

次回は1月16日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

虎ノ門の邀撃捜査班本部では、左右正面の三面に展開した3D液晶モニターを前に、専用モニターグラスを掛けた結城が腕まくりをしていた。

「オツケー、ゲーム開始だ」

結城は凄まじい勢いでキーボードを叩きながら、情報の収集と関係各方面への連絡を開始した。

「Nシステムより車種とナンバーを特定。18年型黒のレクサス。レンタカー会社の品川営業所所有の車輛。グランドスラムを介してレンタカー会社のデータベースに接続。アクセス利用者名を検索中判明しました。借受時に提出のパスポートと国際免許証から、チェ・ギョンスリム韓国籍、崔京林」

『偽造だ』にべもなく武藤が切つて捨てる。

「当該車輛を交通自動追跡システムに登録」

都内各所の道路に設置された車輛監視装置からなるNシステムには、高速でナンバーを読み取る機能が組み込まれている。これを使って、登録されたナンバーの車輛の通過を自動的に通報するのが交通自動追跡システムである。たとえ高速から下りようと、都内ならばどこまでも追跡可能だ。

結城は次に、新木場の東京ヘリポートに本部を置く警視庁航空隊江東飛行センターに回線を接続して、無人偵察機（UAV）の出動を要請。コムシップ通信飛行船からの映像があるとはいえ、あちらは飛行経路が決まっていて小廻りがきかない。無人偵察機（UAV）であれば、現場の要望に合わせていくらでも融通がきく。

フライトプラン飛行計画作成ツールを起動して予定する飛行経路を入力する。飛行センターと航空局に入力した飛行計画を送信。フライトプラン即座に承認され、データリンク済みの無人偵察機（UAV）にインストールされる。

飛行センターから無人偵察機（UAV）が離陸を開始した旨の連

絡を受けた。

その間に監視対象のレクサスは港北
ジャンクション
JTCへと向かっていた。

JTCを抜け、次の小菅

結城は舌で小さく唇を舐めて言った。

「逃すか、この野郎」

『潮！ 車を出すぞ。とつとと降りてこい！』
「は、はい！」

上れと言ったり、降りてこいと言ったり、どこまでも勝手な上司だ。当然、エレベーターなんか使えないので、階段を転がり落ちるように駆け降りる。走りながら、パンツとシューズで正解だったと今朝ウチを出た時の己の判断を褒めてやりたかった。これがスカートとパンツスだったら目も当てられない。

やっとの思いでビルの正面まで降りてきたら、いきなり目と鼻の先にBMWが急停車した。危つく轢かれるところだった。というより、現場保全のために周辺道路は車輛通行止めになっていたはずだが ああ、いや、そんなことを気にする人間ではなかったつけ、あの上司は。

己の上司の特異な人格へ、このまま素直に理解を深めてゆくのに
パインナリテイ
深刻な疑念を抱きかけたそこへ、武藤の怒声が飛んだ。

「潮！ 早く乗れ！ 犯人を追うぞ！」

「はい！」

返事とともに助手席のドアに手を掛けようとして、また「ドアホ
う！」と怒鳴られた。

「お前は後ろだ！」

「は、はい！」

慌てて後部シートのドアを開け、上半身を乗り込ませる。そこは、シートの半分がヘルメットや防弾ベストなどの戦闘装備と銃器のケースで埋まっていた。

なんだ、これは？

状況が理解できずに硬直する由加里の尻を、武藤が容赦なく蹴り飛ばす。

「とつとと乗りやがれ、このバカ！」

「きゃあ！」

装備品の山に頭から突っ込む由加里の背後で、ドアが音を立てて閉じられる。

「何すんですか、警部！」

「うるせえ！」

運転席に飛び込むように座った武藤は、ドアを閉じると同時にBMWを急発進させた。エコカー全盛のこのご時世に、BMWが北米市場向けに唯一生産ラインを残したガソリン・エンジンの4ドア・スポーツカーは、4リッターV型8気筒DOHCエンジンを猛々しく咆哮させて爆発的な加速力を解放。驚く所轄の警官達を蹴散らして、道路封鎖のテープを内側から切り裂くと現場から飛び出した。

入り組んだ歌舞伎町の細い路地を、BMWは無茶な加速で突っ走る。武藤がハンドルを切る度に、後部座席では由加里が装備品ごとシエイクされ続けた。

「おい！　いつまでそうしてる気だ！」

「好きでやってるんじゃないやありません！」

大久保通りの広い道に出て、ようやく乱暴な運転から解放されるや、由加里はやつとの思いで装備品の山から顔を出して叫んだ。

「何なんですか、一体？」

「さつさと装備を身につける！」

「はい？」

「これから犯人と接触する。そのまま俺たちも戦闘に突入するぞ！　いやいや。何を言ってるんでしょうか、この人？」

「そんな話、聞いてない」

「手前えが聞いているかどうかなんざ、知るか。犯人の喉笛に噛みつくのが俺達、フロント・アタッカー前衛要員の仕事だろうが。仕事の時間だ。とつとと準

備しやがれ！」

武藤の剣幕に圧され、涙目になってコートを脱ぎかけて、はたと気付く。

「ここで着替えるんですか？」

「お前が着替えたら、運転を代われ。次は俺だ」

「やですよ、こんな所で！」由加里はきっぱりと拒絶した。

「嫌なら、その格好で敵の矢弾の前に飛び出すんだな」

「……着替えます」

本気で泣きそうになりながら、コートを脱ぐ。

「本当に、こつち見ないでくださいね」

「手前の幼児体型見て欲情する男なんざいるか」

非道すぎる。誰か、この男にセクハラのなんたるかを教えてやってはくれないものか。

「潮、そのまま聞け」

「はあ……」

コートに次いでスーツの上着を脱ぎながら、生返事を返す。今度は何を言いだすつもりなのか。

「お前、この前の高尾の現場と、今日の爆破現場を見て、どう思った？」

「どうって……人がいっぱい死んで、酷い事件だと」

「そうじゃない」武藤は否定した。

「犯人の意志をどう感じたか、を訊いてるんだ」

「犯人の意志、ですか？」

「どういう意味だ？ 何と返せばいいのだろうか？」

「時間がない。手を休めるな」

「あ、はい！」

慌てて着替えを続ける。だが、先程の問いへの答えを待っているのか、武藤は黙ってハンドルを握り続けたままだ。

悩んだ末、由加里は率直に思ったままと口にした。

「……怖かったです」

「何が？」

何？ 自分は何に怯えを感じたのだろうか？

「平気で大勢の人間を殺せる人達がいる、自分がこれからその人達と向きあわなきゃいけないってことに……だと思えます」

その答えに、武藤はふんと鼻を鳴らして「まあいい。合格にしていってやる」と告げた。

「捜査の基礎も知らねえ、鑑識の研修も受けてねえ、役立たずのお前を現場に連れてきたのは、犯人の意志を肌で感じさせるためだ。これから相手をしようという敵が、どこまでの覚悟を持った奴なのか、どこまで容赦なくやるつもりでいるのか。そいつは結局のところ、最前線に己の身をおいて、手前の肌身で感じとるしかない。

犯人の目的なんざ、今はどうだっていい。これから接触する敵は徹底的にやる奴らだ。手加減は期待できない。冷静に計画と行動を積み上げて、殺戮を重ねることに一欠片の躊躇ためらいもない奴らだ。それさえ判っていれば充分だ。

後は、自分の覚悟の問題にすぎん」

「……警部は怖くないんですか？」

「怖いさ」さらりと武藤が認めた。

「だから肚はらを括はるんだよ」

「……よく判りません」

「すぐに判る。お前にもな」

それだけ言うと、武藤は再び押し黙った。

「……………」

この変わり者の上司の感じる恐怖と、自分の感じている恐怖は、果たして一緒のものなのだろうかと由加里は思った。

小菅から更に押切 ジャンクション JTCに進んだレクサスは、そこで6号向島線に乗り入れ、南下を開始した。

その後部シートで、携帯の着信音が軽やかに鳴った。

「私だ」

城島は短く告げた。

『 グランドスラム に補足されました』

「ならば、これはもう必要ないな」

そう言って、手元のもうひとつの携帯電話の電源を切る。歌舞伎町のビルを爆破した際に起爆コードを送信した携帯電話だった。

「歓迎の準備は？」

『 できてます』

「よし。これから敵を誘引する。手荒く出迎えてやれ。我らの武威プレゼンスを示すぞ」

そう言って、城島は愉たのしげに微笑を浮かべた。

『 !? 携帯の電源が切れた!』

「車輛の所在は？」

『 6号向島線を南下中 引き続き補足しています。間もなく無人偵察機（UAV）も所定の配置に就きます。携帯の電源が切られても追跡に支障はありません』

「……………」

「どうかしたんですか、警部？」

装備の装着を終えた由加里が、後部シートから訊ねる。

「……嵌められたかもしれんな」 武藤がぼつりと呟く。

「はい？」

「考えて見れば、起爆後も携帯の電源を入れっぱなしなんて素人臭いミスを犯す犯人とも思えん。おまけに監視システムだらけの首都高を走りながらだ。高尾の事件で、あれだけ念入りに地元の監視システムを潰して事に及んだ奴らが、だぞ」

「それじゃあ…………？」

「間違いない。手ぐすね引いて俺達の到着を待ち受けてる」

断言する武藤の言葉に、由加里は血の気が音を立てて引いてゆく

のを感じた。

「ど、どおすんですか、警部!？」

「どう?」武藤は何故そんな問いを受けねばならないのか、という表情を浮かべた。

「せっかくのご招待だ。受けねえわけにはいかねえじゃねえか」

「はいい?」

あらやだ。何を言ってるのかしら、この人。ふふふ。冗談好きな上司って、困りものね。

「状況は、彼我双方にとって初期接触の段階だ。このフェーズでは、まずはひと当たりして、敵戦力の規模、装備、練度、戦意、あわよくば戦術思想についての情報を得る必要がある。そのために火力と運動力を有した部隊を叩きつけて、敵から情報を奪取して帰還する

これが威力偵察の要諦だ。自衛隊の座学で習っただろうが?」

「あたし達、戦争やってるんじゃないやありません!」

由加里は悲鳴を上げるように叫んだ。

「戦争だ、こいつは!」武藤が咆哮する。

「いい加減、肚はらを括れ!」

ああああああああああああああああああああ!

由加里はヘルメットごと頭を抱えて転げ廻りたかった。

「もうやだ! こんな職場、転職したい!」

「アホか」武藤が嘲笑わらわらうように言った。

「この不景気のご時世に、手前みたいな射撃と体力しか能のねえどんくさい女、雇う企業なんかそうそうあるわけねえだろう。そもそも、どこにも行場がなかったから、警察に転がり込んだんだろうが、お前は」

「非道い!」

「そこまで言うなら、自衛隊にだったら俺が一筆推薦状を書いてやってもいいぞ。ただし、調子に乗ってレンジャー資格を取っちゃまった女なんぞ、速攻で紛争地帯のPKF部隊送りだろうがな」

どうあっても戦場送りなのか、あたしは?

『いいですか？』半ば呆れ気味の声で結城が割り込んだ。

『被疑者車輛は向島ランプから一般道に降りました。そのまま向島の住宅街に』

「ここは ！？」

後部シートから身を乗り出した由加里は、ダッシュボードの液晶モニターに表示されたマップを喰い入るように見詰めた。

所轄時代の自分の担当区域だった。

08 (前書き)

向島住宅街でいよいよ市街戦開始。

今回は凄絶な屋内戦バトルです。

次回は1月23日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

城島を乗せたレクサスは、住宅街の中にある食品加工会社の廃工場の中に入って停車した。元々、さほど大きくもない零細企業の工場だったが、作業機械類はとくに売り払われてしまっており、内部は思いの外、広かった。

レクサスから降り立った城島が、眼前に整列した完全武装で固めた六人の兵士達の顔を順番に見据え、言った。

「これから始まる戦闘は、この国の法執行機関との最初の接触となる。貴様らの戦力であれば、苦もなく捻り潰せるだろう。だが手加減はするな。彼らに、我々への畏怖と恐怖を植え付ける！」

兵士達は、復唱の代わりに一斉にタボールAR21のコッキングハンドルを引いた。見事な金属音の調和が、何もない廃工場に響き渡った。

武藤のBMWは、城島のレクサスの入った廃工場の二ブロックほど手前で停車した。

運転席から降り立った武藤は、周囲を見廻して舌打ちした。

「住宅街のど真ん中かよ……」

「本当にこんなところで始める気なんですか？」

ヘルメット姿の完全武装で、個人携行の制圧火器として独H&K社製MP7A1を抱えた由加里が、泣き出しそうな声で言った。武藤も既に戦闘装備に着替え、MP7A1を背中に背負っている。

「小人数で待ち伏せするには住宅街は最適のロケーションだ。特に攻め込む側が住民に配慮せざるえない場面ではな。イラクのファルージャでは、それで米海兵隊が苦しめられた」

「そんなこと言ってるんじゃないやありません！」由加里はかっとなって叫んだ。

「この近くには小学校もあるんですよ！ もうすぐ下校の時間だし、流れ弾に子供が当たったら」

「だったら、流れ弾なんか出さないよう、敵が撃つ前にお前が先によく狙って撃て」

「ふざけてるんですか!？」

「ふざけてるのはどっちだ？」

武藤が由加里の胸倉を掴んで言った。

「『始める』んじゃねえ。もう『始まって』るんだ。子供を捲き込みかねないロケーションを選んだのは敵だ。ここでビビって俺達が逃げ出したら、俺達が戻ってこざるえないように奴らは地元住民に手を出さずぞ。」

それが嫌なら余計な被害が出る前に、先に敵を潰す。選択の余地なんざねえ」

武藤が断言して、手を離す。

言い返したいのに、言葉にならない。自重一キロ強とこのクラス
の火器にしては、驚くほど軽いはずのMP7A1がやけに重く感じる。自分が見知った人達、言葉を交わした人達を護らねばならない
この銃で。だがそれは、この手で人を殺すことを意味するのだろうか。

こうして見ると、高尾事件や歌舞伎町のビル爆破事件で何十人も
のヤクザが命を落とした現場に立った時、痛ましさや恐ろしさは感じていても、「人が死んだ」ということ、「生命が奪われる」ということをあまり実感を持って捉えてきていなかったことを思い知らされた。殺されたヤクザ達にだって、家族があり、友人があり、それぞれの人生があったはずだ。罪を負って生きる者であっても、償う機会すら与えられずに理不尽に人生を摘み取られねばならない謂れはなかったはずだ。

勝手な話だと思う。その暴力が身近な人々に向けられたと知った瞬間に、由加里は犯人達が行った行為の恐ろしさを初めて実感しつつあった。

だから、この銃を使つて、それを阻止する　と単純に割り切れるものでもないのも事実だった。

この半年間に経験した警察官としては特異な日々は、スイッチさえ入れれば自動的に敵を倒すためのさまざま技術を解放できるように由加里の心身を作り替えている。

だが、それを使つて犯人を「殺す」のか？

いや、「殺そう」とする意志を持たねばならないのか？

頭の中をぐるぐると渦捲く答えのない問いに、由加里はいっそ吐きそうだった。武藤の命じた「肚はらを括れ」という言葉に、まったく応えられていない自分に愕然とする。

しかし状況は待つてはくれない。由加里の心の準備どうあるうともう間もなく戦闘に突入してしまう。

蒼褪めて硬直する由加里をよそに、武藤は戦闘服の襟元につけた喉頭スロートマイクを押さえて囁いた。

「結城、マップ情報！　それと付近の防犯カメラ映像をこつちに廻せ」

『住宅地図をそちらの端末に表示します。防犯カメラはダメですね。地元自治会の設置した防犯カメラは、犯人の逃げ込んだ廃工場を中心とする周囲のブロックで全部潰されています』

「端から期待しちやいなかったがな」

武藤は舌打ちして、右腕の裏側のホルダーに納めたスマートフォンに視線を落とす。歌舞伎町で使っていたようなタッチパッドPCは戦闘中の使用には適さないので、こちらに切り替えている。

そこに表示される小さな民家が密集する地形に眉をしかめた武藤は、画面をタップして無人偵察機（UAV）からの俯瞰映像に切り替えた。新木場から飛び立った警視庁航空隊保有の無人偵察機（UAV）は翼幅九メートル　米軍の使用する無人偵察機（UAV）グロバルホークの約四分の一の大きさで、上空一〇〇メートルの高度をゆったりと旋回している。そこからの映像に目をやり、不機嫌な唸り声を上げた。

屋根と屋根が接近していて、家屋の間の路地がよく見えない。この下を敵に走り廻られたら、上空の無人偵察機（UAV）からではまず補足できない。敵はむしろ、この地勢を利用するつもりで、ここに誘い込んだに違いない。

「……………」

しばらく無言で考え込んでいた武藤が、不意に天を仰ぐ。そのま
ま、何かを探すように真剣な表情で四方へ首を巡らせた。

「警部？」

「結城、警察の物以外に付近を無人偵察機（UAV）らしき機体は
飛んでないか？」

「？ いえ、今の所、それらしき機体は……………」

「無人偵察機（UAV）がどうかしたんですか？」

訊ねる由加里に、武藤は言った。

「これだけハイテクを使いこなしている敵が、予定戦場の上空に無
人偵察機（UAV）も上げていないのはおかしい。昼間なら、ラジ
コン機にカメラと送信機を載せた程度のもので用が足りる。今時、
そんなものはソマリアの海賊だって使ってる。連中が無人偵察機（
UAV）を飛ばしてないのは、飛ばす必要がないからだ　　結城、
無人偵察機（UAV）の映像が抜かれてるぞ！」

「！？ そんな、バカな！？」一瞬、驚きの声を上げた結城が、す
ぐに反論する。

「無人偵察機（UAV）の通信は上空の通信飛行船へのアップリン
クですから、上方向にしか向いてません。地上から傍受するのは不
可能ですよ。搭載機器から洩れる微弱な作動電波を拾うにだって、
シールド対策は厳重ですから、よっぽど大規模な受信設備でもない
と　　」

「そうじゃない。　　グランドスラム　　から直接抜かれてると言っ
てるんだ」

武藤は結城の反論を遮って断言した。

「それは…………いや、ありうるか。少なくともそれを前提にしなきゃ、

ダメだな。

それで、どうします？ 無人偵察機（UAV）を引き上げさせますか？」

「いや、俯瞰映像はこっちでも必要だ。そのまま飛ばしとけ。ただし、こちらの所在が知られないようにコースは調整しろ」

『了解』

「それより、マップに表示されているこちらの所在情報は、グラ
ンドスラム にも上がってるのか？」

『いいえ。そいつは警部が今使ってるスマートフォンのGPS機能
を使って、携帯キャリアから得た情報を本部で結合マージしたものです。

グランドスラム には上げてませんし、固有の携帯番号が判らな
い限り、どこからも追跡できません』

「よし」肯き、武藤は続けて問うた。

「住民からの通報は？」

『今の所ありません』

「高尾と同じ犯人なら、防犯カメラを潰して電話回線をそのままに
してるとは思えん。確認しろ。それと付近の交番に駆け込んだ住民
などがいれば、その情報もこちらに廻せ」

『了解しました。 複数の住民宅に電話を掛けてみていますが、
確かに回線が途絶しているみたいですね。携帯電話については、今
このこの回線が維持出来ている間は繋がっているって保証になります
が』

武藤は由加里を一瞥した。

「潮、お前、交通課時代にこの辺りの担当だったと言ったな」

「はい。この辺の住民とも顔馴染みでした」

「この時間帯、この付近の住民構成はどうなってる？」

「高齢者が中心です。子どもはまだ学校ですし、その親世代はほと
んど共働きでこの時間は家にいません。犯人が逃げ込んだ食品工場
が潰れるまでは、そこに勤めてた人もいたんですけど」

「防犯カメラと有線の電話回線は潰した。携帯の回線はそのまま。」

住民からの通報はなし。自前の無人偵察機（UAV）は飛ばさない
……」

ぶつぶつと呟いて考え込む武藤に、由加里が焦れたように訴える。
「警部、そんなことより、すぐに住民の避難を」

「それは邀撃捜査班の仕事じゃねえ」

武藤がそっけなく言い放った。

「え？」

「たったふたつで避難誘導なんか始めても、住民の動きを管理できない。もたついてる内に、敵にそこを狙われるのが落ちだ」

「……だったら、所轄に連絡して応援を！」

「装甲もない軽武装の一般警察を呼んでも、射的のマトになるだけだ。お前はそんなに屍体の数を増やしたいのか？」

鋭い眼光で武藤がねめつける。押し黙る由加里に、続けて言った。
「戦闘に突入する前に、彼我の状況と作戦目標について整理する。」

まず敵の状況だ。この先に待ち受けている敵は、廃工場を中心に周囲のブロックの防犯カメラと電話線を制圧しているものの、見る限り、目に見えるような形で封鎖線は敷いていない。住民からの通報もまだない」

「……………」

「おそらく、ここで持久する気は敵にはない。敵の目標は、威力偵察だ。自分達を追ってくる敵が何者かを戦闘を通じて情報収集することが目的と考えられる。だから、わざわざこの辺りを封鎖して占拠する必要はない。」

撤収の手間を考えれば、何十人もの大部隊を投入して、ということもないだろう。少人数で動きまわって、機動的に戦線を形成する戦術を取るはずだ。

だから、住民を人質にとることもない。人質の対応に手を割く余裕は、おそらく奴らにはない」

「じゃあ、住民は無事」

「いや、声を上げられる前に殺してるだけだろう。連中が動き廻れ

ば動き廻るほど、行く先々で住民の被害が増えることになる」

「そんな……！」

息を呑む由加里を無視して、武藤は訊ねた。

「潮、お前、この辺の路地について詳しいか？」

「えと……少しは。脇道から子供が飛び出したりするんで、結構、署に戻って地図を見直したり、非番の時に自分で歩いたりしてました」

「そうか、判った」ひとりで納得したように肯くと、武藤は命じた。

「お前が前に立って誘導しろ」

「え？」

驚く由加里に、武藤は続ける。

「これから俺達は、この先の廃工場にいたと考えられる、歌舞伎町ビル爆破の起爆コードを送信した犯人を拘束する。これが第一の作戦目標。次にその達成が難しい場合、第二の作戦目標として、敵の要員、可能ならば指揮官、幹部クラスの人間の身柄を拘束する。それによって敵の情報を得ること。その二点の内、どちらかが達成されれば、我々の勝利条件は満たされたこととする。

その過程で我々の前に立塞がる者があれば、すべて速やかにこれを無力化する」

「……地元住民の救出は……？」

「重ねて言うが、それは俺達の任務じゃねえ。地元住民の安全を考えるなら、さつさと仕事を片付ける。他に質問は？」

「人を……」由加里が喘ぐように問うた。

「人を殺すことになるんでしょうか」

「『人』じゃねえ。『敵』だ」

武藤は冷ややかに告げた。

「『犯人』です。『人間』です！」

「心配はいらねえ。お前は引き金を引ける」

「何でそんなこと。っ!？」

「そう調整済みだからだ」

武藤が冷たい眼光を湛えた目で、由加里を見る。

「『調整』……?」

「お前が来る前に、S A T隊員を三人ほど試してみたが、どいつも使い物にならなかった。そいつらはいくまで『警察官』として意識ドセット設定されていて、基本的に『敵』を殺すことを瞬間的に回避する訓練が骨の髄まで叩き込まれていたからだ。『警察の特殊部隊』としては正しいが、『邀撃捜査隊』のフロント・アタッカー前衛要員としては迷惑だ。だから多少射撃が上手いくらいで余計な色のついてないお前を、自衛隊に送り込んだ。そこでお前を、必要な時に躊躇ためらわず引き金が引ける

『兵士』として調整させた」

「な………っ!」

由加里は絶句した。人の人格を何だと思ってるんだ!

「警　　っ!」

叫びかけたそこへ、ヘッドセットから結城の切迫した声が流れた。

『警部!　　まずいです!　　そちらにパトカーが殺到してます!』

「何だと!?!」

耳のヘッドセットを押さえて武藤が叫ぶ。

確かに遠くからパトカーのサイレンが急速に近づいてくる。

「誰が通報した!?!」

『　　グランドスラム　　です』結城が唸るように告げる。

『僕らが見つけた犯人の所在情報を、グランドスラム　　が自己判定して捜査本部に通報。ついでに周辺の所轄からパトカーかき集めてそっちに向かわせたんですよ!』

「一般警察なんざ、数集めたって射的のマトじゃねえか」

『　　グランドスラム　　なりに最大の脅威評価を行った結果です。市街地に立て籠もった重武装の傭兵相手にどうすべきかなんて、誰も対処法の論理ロジックプログラムなんか組んでませんよ』

『現場の人間、聞いているか?』野太いダミ声が割り込んできた。

『私は高尾事件及び新宿歌舞伎町ビル爆破事件の合同捜査本部の本部長を務める、警視庁捜査一課の川本管理官だ。貴様ら、犯人の所在を確認できたなら、なぜ我々に連絡してこない？』

「用がないから、呼ばなかっただけです」

舌打ちしかねない不機嫌さで、武藤が答える。

『今のは武藤警部だな？ その無礼な発言は忘れてやる。今からでも遅くない、犯人逮捕のために我々に協力したまえ』

横で聞いている由加里から見ても、あからさまに尊大な物言いで言い放つ。

「お断りします」武藤は即答した。

「それよりこちらに向かっている連中をすぐに止めてください。単純に屍体を増やすだけです」

『武藤警部、口を慎みたまえ！』

背後でもつと汚い罵り声が複数人数分、聞こえてくる。向こうは捜査本部の大勢を前にして通話しているのか。平巡査の由加里からすれば、本庁の管理官など雲上人もいいところだ。横で聞いているだけで、肝が氷点下まで急降下してゆく。

「失礼。必要なご忠告は申し上げた。結城、記録したな？」

『はい。まあ、一応』

「よし。では、我々はこれから状況に突入します　おい、結城。

もういい、切つちまえ」

『おい、待ちたまえ、武藤警　』

ぶちりという雑音とともに川本管理官との通話が途絶する。信じられないことをする人達だ。改めてとんでもない部署に配属されてしまったことを由加里は実感する。

「結城、今後、この手の益体もないクレームは全部新庄の方に廻せ。こういうのを適当に煙に捲くのがあいつの仕事だ。現場に負担かけんな」

『判りました。以後、そうします』

その間にもパトカーのサイレンがどんどん近づいてくる。少なく

とも、先程の武藤との会話だけでは、川本管理官は現場に向かうパトカーを止める気にはならなかったらしい。

「まずいぞ！ あいつらそのまま突っ込んでくる気か!？」

言った先から、パトカーの車列が目の前を通り過ぎ 先頭車両がいきなりスピンして民家の壁に突っ込む。後続の車輛が玉突きで突っ込んで、次々に衝突する。

「おっ始めやがった!」

不謹慎な笑みで口許を歪ませ、武藤が言った。

事故ったパトカーから、警官がわらわらと這いでてくる。そこへ機関銃の乾いた連射音が続き、次々にのけ反って斃れてゆく。

「攻撃されてる!？」

どこかから銃撃を受けているのだ。先頭のパトカーも、それにやられたのだろう。だが、どこから 道路を挟んで斜め向こう、二メートル先の民家の二階の窓から、ヘルメットをかぶった兵士が軽機関銃の銃身を突き出して発砲している。

「行くぞ、潮。自分から囿になりたいって奴らなんだから、こっちは乗っからせてもらえばいい」

「……………」

非情に言い放つ武藤の言葉を、由加里は聞いていなかった。目の前で銃弾に斃れる警官達の中に、交通課時代の知り合いの姿を見つけてしまったのだ。

「おい、潮！ 何してやがる!」

「……………ダメです」

「何だと？」

「ダメに決まってるじゃないですか!」

叫ぶやいなや、MP7A1を先ほどの民家の二階に向けて発砲する。窓の周囲に着弾し、機関銃の銃身が素早く中に引っ込む。

「バカ野郎!」

ヘルメットの上からぶん殴られ、路上に叩きつけられた。

「自分からこっちの存在ばらしてどうする、このどアホう!」

「みんなを見殺しになんかできません！」

怒鳴りつける武藤に怯むことなく、由加里が叫び返す。

武藤は舌打ちし、忌々しげに告げた。

「立て、このバカ。この場所は敵に知れた。すぐに敵に包囲されるぞ」

09 (前書き)

住宅街での熾烈な市街戦 お待ちかねの銃撃戦バトル。

今回は犯人を連行した向島署でのエピソードです。

次回は1月30日(日) 深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

『フォックス・スリーよりHQ。^{ヘッドクォーター}敵の反撃を受けた。SMGらしき銃撃。一般警察の装備とは異なる模様』

廃工場の事務所で、城島から後を託された分隊指揮官が前線からの報告を受けていた。

「特殊強襲部隊（SAT）が来たか。反撃は継続しているか？」

『一斉射ほどで終息した。目の前でパトカーの警官を掃討したばかりだった。偶発的な発砲だった可能性はある』

「警官隊の突入にまぎれて、浸透突破を図ろうとしているんじゃないか？」

副官が指摘する。

「その可能性はあるな。」

^{ヘッドクォーター}HQよりフォックス・スリー。そこはいい。当初予定通り、後退しつつ第二防衛ラインまで移動しろ。

続けてHQよりオールフォックス。^{ヘッドクォーター}SATと思しき装備の敵が浸透突破を図る可能性がある。各員、警戒を強めよ」

「このどアホうが。自分の仕事忘れて、はっちゃけやがって」

「目の前であんなことされて、黙って見てられません！ 前方クリア！」

「目の前で何万人殺されようが、黙ってなきゃならねえ時は死んでも黙ってる 後方クリア！ よし、そのまま角まで躍進」

背中合せにMP7A1を構えた武藤と由加里は、低い姿勢で路地裏を駆け抜ける。

さつきまで聞こえていたサイレンはぱったりと止み、銃声も聞こえない。さすがに無防備にパトカーを突っ込ませる愚は悟ったのか、後続のパトカーが来る様子もない。先程の銃撃現場の方角から、時

折、バチバチと放電音が聴こえる。都内のパトカーは数年前に全車EVに移行済みなので、引火の危険はないが、感電する警官がいな
いか心配だった。

それ以外は、驚くほど静かだった。昼下がりの住宅街なんてこんなものといえはその通りだが、その背後で重武装の傭兵が暗躍している
と考えるとぞつとしない。

由加里は民家の路地裏の角からMP7A1の銃口を突き出して前方を警戒しながら、背後の武藤に訊ねた。

「警部、この後、どうするんですか？ このまま工場まで」

そこまで言いかけたそこへ、背後ではんつとドアの開く音がした。反射的に振り返ると、自分達と同じようにヘルメットに完全武装の兵士が、民家の裏口から出ようとしてこちらの存在に気づいたのか、ドアノブを手に立ち尽くしていた。

防護ゴーグル越しに互いの視線がかちあった。

頭が真っ白になる。敵 いや、犯人 いや、敵？ 撃たなきや。そう意識するより早く、MP7A1を構えた身体を翻そうとしているのが判る。まるでステージ上のロボットショーを観客席から眺めているような感じ。

どこか他人事のような感覚で、同時に間に合わないことも理解できた。敵の自動小銃を掴んだ右手が、ゆっくりとこちらへ向けられる。間に合わない。間に合わない。間に合わない。間に合わない。

……。

と、敵兵の背後から武藤がMP7A1をフルオートでぶつ放す。
サブレッサー制音器による高音域を殺された銃声と共に、アルミのドアごと銃弾を浴びた敵兵が、思わず体勢を崩す。

そこへ由加里のMP7A1の銃口が敵兵を捉える。「引いた」という自覚もないまま、指が引き金を絞り込む。4・6ミリ×30弾の発射に伴う激しい反動を、全身で押さえ込むように受け留める。本人の自意識とは関係なしに、身体は訓練通りに動いていた。それを呆然と眺めている自分がいる。

正面の由加里からも銃撃を受けた敵兵が、のけ反って前のめりに倒れた。

「う、撃っちゃった……」

「ぼやぼやすんな！」

ドアに駆け寄った武藤が、閃光音響弾のピンを抜いて屋内に放り込む。激しい破裂音とともに鋭い閃光が屋内から溢れ出す。それが消えるのを待つて、ドアのそばの壁に張り付いた武藤が屋内に一斉射叩き込む。即座に反応が銃撃として返ってきた。

舌打ちする武藤の足元で、由加里が先程自分が撃った犯人の首筋に指を当てて言った。

「警部！ この犯人、まだ生きてます！ すぐに手当を」

「……………」

武藤は黙って地面に倒れて苦しむ兵士の背中にMP7A1の銃口を向け、無造作に引き金を絞った。

貫通力の高い小口径高初速の4・6ミリ×30弾は、一般的な戦闘用の防弾装備なら簡単に貫通する能力を有する。防弾ベストで覆われた背中を貫いて、銃弾が兵士の身体を抉り抜く。一瞬の痙攣の後、兵士は不意に動かなくなった。

「……………何てことを……………！」

「防弾装備で固めた敵は、完全に息の根を止めるまで無力化したことにならない。中途半端な情で手を抜くと、後で反撃されて命取りになる」

「だからって ……！」

「敵もそのつもりでくる。ぼけっとしてねえで突っ込むぞ！」

それだけ告げると、武藤は屋内に突入した。

「待つてください、警部！」

慌てて武藤の背中を追いながら、胸で呻く。ここはとんだ地獄だ。こんな地獄に足を踏み込んでしまった己の運命を激しく呪いながら、今はただ生き延びることだけを考えて由加里は走り出した。

『フォックス・スリーよりHQ。フォックス・フォーが殺られた。こちらも現在、敵と交戦中。おそらく先程、銃撃を仕掛けてきた奴だ。装備品からSAT隊員と推測されるが、フォーメーションと動きが妙だ』

回線の向こうで断続的な発砲音や破砕音を交えながら、フォックス・スリーが報告する。

「妙とは、どういう意味だ？」

『どうもふたりぐらいしかないようだ。斥候かもしれんが、そのふたりも連携が鈍い。練度に差があるようだ。だが、片割れがバカみたいに強い。屋内を移動しながらの撃ち合いなのに、弾道が安定して嫌らしいほど収束してくる。外れ弾も家具や調度品を吹っ飛ばして、破片でこっちを追い込んできやがる。市街地での屋内掃討戦でかなり場数を踏んでる熟練兵だ。早く増援を寄越してくれ。長くは持たんぞ！』

「判った。フォック・ファイブとフォックス・シックスがそちらに向かっている。フォックス・スリー、もう少しだけ頑張ってくれ」

『了解。交信終了』

「……どういうことだ？」

「例の報告書にあった グランドスラム 絡みの秘密部隊かもしれん。新設の部隊なら、練度にばらつきがあってもおかしくない」
「なるほど」

分隊指揮官は肯くと手元のタボールAR21のコッキングハンドルを半ばまで引いて、薬室内に収まる金色の薬夾を確認した。

「なら主賓のご到着ってことだな。俺達も手荒く歓迎といこうぜ」

民家を次々に抜けて三軒目のキッチンに辿り着いたフォックス・スリーは、そばにあった冷蔵庫を引倒して即席の防御拠点とすると、すばやくその背後に飛び込んでタボールAR21を構える。

それを追うようにMP7A1の銃撃が飛んできて、冷蔵庫の表面に次々に弾着する。

そのあまりに正確な追尾振りトレースに背筋を凍らせながら、フォックス・スリーは引き金を引き絞る。5.56ミリNATO標準SS109弾の発砲時の反動をリコイル、頼もしく感じながら、銃床ストックを通じて肩で受け留める。小口径高初速のライフル弾が、吸い込まれるように前方にすっ飛んでゆき、MP7A1の銃撃を黙らせる。

だが、殺れてない。それは撃った本人が一番良く判っている。だから、攻め手は緩めない。

胸のホルダーから対人手榴弾を取り出すと、安全ピンを抜いて前方に放り投げる。

屋内戦を前提に短めに切った起爆ヒューズの設定通り、一拍置いて、耳を聳する破裂音と爆風。この距離で手榴弾を使用するとは、敵も予期はしていなかったはずだ。対人手榴弾から放たれた金属スラグの暴風が、少なくとも敵の行動を奪ってくれているものと信じて、フォックス・スリーはキッチンからコタツの置かれた畳敷きのリビングを抜け、そのまま縁側から外へ出ようとした。

「どこへ行く気だ？」

不意に脇から掛けられた声に、フォックス・スリーは反射的に銃口を向けようとしたが、それより先に右の太股を撃ち抜かれていた。そのままバランスを崩して、縁側から裏庭の地面の上に転げ落ちる。しまった。家の中を別ルートから抜けて、先廻りされていたのだ。不覚としかいいようがない。俺もここで終わるのか……？

フォックス・スリーは必死の思いで身を起こし、仰向けになる。そしてこちらを冷たく見下ろす武藤の顔を捉え、大きく目を睜みいた。

「まさか……！ な……なんであんたがここにいるんだ！？ 灰色グレイ

「うるさいよ、お前」武藤は無表情に引き金を引き絞った。

「その名前はとっくに捨てたんだよ」

首筋に指を当てて敵兵が絶命したことを確かめると、武藤は背後を振り返って呟いた。

「……で、うちのバカ新米はどこで何やってやがんだ？」

「うわわわわわわわ！ 来んな来んな来んな　！」

テールブルの陰に隠れた由加里は、前方の空間に向けてMP7A1を盲撃ちする。

慌てて武藤を追って抜けた最初の民家から路地裏に出たそこへ、二人組の兵士とはち合わせして、その場で銃撃戦になった。

隙を見てすぐそばの民家の中に逃げ込んだものの、当然敵も追いかけてきた。現在、リビングに陣取る由加里とキッチンに陣取る敵兵との間で、五メートルもない至近距離での撃ち合いの真っ最中である。

武藤とは途中ではぐれてしまつて、どこで何をやってるかも判らない。通信回線はつながってるのだから、こちらの悲鳴は聞いているはずなのだが、特に指示もない。必然、愚痴は回線の向こうの結城にぶちまけられることになった。

「もう警部は何やってんのよ！」

「警部は現在、敵と交戦中だよ。大丈夫。そつちを片付けたら、きつと助けにくるつて」

「ウソだ。ウソよ。絶対、ウソ。あの人、絶対あたしに恨みがあるのよ。人の人生無茶苦茶にして、きつと面白がつてるんだわ。あたし個人に恨みがないつてんなら、女性不審で歪んだ性癖があんな酷い人格を形成したんだわ。きつとロクでもない過去があるのよ。歪んだマザコンとかロリコンとか。だから、あの歳でまだ独身なのよ！」

「……一応言つとくけど、それ全部警部に聞こえてからね。まあ、銃撃戦しながらそれだけ他人の悪口言えるなら、大丈夫そうだけど」
「大丈夫じゃない！ 死ぬ。死んじゃう。殺されちゃうわよ、あた

し。あいつら、もうバンバン撃ってくるんだから。一回、結城クンもこつち来て相手してみなさいよ！」

『いや、遠慮します』

そっけなく結城が拒絶する。

と、MP7A1の遊底がかちりと空打ちする。

「うわわわわ！ 弾が切れた。弾が切れた。どうすんの？ どうするの？」

『落ち着いて。予備の弾倉マガジンと交換して。いつも訓練でやってることだよ』

「弾倉マガジンの交換、弾倉マガジンの交換 ああ、ない！ さっき使っちゃったんだった！」

『予備弾倉はひとつじゃないだろ。他はどこにしまったの？』

「他？ 他は」

反射的に腰に手を廻して、予備弾倉を収めたポーチを見つける。

「やった、あった！」

あまりの嬉しさに泣きそうになりながら予備弾倉を抜こうとして、頭上に人の気配を感じる。

恐る恐る見上げると、テーブルの上に立つ兵士の構えたタボールAR21の銃口が、冷たくこちらを見つめていた。

「……あ……ウソ……」

確実に訪れようとする死の予感に、由加里は涙目で打ち震えた。

次の瞬間、テーブル上の兵士がいきなり仰け反って、こちらに倒れ込んできた。

「わわわわわわっ！」

驚く由加里をよそに、リビングに飛び込んできた武藤は敵から奪った対人手榴弾をキッチンに放り込む。

破裂音。爆風 室内を覆うもうもうとした煙の向こうから、ふらふらと人影が出てこようとするそこへ、武藤は自然な仕草でMP7A1を向けて射殺した。

「け、警部……！」

感極まった由加里が思わず武藤の背中に抱きつこうとする。そこへ振り返った武藤がMP7A1の銃床ストックで由加里のヘルメットを殴って床に叩きつけると、厚底の軍用ブーツで踏みつける。

「誰が歪んだマザコンでロリコンなんだ、ああん？」

「……聞いてたんですか、警部……」

「当たり前だ！ 同報モードで無様な醜態晒しやがって！」

「うわあああん！ だって怖かったんですよお！」

「さっきまで偉そうに俺に説教くれてたお前はどこへ行ったんだ？」

『みんなを見殺しにできない』だ？ 俺はほんのついさっきまでお前を見殺しにしてやりたくてしようがなかったがな。自分で自分の身も守れない奴が、偉そうに他人様の命の心配してんじゃねえよ」

「痛い、痛いです警部……」

ぐりぐりと軍用ブーツの底でヘルメットを踏みにじられ、由加里が涙ながらに訴える。

「まあ、いい。とっと立ちやがれ」

由加里の手を取って引つ張り上げようとした武藤が、いきなりその身体を突き飛ばして床に伏せる。

続けて銃声が鳴り響き、室内の調度品が次々に弾け飛んだ。

ひとしきり続いた銃撃が一瞬途切れる。そこへ今度は手榴弾が放り込まれた。

「手榴弾！」

武藤が警告の叫びを上げる。由加里も慌ててリビングから板敷きの廊下へと転がり出る。

炸裂音に続いて金属スラグを載せた爆風が吹き荒れ、室内をずたずたに引き裂く。白い爆煙が辺り覆う中、その煙が晴れる前に、軍用ナイフを抜いた兵士が武藤めがけて突っ込んできた。

「！？」

武藤は一瞬の躊躇もなくMP7A1を捨て、肩のホルスターから自身の軍用ナイフを引き抜いた。

敵兵の握るナイフがまっすぐ喉を指して突き入れられる。上半

身を反らしてそれを回避　だが、ごく短い軌道で素早く引き戻されたナイフが、即座に再度突き入れられる。

「くっ！」

攻めあぐねる武藤に対して、兵士は畳み掛けるように攻撃を重ねてゆく。

「警部！」

武藤を支援しようと由加里はMP7A1を向けたものの、両者の位置が近すぎて銃では手出しができない。

「どうしよう……」

「余計な手を出すな！　お前は自分の心配でもしてる！」

紙一重でナイフの刃を避けながら、武藤が叫ぶ。

「でも」

言いかけたそこへ、不意に背後に人の気配を感じた。とっさに振り返るより先に、背後から押さえ込まれてしまう。

背中から腕を廻されて首をロックされる。それを振りほどかんともがくの、相手は更に押さえ込もうとして、もう片方の腕が身体の前に廻される。

と、その腕が由加里の胸を鷲掴みにした。

「いつ!？」

「何だ、女……!？」

「いやああああああああああっ!!」

悲鳴とともに由加里の身体がすつと沈み込む。首に廻された腕を掴むと、柔道の背負い投げの要領で背後の兵士を背中から前方の床に叩きつけた。

「くっ……!!」

着地の瞬間、とっさに受身を取った兵士は、身を翻して即座に立ち上がるうとする。その頭部を刈り取るように、由加里の脚が顎から蹴り抜けた。

その一撃であっけなく意識を吹っ飛ばされた兵士が、そのまま仰向けにひっくり返る。

武藤と闘っていた兵士の意識が一瞬、そちらに散った。

「フォックス・リーダー！」

「おっと、よそ見はなしだぜ」

武藤の軍用ナイフの刃が兵士の喉を切り裂く。笛のような空気の洩れる音とともに、真っ赤な鮮血が兵士の喉から吹き出した。

「ご……が……っ！」

軍用ナイフを取り落とし、喉を押さえながら二、三步前進すると、兵士はその場でばったりと倒れ、やがて血溜まりの中で動きを止めた。

「これで終わりか……？」

倒れた兵士の軍服でナイフの血糊を拭ってから、武藤は肩のホルスターに軍用ナイフを収めた。

「そっちはどうなってる？」

「た、逮捕です！ 逮捕しました！」

見れば、倒した兵士をひっくり返すと両腕を背中に廻し、その上に由加里が乗って体重で押さえつけている。妙に興奮気味なのは、被疑者の逮捕なんて生まれて始めての経験だからだった。

由加里は瞳をきらきらさせて訊ねた。

「警部、手錠持ってますか？」

「ねえよ、そんなもん」

武藤がぶつきらぼくに答える。

「ええー、持ってないんですか？ 警察官なんですよ、あたし達！ 犯人逮捕の時に手錠使うじゃないですか。そりゃあ、装備の引渡しの時にもらえませんでしたけど、警部なら幹部捜査官なんだから持ってるんじゃないかって」

「だから、仕事が違うって何度言やあ判るんだ、手前は ほら、どけ。拘束する」

武藤は兵士の背中から由加里をどかせると、ポケットから出した

プラスチック製の白い紐で手首と親指、小指をしっかりと結びつけた。

「おら、立て、この野郎」

兵士を引き起こすと、念のため由加里に銃を向けさせたまま、ヘルメットと黒い目出し（バラクラナ）帽を引き剥がす。短く刈り込んだクールカットに、狐のように細い瞳。そこにひどく醒めた眼光を宿していた。

だが、兵士の素顔を目にした武藤は、ふんと鼻を鳴らして言った。

「……久しぶりだな、元気にしてたか？」

「はい？」

何を言いだすのだろうか？ 由加里は首を傾げた。まるで久しぶりの再開を遂げた旧知の友人にでも挨拶するような言い草だった。

あるいは、事実そうだったのか、兵士は唸るような声で告げた。

「……武藤さん、あんただったのか。どうりで俺のチームが手もなく殺られるはずだ」

「鍛え方が足りてねえんだよ」

そっけなく断じて、兵士の腕を掴む。

「積もる話もあるが、それ以上にお前には聞きたい話が山ほどある。付き合ってもらおうぞ」

「武藤さん、一応これでも俺、あれから出世して士官待遇ってことになってるんすよ。捕虜になるんなら、士官としての待遇を期待させてもらってもいいスか？」

「アホか」武藤は冷ややかな視線で兵士を見た。

「手前らはただのテロリストだ。端からそんなものは期待するな」

「言ってみただけですよ。変わんないスね、武藤さんは」

そう言っつて、兵士は声もなく笑う。

「あの、警部、お知り合い……なんですか？」

「まあな、昔の部下のひとりだ」

「部下？」

傭兵のテロリストが「部下」？ 昔、何をしてたんだ、この男は？

事情を更に詳しく訊こうとした矢先、室内に黒尽くめの一団が雪崩れ込んできた。

いずれも由加里達と同様に全身をヘルメットとプロテクターで完全武装し、同じMP7A1を構えている。

反射的に自分のMP7A1を構えかけた由加里に、武藤は「やめろ」と制した。

「よく見る。SATだ」

「え……？」

だがSAT隊員達は由加里達を包囲するように展開し、銃口も突きつけたままだ。

「全員、武装を解除し、我々の指示に従いたまえ」

SAT隊員達の背後から、くたびれたコート姿の中年男性が現れた。

「合同捜査本部の町田捜査官だ。この場を仕切らせてもらっている。さあ、犯人をこちらに引渡してもらおうか」

「……全部終わった頃に押っ取り刀でやってきて、他人の獲物を横取りですか。呑気でいいですな、本庁の皆さんは」

「先走って所轄や市民に無用の被害をもたらしたのは、邀撃捜査班の方じゃないかね」

「そういう話になってるわけだ、本庁では」

武藤がひどく好戦的な笑みを浮かべる。その右手が拳銃を収めた腰のホルスターに掛かっているのに気づき、由加里はぎょっとしたいや、待て。よもやここでドンパチ始めようって肚じゃないだろうな。由加里の耳に、この日、もう何度目かも考えたくない血の気の引く音が聴こえてきた。

「まあ、待て」危険水域まで上昇しつつあるその場の緊張をほぐすように、町田が苦笑した。

「犯人の引渡しについては話がついてる。君らの上司に確認したまえ」

「新庄！」武藤が咆哮する。

「どづいうことだ、こいつは？」

『この場は一旦、犯人の身柄を引き渡せ。本件は今のところ、捜査の主導権が合同捜査本部にあることになっている。犯人取調べの優先権は今の我々にはない』

「判ってもらえたかな？」

「……………」

この場の人間を塵みじんにして、なお飽きたらないというくらいの不機嫌な表情で舌打ちすると、武藤は兵士の腕から手を離した。即座にSAT隊員のひとりが兵士の身柄を自分たちの方へと引き寄せる。

「武藤さん、何か、そっちもいろいろ大変みたいスね」兵士がへらへらと笑いながら、声を掛ける。

「いっそ、こっちへ来たらどうスか？ 今からでも歓迎しますよ」

「うるせえよ」

むつつりと武藤は答えた。

10 (前書き)

向島署に舞台を移してのインターバルパート。

武藤は本当に酷い上司ですけど、この先もっと酷くなります(はは)。

今回は岩代の尋問を通じて明らかになる武藤の過去話です。

次回は2月6日(日)深夜零時の更新を予定しています。

よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「岩代清二。三〇歳。静岡県出身。静岡県立清水北高校卒業後、派遣会社経由で地元の自動車工場に機械工として勤務。その後、不況による派遣切りに遭って失業。上京して警備員などをしばらく続けた後、一〇年前に実家の人間に『タイのコールセンターで仕事があるから』と告げて出国。以後、消息不明。間違いないな？」

「……………」
「一〇年間、海外をほっつき廻った揚句、テロリストになってご帰還か。いいご身分だな、ええ？ 貴様、一体何しに帰ってきた？」

「……………」
「聞いてんのか、貴様っ！」

向島署内の取調室で逮捕された兵士 岩代清二は、居並ぶ強持での刑事達に囲まれながら、うつそりと口許を歪めて言った。

「カツ井、出ないんすか？」

「はい、これでも飲みなさい」

「……………」
「ありがとうございます、先輩」

制服姿の香織からハーブティーの入った紙コップを渡された由加里は、小さく頭を下げた。

現場で拘束された犯人一味の有力被疑者、岩代清二は、あの後、ひとまず現場から程近い向島署に連行され、取り調べを受けている。武藤と由加里もそれに同行する形で向島署にやってきたものの、被疑者との接見は捜査本部から拒絶された。武藤と本庁の町田捜査官との間で、再度胸倉を掴み合うような「話し合い」がなされたが、大方の予想通り物別れに終わった。

その後、武藤は犯人の身柄を取り戻そうと、新庄や各方面と連絡を取って悪戦苦闘しているようだが、依然状況は変わらず。

その間、由加里はやることもないので、勝手知ったる古巣の交通課でばーっと佇んでいた。ちなみに何で交通課かといえば、刑事課や臨時の捜査本部の設けられている大部屋からは丁重に立ち入りを断られてしまったからである。彼らからすれば、武藤も由加里も招かれざる客に過ぎない、ということらしかった。

なお、元々追跡の対象だったレクススは、廃工場に車輛だけ取り残される形で発見された。SATで付近を捜索した結果、近くのマンションに蓋を開けた形跡が残っていた。ここから離脱した犯人がいるらしい。だが、ブービートラップの可能性があるので、そのまま後を追うことは断念された。

外はもうとつぷりと陽が暮れて、真っ暗だった。本来なら一般職の職員達はとつくに退署している時間だが、今日ばかりは人の出入りが衰える様子はない。市民からの問い合わせの電話も引つ切りなしに掛かってくる。署の外も、殺到するマスコミで騒がしい。今夜の所は、ずっとこの騒々しさが続くのだろう。

「本当、大丈夫？」

「ええ、まあ、なんとか」

心配を掛けたくなくて、無理をして笑ってみせる。

何にしても、今日一日でいرونなことが起こりすぎた。さすがに頭がパンクしておかしくなりそうだった。

「……根岸さん達だけだね」

初動の出動で駆けつけたパトカーに乗り合わせ、犯人側の待ち伏せにあつて銃撃された向島署交通課警官の名前を、香織は口にした。

「やっぱり、ダメだったって」

「……根岸さん、お子さんまだ小さいのに」

紙コップを握る力を強めながら、由加里は呟いた。死んだ根岸の幼い娘が通う近所の小学校の下校時刻に合わせて、さりげなく正門前を巡回コースに入れるのは彼女達の重要な日課のひとつだった。

パトカーの存在に気づけば、それだけでスピードを落とす車もある。たまに娘さんの姿を見かけてそれを報告すると、照れたような誇ら

しげな表情をするのが印象的だった。そうか、その根岸さんも死んだのか。

「火傷するわよ」

そう言つて、香織が紙コップを取り上げる。

「まあ、でも仇を取ってくれたんだもんね、由加里達が」

「……仇……？」

自分の放った銃撃で仰け反る犯人の姿を思い出した。そうだ、あたしが撃つたんだ。止めを刺したのは武藤だったが、生きた人間に向けて引き金を引いたのは、勿論、これが始めてだった。

「人を殺す」という行為への畏れや生理的な拒否感とはまったく切り離されて、自分の身体は自動的に引き金を引き絞っていた。これが武藤の言った自衛隊研修の成果なのだろうか。そしていずれは武藤のように、動けなくなつた怪我人でも平気で撃てるような人間に自分はなつてしまふのだろうか。……。

何か、自分の中で、今の自分とは異なるもうひとりの別の自分が育っているようで、気持ちが悪かった。

それを察したのか、香織が先廻りして謝る。

「ごめんね、嫌なこと思い出させちゃった？」

「いいえ。すみません、気を遣つていただいて」

「いいのよ、水くさい。そんなことより、あんたがそんな格好で署に顔を出したときは驚いたわよ」

「はあ……」

言われて、改めて自分の姿を見返す。結局、着替えるタイミングを逃したまま、戦闘装備で向島署まで来てしまつていた。たまに前を通りかかる職員が、ちらちらとこちらに視線を投げかけてくるのが恥ずかしい。そう言えば、着替はあのまま武藤のBMWの中だった。もしかすると、まだ現場に放置されてるんじゃないかな。

「それは何？ S A Tか何かの制服なわけ？」

「ええと、まあ、そんな感じで……」

守秘義務があつてあまり詳しく話せないため、適当に濁してみる。

「それと同じ格好で一緒にきたあの背の高い男の人、あれあなたの上司？」

「はあ……すみません」

何だかよく判らないが、とりあえず謝っとく。

「いやあ、凄いわねえ、あれ。本庁の人と胸倉掴みあつて怒鳴り合つてたわよ。廊下まで聴こえるんだもの。びつくりしちゃった」

本当にすみません、だ。人の古巣で何やってくれてんだ、あのバカ上司は。

「あんなのが上司だと大変そうよね。あんな気が小さいわりに一言余計だから」

そう見られてたのか。いや、一言余計なのは自分でも多少自覚がないでもなかったが。

「まあ、どこに配属になったか知らないけど、ちゃんとやれてるよ。うで一安心よ。何だか、娘を嫁に出した気分だわ」

「娘って……歳だつて大して変わらないじゃないですか」

「そうよね。せめて妹にしときゃ良かった」

そう言つて笑う香織の笑顔に、由加里はやつと緊張をほぐすことができたような気がした。

「そこにいたのか、潮」

「警部……」

「づかづかと遠慮なく人ごみをかき分けて、武藤が交通課までやつてきた。」

「本部に戻るんですか？」

「いや、しばらくここに待機だ」

「待機……ですか？」

「そうだ。捜査本部が一通りの取調べを終えたら、あいつを引き取つて邀撃捜査班で尋問する」

「捜査本部がよく納得しましたね」

「捜査本部が納得しようがどうしようが、知ったこつちやねえ」驚く由加里に、武藤はぶっきらぼうに言い放った。

「引き渡さざる得ないよう、新庄に上を動かさせたんだよ。あいつに棒給分の仕事させただけだ」

何をやらせたんだらう。知りたくないな、と由加里は心の底から思った。

「ま、どの道、すぐにあいつらの手に負えなくなって泣きついてくるだらうがな」

そう言つて、どっかと交通課のソファ―に腰を下ろす。

どうしてこの上司はどこでもこんな偉そうなのだらう、と呆れて見る横で、先程の本庁の町田捜査官が仏頂面でやってきた。

「ほら、おいでなすつた」

悪戯の成功した小学生みたいな意地の悪い笑みを浮かべる武藤に、町田が「ついて来い」とばかりに顎をしゃくる。口も利きたくないのだらう。よく判ります、その気持。

などとひとりで肯いていると、「お前も来い」と耳を掴まれて引っ張られる。

「痛い痛い、痛いです！ 離してください、警部っ！」

「うるせえ、とつとと歩け、このどアホう」

「頑張つてね、由加里」

にこやかに手など振つてる香織に見送られ、由加里は交通課を後にした。

「岩代が、貴様が相手でなければ何も話さんと言つてる」

つい先程まで立入禁止扱いだつた刑事課にふたりを連れ込み、町田は切り出した。

「そうかい」

武藤が尊大な態度で答える。

「貴様、犯人と顔見知りなのか？ 何で、あいつがあんたの名前を

知ってる？」

「さあな、どこかで擦れ違ったかな」

「ふざけるな！」

周囲を囲む捜査一課や所轄の刑事達が、一気に険悪なムードを募らせてゆく。既に警官に犠牲者が出ていることもあって、元より空気が殺気だっている。そこへ喧嘩腰の武藤がやってくれば、どうしたって場の雰囲気は荒れ気味となる。

武藤に引きずられて、その真っ只中に放り込まれた由加里は、真つ青な表情でガタガタと震えていた。そういや、ウサギってストレスで死ぬんだっけ、などと、どうでもいいことまで考える。

「一〇年間、海外で消息不明だった男と、二〇年間、小笠原で派出所勤務だったはずの男が、どこでどうやって擦れ違うっていうんだ？」

「俺が知るか。俺の名前を出したのは向こうだ。あいつに聞けばいいだろう」

「それで口を割らんから、こうして頭を下げとるんだろが！」

さすがにそれは「頭を下げる」の用法が間違っているように思ったが、本庁の幹部捜査官相手に突っ込みをする度胸は由加里にはなかった。

「あんたらが手こずってるなら、とつとと邀撃捜査班に引き渡せ」

「移動命令の話をしてるつもりなら、貴様の思いどおりにはいかんぞ」

町田もまた、怯むことなく告げた。

「身柄の引渡しはこちらの取調べが終わったら、という条件だ。我々が納得しなければ、いつまでもこのままだ」

「ふん。そうくるか　まあ、いい。相手をしてやる。ただし、こちらからも条件がある」

「条件、だと？」

「そつだ」武藤は肯いた。

「取調べの録画はなしだ」

「……ちよつと待て」町田は眉間に指を当てた。

「取調べ可視化法の導入で、録画の裏付けのない自供は公判では使えない。録画なしに自供させても、参考意見にもならんぞ」

「犯人側は グランドスラム をクラッキングして、防犯カメラなどの情報を抜いている」

周囲の刑事たちが、一斉にざわめきだす。

「取調べ内容が録画されて グランドスラム にアップされたら、そのまま内容が犯人側に筒抜けになる可能性がある」

「信じられるか、そんな話！」

「裏付けの根拠は後で邀撃捜査班の若いのに説明させる。今はここで俺の話を信じるかどうかだ」

「くそっ！ だとしても我々だけでは判断できん。地検（地方検察庁）とも話し合って」

「地検は相手にしなくてもいい」武藤は何でもないことのように言った。

「どうせこの事件は裁判には掛けられない」

「何だと？」

「こいつは国の安全保障に関わる、高度な政治判断が関わっている。国家はその存亡のぎりぎりの局面では法的正当性コンプライアンスより政治的統治力ガバナンスを優先する。上に問い合わせてみる。だから、あいつの身柄は遊撃捜査班で預かることになったのさ」

武藤が悪魔のように声もなく嗤う。

「……判った。取調室のカメラは止めさせる」

「町田さん！」「こんな奴の話なんか」

「うるさい！ 責任は俺が取る！」町田は周囲を一喝して黙らせた。「その代わり、取調べには我々も同席させてもらうし、調書も取らせてもらう。いいな？」

「いいぜ。好きにしな」

冷たい笑みを浮かべる武藤の横顔を眺めながら、こんなことやつてるから遊撃捜査班は嫌われるんだな、と由加里は深い諦観とともに

に胸で呟いた。

「武藤さん、待ちくたびれましたよ、本当。ここ、カツ井もでないんすよ、カツ井。取調室って言ったらカツ井じゃないスか。ガツカリですよね」

「……調子良さそうじゃねえか、岩代」

取調室のパイプ椅子に腰掛けながら、武藤は眼前の岩代に言った。「武藤さんも元氣そうで何よりです。まあ、元氣が有り余ってるのは、俺のチーム塵みじんにしてくれたの見れば、よく判りますけどね」

「ふん。大方、部下を甘やかして、訓練に手を抜いてたんだろう。部下を泣かし倒すくらいじゃねえと、実戦じゃ使い物にならねえ」

普段からそんなこと考えてるのか。勘弁してくれないかな、と由加里は胸で呻いた。

「ついでに紹介しとく。こいつが今の俺の部下の潮だ」

「あ、どうも……」

つられて思わずぺこりと頭を下げしてしまう。ふと横を見ると、町田が苦い表情で睨んでいた。そりやそうだ。居酒屋で大学の後輩に職場の部下を紹介してるんじゃないんだから。

「お前をぶっ飛ばして拘束したのは、この女だ。近接格闘戦（CQ B）であっさり女にやられてんじゃないじゃねえよ」

「いや面目ない。で、俺らの関係って、こちらの皆さんには説明済みなんですか？」

「いいや」

「話しちゃってもいいスかね？」

「好きにしる」

突き放すような武藤の言葉に、岩代は声もなく笑った。

「じゃあ、まず俺が日本を出たあたりからですかね」

11 (前書き)

逮捕された傭兵・岩代の過去　そして、武藤の正体。

また酷い話だなあ、と思いつつ、奴隷みたいな扱いの戦場労働者って実際にいるからなあ……。

次回は……戦争開始です。

次回は2月13日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

国内で喰い詰めた岩代がタイに行くことになったのは、警備員の仕事で知り合った友人の紹介だった。

距離を問わず電話料金均一のIP電話の普及のお陰で、コールセンターの業務も人件費の安い海外にどんどんアウトソーシングされている。だが、国内向けのサービスだけに、やはり日本語の話せる人間でなければ役に立たない。そこで、現地のコールセンターに日本人を集めて運営しているのだ、と。

当然、国内よりは貰える賃金は低くなるが、日本より物価がはるかに低いので生活はぐっと楽になる。向こうは食い物もうまいし、女も可愛いのが揃ってる。日本でこんな糞みたいな生活を続けるくらいなら、さつさと海外に飛び出した方がましだ。そうじゃないか？

静岡にいた頃は工場の寮に住んでいたが、そこを追い出されてからは安いネットカフェ住まいの毎日が続いていた。住民票がないとどこでも雇ってもらえないというので、こっちに住む高校時代の友人のアパートを名義に一応届け出は出していたが、上京初日に泊めてもらったくらいで実際にはほとんど足を向けていない。彼女持ちの友人は口では気にしていない風だったが、迷惑に感じているのは明らかだった。いや、あるいはこちらが必要以上に引け目に感じていただけだったのかもしれないが。

本当はすぐにもアパートを借りるつもりだったのだが、仕事もろくに見つからない身では、敷金すらままならない。

やっと見つけた路上警備の仕事も、天候に左右される上に、公共事業抑制のあおりで仕事そのものが減っていた。体調が崩れた日にも有給などあるはずもない。雨や雪の日など、やはり終日路上に立っているのは辛く、あまり長くは続けられないな、と思っていた矢先だった。

それでも海外で働くことに躊躇いはあった。タイ語はおるか英語

だって満足に話せない。だが、国内でこのまま過ごしていても、何の展望もないのも事実だった。住むところさえないこの身では、簡単にホームレスに転落しかねない。

結局、渡航費用を前借りできると言われ、それが決め手になった。同じように誘いに乗った二〇代から四〇代くらいの男たち三〇人ほどと一緒にバスに載せられ、成田に向かう。車中で「まとめて手続きする」と言われ、パスポートを取り上げられた。以後、そのパスポートを目にすることはなかった。

成田から、聞いたこともないアジア圏の格安航空会社の機体に乗せられて、日本を出た。狭いシートにぎゅうぎゅう詰めになんてきつかったことと、地上を離れるときのふわりと身体が浮く感覚は今でも忘れない。海外に出た経験などなかったし、飛行機に乗ったことさえなかった。パスポートを持っていたのは、たまたま身分証明書代わりに取っていただけで、車の免許を取るより安かったからというに過ぎない。

やがて飛行機はタイに着いたが、ここでは降ろしてもらえなかった。そのまま燃料を補給してドバイへ飛び、そこで機体を乗り換えて、最終的に連れてこられたのはバクダッド郊外の米軍基地だった。そこで浅黒い肌のエージェントが怪しげな日本語で「これから建築現場での作業に従事してもらおう」と言い出した。つまり、危険な紛争地帯での建築工事現場での作業をやれというのだ。

「話が違つ」と喰ってかかった者もいたが、銃を突きつけられて黙らされた。逃げ出したくても、パスポートも取り上げられた身ではどうにもならない。第一、言葉も通じないイラクで、どこへ行けば日本行の飛行機に乗れるのか判る人間はひとりもいなかった。

こうして、イラクのあちこちを連れ廻されて、そこで米軍やイラク軍の陣地構築や、戦場清掃をやらされた。体の良い奴隷扱いだつた。粗末な食事とぼろぼろの作業着があてがわれ、わずかばかりの賃金は酒と仲間内の賭け事ですぐになくなった。時折、作業中の事故で怪我人が出たが、治療をしても作業に復帰出来そうにないとな

るとまともな手当も受けさせてもらなかった。その内に、不発弾に触れて数人単位で犠牲者が出たが、しばらくして新人が補充されただけだった。やはり日本から騙されて連れてこられた口で、半ばパニック状態に陥っている彼等に自分の置かれた状況を理解させるのはいつも骨だった。それも何度か繰り返し返す内に、いい加減、説明するのも嫌になってきて、ほっとかれるようになった。

そんな生活が半年も過ぎた頃、夜中に叩き起されて皆でトラックの荷台に詰め込まれた。一晩中、荷台で揺られて到着したのは何も無い砂漠のど真ん中だった。ここに穴を掘って、陣地を造れと言う。言われるままに硬い岩盤を砕きながら苦勞して陣地を造ったら、出来上がる頃には、彼等を連れてきたトラックごと現場監督が消えていた。

「この陣地に入るイラク軍部隊を呼んでくる」ということのようにだったが、待てど暮らせど帰ってこない。

そここうする内に陽も暮れ、急激に気温も下がってきた。勿論、暖房機器などない。毛布の一枚もないまま、がたがたと歯の根も合わないくらい震えながら、陣地の中にもって皆で肩を寄せ合って暖を取った。

「もしかして、ここに俺達は捨てられたんじゃないか」と誰もが予感していたが、口に出すと現実になってしまうような気がして、誰も言い出せなかった。その代わり、空きっ腹を押さえながら、日本に戻ったらずまず最初に何をやるかを語り合った。その時、自分が何を言ったのかは覚えていない。だが、誰かが「腹いっぱいカツ丼を喰うんだ」と言っていたことだけは覚えている。

空を見上げると、日本では見たこともないほどの数の星が瞬いていた。降るような星空というのはこういう夜空のことをいうのかと思っ

た。そして、何でこんなことになってしまったのだろう、と思っ

た。カネがないからだ。俺にはカネがなかった。カネがないから、カネになる技術を身につけることもできなければ、カネになる仕事に

もありつけなかった。だから、カネにならない仕事にしか就けず、拳句、こんな地の果てで薄汚れた男たち同士で息を潜めて暖を取っている。

俺はこのまま虫けらのように、地べたに張り付いたまま死んでゆくのか。

星空の美しさと自分達の置かれた絶望的な状況のコントラストに、気が狂いそうだった。

だが、本当に絶望的な悪夢はその後に訪れた。

うとうととしかけたそこへ、不意に鋭い閃光が塹壕を満たした。

最初は夜が明けたのかと思っただが、痛みすら感じるほどの鋭い光は人工のものに他ならない。

何が起こったのかもよく理解出来ないまま、次にぼんつと気の抜けた音。そして、何かがちらに落下してくる甲高い音が続いて、耳を聳する爆発音が塹壕を覆い包んだ。それが迫撃砲による攻撃であることを理解したのは、大分後になってからのことだ。その時は誰一人、何が起こっているのかも判っていなかった。ただ抱き合っただけで悲鳴を上げ続けるしかなかった。

そしてひとしきり続いた激しい爆発音がやんでほっとしたかと思つたら、今度は男たちの野太い怒声が聞こえてきた。凶暴な獣の群れが叫んでいるような声。聴いているだけで威圧され、逃げ出したくなる声だった。

その声はどんどん近づいてきて、そしてついに自動小銃を構えた兵士達が塹壕に雪崩込んできた。

兵士達は塹壕内に人間を見つけると、手当たり次第に銃を撃ち、銃剣を突きつけた。悲鳴を上げながら、男たちは文字通り虫けらのように殺されていった。降伏を試みて両手を上げた者もいたが、言葉が通じない。容赦なく刺殺され、塹壕内に突き落とされた。慌てて塹壕から逃げ出そうとした者も、背中から撃たれて死んだ。

三〇人ほどいた日本人作業員達は、それぞれの死に様で次々に命を落としていった。

岩代は早い内に、死んだ振りをして別の作業者の屍体の下に潜り込んだ。そのお陰で、兵士達の最初の襲撃では殺されずに済んだ。だが兵士達は作業者をどうあつても塵にするつもりなのか、屍体をひとつひとつひっくり返して止めを刺してゆく。

すぐに自分の番が来るだろう。恐怖と絶望に叫びだしたくなるのを必死で堪える。こうやって必死に堪えていれば、何かの奇跡が起きて助かるかもしれない。だが、奇跡など本当に起きるのだろうか。俺の人生にそんな奇跡なんてものが本当にあるのなら、そもそもこんな場所にいやしない。俺はこのまま、ここでこの得体の知れない兵隊に殺されるために生まれてきたのか。……。

恐怖よりも悔しさで涙が溢れてきた。

ふざけるな、と思った。何で俺がこんな死に方をしなくてはならないのか。

悔しさは簡単に怒りに転化した。こうなったら、叶わぬまでも一矢報いねば気が済まなかった。仲間の屍体の下で、石を掴み、握り締める。自分の番が来たら、こいつを兵隊に投げつけて

決意を固めて、その時を待っていたそこへ、乾いた銃声が鳴り響いた。

至る所で銃声と異国の怒声、悲鳴が聴こえ、やがて終息した。

何が起こったんだ……？

恐る恐る屍体をどけて、身体を起こし、周囲を見廻す。

米軍基地でよく見かけた特殊部隊のような装備を身に纏った男が立っていた。お仕着せの装備に無理やり身体の方を合わせているような一般兵と違い、高価な装備を機能的に装着している。米軍？

だが、男は日本語でそっけなく呟いた。

「なんだ、生きてる奴がまだいたのか」

それが武藤との出会いだった。

「ちょっと待て。何で、お前、イラクなんかに行ったんだ？」

「そうですね、警部。どういう事なんですか？」

「うるせえよ。黙って聞いてろ」

身を乗り出して訊く町田と由加里に、武藤がうんざりとした声で返す。

「この人はね、元々、米軍や日本政府の下請けで準軍事作戦業務にパラミリタリー・オペレーション従事する民間軍事会社（PMSCs） オリオン・ディフェンス・コーポレーション（ODC） に所属して、イラクやアフガニスタンで活躍してたんですよ」

武藤に代わって、岩代が答える。絶句しつつ、由加里が訊ねた。

「……小笠原の派出所勤務つてのは嘘だったんですか？」

「決まってるじゃねえか、どアホう」

「なら、警視庁の人事データベースに載ってた記載は全部、嘘っぱちか！？ どうやって、そんなことができたんだ？」

「それを許可できるレベルの人間が、許可をしたっつーだけの話だ」

「どんなレベルの人間だ、それは！？」

「言わせんな、そんな話」

むすつと武藤が答える。

「まあ、当然でしょう。この人は いや、俺達は、この国の憲法九条と国際軍事貢献の矛盾の尻拭いをし続けてきたんですから。全部表沙汰にしたらこの国がひっくり返りますよ」

喉を鳴らして唾う岩代を睨みつつ、町田が訊ねる。

「さつき貴様が口にしかけた『政治』つてのはこのことか？」

「……この国は憲法九条で『戦争放棄』を謳いながら、海外でのPKF任務を増大させ、その一方でひとりも犠牲者を出したくないという矛盾しきつた願望に囚われている。まっとうに考えれば、有り得ないその願望を叶えるために、外務省と防衛省が金を出しあつて日本人傭兵を集めて作ったのが民間軍事会社（PMSCs） オリオン・ディフェンス・コーポレーション（ODC） だ。」

このODCは自衛隊PKF任務の支援業務として、現地武装勢力の掃討作戦や、誘拐事件被害者の奪還、紛争地帯での自衛隊や外務

省要人の警護などの業務を請け負っていた。それ以外では、自衛隊が動かせない事案で米軍やCIAの支援業務も行っている。まあ、確かに存在が知れただけで政権の二つ三つは吹っ飛ぶわな。

俺はそこに二年前まで役員待遇で所属していた。こいつは、その時の部下のひとりだ」

「俺だけじゃないスよ。今日、この人に殺られた連中は、皆、新兵の頃からこの人に育てられた奴らばかりだ。いつから気づいてたんスか？」

「初めからだ、バカ。俺が教えてた頃から戦術の組み立てに進歩がねえ」

「知ってて、塵みじん、ですか？」

「俺に銃を向ける奴は、全部敵だ」

「武藤さんらしいや」

岩代が喉を鳴らす。

信じられない。由加里は言葉もなかった。この人達は、顔見知りで殺し合いをしていたのか？ それで平気に会話できるのか？ どんな神経をしているのか。とても付き合いきれないと思った。

「……それで手前ら、日本で何がしたいんだ？」

「復讐……かな？」岩代は呟くように言った。

「知ってるでしょう。俺も、他の連中も、ODCに所属する連中は、どいつもこいつも、この国を追い出されたり、見切りをつけた連中ばかりだ。むかつきますよ。この国で呑気に平和面して生きてる奴らが。自分がどんなに他人を踏みにじって生きているかも自覚がない。そんな奴らに、『現実』って奴を思い知らせてやるために、俺達はこの国に戻ってきたんですよ」

「……………」

剥き出しの憎悪をぶち撒けるかのような岩代の言葉に、由加里は戦慄した。この憎悪が、何十人もの人々を殺め、傷つけたのだ。こんな憎悪を、自分たちは相手にしなればならないのか。

だが、その言葉をつまらなさ気に聞いていた武藤は、ぽつりと告

げた。

「岩代、手を出せ」

「手、ですか……?」

「ああ」

岩代が訝しげに差し出した右腕の中指を掴むと、武藤は無造作にあり得ない方向にへし折った。

「……………っ!」

「警部!」「おい、何をやってる!」

「寝惚けたこと吐かしてんじゃねえぞ、岩代。手前のくだらねえ与太を実現するために、カネ出す物好きがいるか! 貴様ら、一体どこの誰に雇われた? そいつの狙いは何だ?」

凄む武藤に、岩代は脂汗を流しながら笑ってみせた。

「…………へへっ、知らないでしょうけど、俺、あれから美人で金持ちのマダムをパトロンに見つけたんすよ。これが金髪バッキンでパイオツもホルスタインみたいにデカイマダムで、俺が甘えるといくらでもカネ出してしてくれましてね」

「まだまだ調子よく舌が廻るじゃねえか。もう一本、いつとくか?」

「ちよつと、ダメですよ!」「いい加減にしろ! 貴様!」

由加里と町田が慌てて武藤を押さえにかかると。

「くそ、拷問なんか始めるようじゃ、取調べは打ち切りだ!」

「指の一、二本へし折ったくらい、拷問の内に入らねえよ」

「イラクじゃどうか知らんがな、ここは日本なんだよ!」

町田が唸るように怒鳴る。

それを聞いて岩代がまた愉しげに喉を鳴らした。

「いや、本当、この国はいい国ですよ。つくづく、ぬるくて」

「岩代……」武藤は瞳を冷たく細めて言った。

「お前を拾った時のことだがな」

「? あの時の事がどうかしたんですか?」

「あれは始めから米軍の作戦だった」

「…………? 何を?」

「あの時、米軍は核開発絡みで、何らかの警告をイランに与える必要にかられていた。だが、そのきっかけが見つからずに焦っていた。そこで出入の建設業者を使って、イランとの係争地帯に野戦陣地を作らせてイラン軍を挑発することになった」

「……そんなことだろうと思ってましたよ。別に驚きやしません。それにあの後、米軍がばっちり空爆して俺らの仇を討ってくれましたからね」

「ならば、何で俺達があの場合にいたと思う？」

「……………！」

岩代の思考がある結論に達した。はたと顔を上げ、愕然とした表情で武藤を見る。

「まさか……………!?!?」

「そうさ。イラン兵が非武装のお前らを塵みぢろしにする場面を映像に収めるため、そして事が終わったらイラン兵を塵みぢろしにして、イラン軍の更なる動員を引き出すためだ。ついでに付け加えれば、生贄の羊が喰い詰め者の日本人だと後から判ったんで、後腐れないように屍体を始末しておいて欲しいとの外務省からの要請に基づいて、俺達はあそこにいたんだよ。お前が生きていたのだけが、唯一の誤算だったかな」

「……………！」

嘲笑せせりわいうかのような武藤の言葉に、由加里は強い吐き気を覚えた。

同時に今度の事件を通じて一貫して感じていた違和感の正体が理解できた。人の命が本当に何の意味も持たないと考えている連中が引き起こした犯行なのだ、今度の事件は。

そう、それは多分、この上司と同じように

「武藤……………いや、灰色鷹グレイホーク　っ！」

岩代がいきなり椅子を蹴って、武藤に殴りかかる。

が、武藤は待ち受けていたかのようにわずかな体捌きでその攻撃を避けると、逆に見事なカウンターで岩代の鼻柱に拳をのめり込ませる。岩代の身体はそのまま背後の壁に叩きつけられ、床に崩れ落

ちた。

床の上の岩代を見下ろしながら、武藤は吐き捨てるように言った。

「その名前は捨てたって言うてんだろっが」

「警部!」「いい加減にしろ!」

町田が慌てて岩代に駆け寄る。

「大丈夫か、おい」

町田の身体を片手で掴んで岩代が起き上がろうとする。もう片方の腕で鼻から溢れる出血を押さえながら、岩代は問うた。

「……武藤さん、あんた何でそっちにいるんですか？ あんたは、今こそボスのそばにいるべきなのに」

「……そうか。城島も来ているのか。そうだろうな」

肯きながら呟く武藤に、岩代は喉を鳴らしながら言った。

「すぐに会えますよ。すぐにね」

「そうかい。そいつは楽しみだ」

気のない口調で答える。

武藤はそれ以上、何も言わず、由加里と町田を残して取調室を後にした。

12 (前書き)

向島署に襲い掛かる傭兵部隊。為す術も無く虐殺されてゆく報道陣と警官たち。

一瞬にして戦場と化した向島署から、由加里たちは脱出できるのか……。

さあ、本格的な修羅場に入ります。

今回は……更にヒートアップ！

今回は2月20日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「ふざけるな！ 何のつもりだ、貴様！」

「あいつには耐尋問・拷問訓練を施してある。あの程度、撫でてや
つたみたいなものだ」

「そんな話を言っとるんじゃない！」

「そうだそうだ。言ってみて、言ってみて。」

顔を真っ赤にして怒鳴る町田を、由加里はぐっと拳を握りしめて
心の中で応援する。それを察知してか、武藤がじろりとこちらを睨
んだ。誤魔化すように視線を逸らしながら、相変わらずの上司の勘
の鋭さに肝を冷やす。あるいは、こっちが全部顔に出してしまっ
ているだけかもしれないが。

取調室から医務官に連れられて岩代が去ってゆくのを見送るなり、
案の定、武藤と町田はいきなり衝突した。もう完全に想定範囲内
なので驚きもない。いっそ予定調和の域に達していた。

それにしても、目の前で簡単に人間の指をへし折るとか、ああい
うのは本当に勘弁して欲しいと思う。しばらく夢でうなされそうだ
った。

「これで気が済んだらう。とつとあいつの身柄を引き渡せ」

「あんな真似されて、引き渡しなんかできるか！」

「何だと」武藤がこめかみを引き攣らせて町田を睨みつける。

「ここでのままお上品にお話を伺っていて、あいつがべらべら唄
いだすわけがねえだろ」

「余計なお世話だ。傭兵風情に取調べの何たるかを教えていただく
謂れはない」

「最初に泣きついてきたのはどっちだ？」

「殴って指をへし折るくらいしか能がないって判ってたなら、始めか
ら話を振ってない。今時、中学生の不良だって、もう少し頭を使う
わ」

「何だと」

「何だ、おい」

互いに胸倉を掴みあう。

それを目の当たりにしながら、このふたり、案外、似たようなメンタリテイの持ち主なんじゃないかなろうか、と由加里は思った。とすると、武藤の個人的な資質の問題ではなく、この業界の体質的な問題なのか。自分はこうした空気には染まらないようにしよう、といち新人として自戒する。

いずれにせよ、このまま見ていて楽しい見世物でもないので、気分転換も兼ねてふと廊下側の窓の外へと目をやった。

道路に直接面した向島署の正面玄関前は、ほとんど駐車スペースもなく、見下ろすとマスコミ取材陣でごった返していた。各社とも車輛の乗り入れは制限されているのだが、それでもざっと一〇〇人近くはいる。これに地元の野次馬も加わるので、確か交通課から人を出して、許可証を持つ記者以外は入れないように規制していたはずだ。そもそも、マスコミ沙汰になるような事件もめったに起こらない平和な土地柄なので、こんな数の報道陣が押しかけるなんて事態、署庁舎建設時には想定もしていなかったのだろう。

それは近隣住民も多分同様で、事件発生後に署に掛かってくる電話のほとんどが、取材陣がうるさいだの、マナー違反の記者がいるだのといった苦情電話だった。地元であれだけの事件があった直後のこの反応に、地域住民の危機感のなさを嘆くべきか、どこまでも日常を保とうとする強靭な平常心に驚くべきか、何とも評価が難しかった。まあ、傭兵部隊がご近所で戦争しているなどという事件の構造それ自体が、単純に具体的にイメージし辛いだけなのかもしれないが。

いずれにせよ、そうした記者たちの騒がしさは元からだったが、見れば、そこに二台ほどの黒塗りのバスが強引に乗り入れようとしていた。

バス……？

車輛規制がされているのに？

最初、そのバスを見たベテラン新聞記者は、TV局の中継車かと思っただ。

だが、携帯電話のカメラからでも高画質（HD）動画送信が可能なのご時世、よほど電波状況の悪い地域からの中継でもない限り中継車の出番はない。特にデジタル放送への移行前後に大幅に広告料収入を減らした民放地上波各局では、スポーツ中継以外の中継車の出勤を事実上廃止してしまった。今ではほとんどの局でカメラマンにネットワーク機能を実装したポータブルカメラ一台を与え、リポーターと二人だけで現場に派遣するようになっていく。中継車の装置設備自体が高額なものもさることながら、機材操作や運用メンテナンスに割ける人件費など、今時の民放報道局では逆さに振っても出てこない。

だから、そのバスはたぶん中継車などではなからうとはすぐに判ったが、では何なのか。

そもそも向島署の交通課警官が通りの出入口で車輛規制を行っていたはずではないのか。それとも警察関係の車輛なのか……。

訝しむ取材陣の見守る中、堂々と署庁舎正面玄関前に停車したバスから、赤いベレー帽に野戦服、その上に黒い軍用コートを羽織った壮年の男が降り立った。

何者かも判らぬまま、取材陣が本能的にカメラを廻し、次々にフラッシュを炊く。

そのカメラの砲列に晒されながら、男は周囲をゆっくりと眺め廻すと、不機嫌な声で呟いた。

「邪魔だな」

男は背後のバスの車内を振り返って命じた。

「片付けろ」

遮光ガラスの車体の窓のいくつかが開き、軽機関銃の銃身が顔を

覗かせる。

ほとんどの記者達がそれが何を意味するのか理解できないまま、銃口が轟然と火を吹いた。

「警部！」

眼下で始まった一方的なマスコミ関係者達の虐殺に、由加里が悲鳴にも似た声で武藤を呼んだ。

「敵襲か！？」

「敵？ 何を言ってるんだ貴様ら？」

武藤と町田が窓際に駆け寄る。地上ではマスコミ取材陣の掃討を終えたバスから、続々と兵士達が降り立った。その中の一人が地面に膝を着き、派手な後方噴射炎を閃かせて携行ロケット砲（RPG）を発射。階下から爆発音とかすかな震動が伝わってくる。

「な、何だ、こいつら……？」

町田が絶句する横で、武藤はバスのそばに立つ赤いベレー帽の男に視線を向けた。と、それに気づいたのか、男が顔を上げてこちらを見る。この距離からも、わずかに口許を歪ませたのが判る。

「城島……っ！」

「警部……？」「知り合いなのか、貴様……？」

その問い掛けを無視し、武藤は踵を返して走り出した。

「警部、どこ行くんですか？」

「潮、お前も来い！ 敵に奪われる前に、岩代の身柄を押さえるぞ！」

「待て、勝手は許さんぞ！」

武藤の背中を追って、由加里と町田も走り出した。

外から撃ち込まれたRPGの弾頭は、正面玄関のガラスドアに触れて起爆。玄関付近を吹き飛ばした。

次いで更にもう一発　こちらは玄関を抜け、庶務課や生活安全課の配置された一階フロアを走り抜けて、フロア奥の壁面に着弾。辺りの職員やデスクを吹き飛ばす。

爆発の衝撃から生き残った者達も呆然として身動きが取れずにいるそこへ、完全武装の兵士達が雪崩込んだ。兵士達はその場に立っている者達を、片っ端から射殺する。

機械的に殺戮を行う兵士達の後を追うように、城島が署内に足を踏み入れた。

「まず武器庫を制圧して、警察側の武装を阻止。次いで幹部クラスフォックス・リーダーの警官から、岩代の所在を確認。それ以外は屋内検索クリアリングを行って、一階各部屋をすべて無力化しろ」

「了解しました」

付き従う副官らしき兵士が、うなずいて手元の無線機を通じて指示を下す。

「た、助けて」

足下から上がる呻き声に、城島は足を留めて視線を向ける。頭から血を流した年配の制服警官が救いを求めてこちらに手を伸ばしている。そこへ素早く別の兵士が駆け寄り、タボールAR21の連射を撃ち込んで黙らせる。

城島は何事もなかったかのように、表情ひとつ変えずに視線を建物の奥へと戻した。

「さあ日本人よ、これが我々の示すグローバル・スタンダードセンス国際標準の武威だ」

「駄目だ、電話回線が繋がらない!」「こっちも駄目だ!　携帯も全部圏外だ!」

「くそ、どうにかして外と連絡を」

職員達が焦りながらそれぞれに電話を手に行っているそこへ、ドアが蹴破られ、対人手榴弾が放り込まれる。短めに切られた信管ヒューズが作動し、悲鳴を上げる間もなく手榴弾が炸裂する。

爆風が収まるや、銃を持った兵士達が入り口に立って室内を素早く検索した。呻き声や動きがあれば即座に銃撃を叩き込んで沈黙させる。

こうして一部屋あたり十数秒ほどの時間で、次々と署内各部屋のクリアリング屋内検索を進めてゆく。

一方、地下の武器管理室では、一階フロアから逃げ出してきた制服の職員が担当者に詰め寄っていた。

「銃を早く出せ！」

「ですから、署長の許可もなしにロッカーは開けられません。規則は守ってもらわないと……」

「それどころじゃないんだ！ 軍隊が攻めてきてるんだよ！」

「軍隊？ 何を言ってる」

担当者が首を傾げたそこへ、通路で見張っていた別の職員が悲鳴を上げる。

「奴らが来たぞ！ 早く武器を」

皆まで言い終えるより前に、多数の銃弾を喰らった通路の職員が痙攣するように死の舞踏ダンス・マカブルを演じてひっくり返る。

「早くしろ！」

「は、はい！」

担当者が慌てて、引き出しから鍵を取り出す。拳銃を個別に収納するロッカーの鍵を、まとめて格納したキーボックスの鍵だ。

だが、すぐそばまで迫る兵士達に備えるには絶望的に間に合わなかった。

「!？」

硬質な音ともに、武器管理室の床の上へ丸い対人手榴弾が転がる。

爆風　そして自動小銃の軽やかな銃声が鳴り響き、武器管理室もまた沈黙した。

「結城、新庄、聞こえてるか？　くそ、やはり回線はもう潰さ

れてるか」

武藤は罵ると、由加里に訊ねた。

「岩代は今どこにいるんだ？」

「たぶん、一階の医務室です！」

「敵の方が近いか」

「このまま行くんですか、警部？」

走りながら由加里が訊ねる。

「武器がいるな……。おい、俺達から取り上げた銃はどこだ？」

「武器管理室のロッカーの中だ。当たり前だろう。あんな強力な自動火器、その辺の机の上に置いておけるわけがあるまい」

「俺が敵ならまず真つ先にそこを押さえる。もう取り戻すのは無理か ならば、まずは武器の調達だ！」

武藤はいきなりすぐそばにあるドアに蹴りを放り込むと、キック一発で扉を開けた。

「警部？」

驚く由加里達をよそに、室内の机の上を手早く漁ると、文房具立てからハサミやボールペンを手にして戻ってきた。

「ほら、お前らの分だ」

「……これでどうしろと？」

手の中のボールペンとハサミをまじまじと眺めながら、とりあえず由加里は訊いてみた。いや、なんとなく見当はついていたが。

「刺すんだよ」

決まってるだろうが、とボールペンのキャップを抜いて、武藤が言い放つ。

「ええーっ！？ 相手は機関銃やロケット砲とか持ってるんですよ！」

「素手よりましだ。おら、行くぞ！」

そう言っつて、再び走り出す。

「……いろいろ大変だな、君も」

「同情とかやめてください！」

半分涙目になりながら町田に叫ぶと、由加里は再び武藤の後を追って走り出した。

13 (前書き)

文房具で完全武装の兵士たちを屠り去る武藤。啞然とする由加里たちをよそに、武藤は自分たちだけで傭兵部隊に殴り込みをかけることを宣言する。

武藤の闇が垣間見える回ですね。

次回は……いよいよ大銃撃戦に突入！

次回は2月27日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

階段を使って二階まで降りると、一階との間にスチール机などで簡易なバリケードが設けられ、その背後から制服私服の入り混じった職員達が階下を不安気に伺っていた。

その中に自分の部下を見つけた町田が声を掛ける。

「状況はどうなっている？」

「町田さん！」若い刑事がほっとした表情でこちらを向いた。

「下で武装した兵隊が見張ってます。少しでも顔を出すと撃つてくるんで、下りれなくて」

「それが敵の攻勢限界ってことだ。それ以上、手を広げるには頭数が足りないんだろう」

「でも警部、こちらはみんな丸腰なんですよ」

「屋内掃討戦では必ずしも火力の差は意味をなさない。基本的にどこまで行っても、至近距離での不期遭遇戦の繰り返したからな。出合い頭で多人数で押し潰しちまえば、装備もへったくれもない」

「……その分、犠牲も多そうですけど」

「何事もただで手に入るモノはねえよ」

武藤がそっけなく言い放つ。

「俺の部下に人海戦術で血路を開けと言っとなるように聞こえるが、気の所為か？」

「そついつの得意だろ。本庁の皆さんは」

「ふざけるな。皆、家族がいるんだぞ！」

「じゃあ、プランBだ」

そう言っって口許を緩ませる武藤に、どこまで不謹慎に出来ているんだろうか、この上司は、と由加里は思った。

「!?!」

階段下で銃を構える兵士達目掛けて、次々と中二階の踊場から椅子が投げ込まれた。

「何のつもりだ、こいつら　　がっ!?!」

兵士のひとりか飛んできた椅子の直撃を喰らってひっくり返る。

部長級の幹部の座る肘付きで造りのがつしりとした奴だ。

「……うわ、椅子のピッチングフォームなんて初めて見た」

片手投げで軽々と椅子を投げる武藤に、由加里が唾然とした声を上げる。

「バカ野郎!　ぼさつと見てないでお前らも続け!」

「は、はい!」

慌てて由加里達も総出で椅子やデスクの引き出し、厚手のバインダーなどを投下し始める。

「くそ、調子に乗りやがって……!」

階下の兵士達が階段の上に向けてダボールAR21を連射、下を覗いていた由加里達がすぐに首を引つ込める。

そこへ、先程椅子の直撃を喰らった兵士が、同僚を押しつけて前に出た。

「どけ、グレネードを使う!」

「あ、バカ、こんな狭い空間で　　」

止める間もなく、ダボールAR21の銃身下部に装着された擲弾アンダーバレル
ドランチャーの筒先を踊場に向ける。

「グレネード!」

警告の叫びとともに武藤以下、一同が血相を変えて階段を駆け上がる。それを追うように発射された20ミリ・グレネード弾が踊場で炸裂。金属スラッグの暴風を辺りに撒き散らす。

その爆煙の晴れぬ内に、ダボールAR21を乱射しながら兵士が突っ込んでゆく。

「おい、待て!　突出するな!」

「こっちは防弾装備は完璧だし、ノイズキャンセラーで至近距離の爆発にも耐えられる」

踊場まで一気に躍進した兵士が、耳を被うヘッドセットを指で叩く。至近距離での爆発音や砲撃音、航空機のエンジン音など、耳に障害を与えかねない大音量の音声に対して、電子合成した逆位相の音波をぶつけて消し去ってしまうのが、ノイズキャンセリング・ヘッドフォン、あるいはノイズキャンセラーである。元々は戦車兵や空母の甲板作業員などが使用していたものだが、小型化、高性能化が進んで特殊部隊などでも使うようになっていた。これにより、至近距離で撃ち合いや爆弾が炸裂しても、すぐそばの戦友と軽口さえ叩けるようになった。

「現場のリスクを回避^{ヘッジ}するための装備だ。活用して戦果を上げるのが筋だろうよ。」

何、相手は所詮、丸腰だ。四、五人もぶち殺せば、奴らも大人しく

言いかけたそこへ、再び分厚いバインダーが雨あられと降り注ぐ。「手前ら、舐めんじゃねえぞ、この野郎！」

矢継ぎ早に弾を詰め替え、階上のフロア目掛けてグレネード弾を連射すると、再び猛然と階段を駆け上がった。

「……つたく、ガキか、お前は」
ぼやきはしたものの相棒を放っておくわけにもいかず、同僚の兵士が慌ててその後を追う。

「へへっ、何処に隠れてるんだ、間抜けども。お望み通り、手前らのでかい尻を月までぶっ飛ばしにきてやったぜ。それともさっきので、きれいにぶっ飛ばしまったか？」

タワーAR21を肩付けに構え、射軸と視線をぴったりと重ねながら、いまだ爆煙の己ま^ゃない二階通路を素早く検索する。明かりの消えた通路は、外から入る街灯のおかげで思いの外、見通しは悪くない。

と、その瓦礫の散らばる床の上に、横たわる人影があった。

自分達と同じような黒い防弾装備で固めている上に、やや起伏に乏しい感はあるものの、ボディラインには柔らかな曲線を帯びてい

た。

「……女……？」

SATの女性隊員？ そんな奴がいたのか……？

銃口を女の方に向けたまま慎重に近づこうとした矢先、首筋を何者かに激しく殴りつけられた。

「！？」

バランスを崩しながら、頸部に激しい激痛　とつさに手で触れて、そこに有り得べからざる棒状の何か突き刺さっていることに気付く。と、そこへ肩を掴まれてくるりとその場で身体を廻された。獣が仕留めた獲物を冷静に品定めするような、冷やかな眼差しで背の高い大男がこちらを見下ろしている。

それが二年前に突然部隊を去った、かつての己の上官だと気付いたときには、左腕に吊った自分のホルスターから、自然な仕草で拳銃を引き抜かれていた。

大男は安全装置を親指で外すと、兵士の防弾ベストの隙間　胸元に銃口を押し付け、無造作に引き金を引き絞る。

「この野郎っ！」

背後からタボールAR21の銃床ストックを打ち下ろそうとするもつひとりの兵士に、男は左腕を軽く薙いだ。

「っ！？」

目許を被う防護グラスに横一文字の亀裂が走った。

それが男の左拳から突き出た事務用ハサミの刃先によるものだと理解するのとほぼ同時に、至近距離から拳銃の残弾すべてを一気に叩き込まれ、兵士がひっくり返る。

それでも優れた防弾装備のおかげで一命を取り留めた兵士が、必死に身体を起こそうとする。

その顎を背後から掴まれ、喉元の肌に冷たい感触を覚えた時点で、兵士は己の人生がここで終わることを理解した。

「……本当にボールペンと事務用ハサミで、完全武装の兵隊ふたりを片付けやがった」

「……………」
血まみれのハサミをその場に捨てる武藤を、町田と由加里が啞然とした表情で眺めた。

「装備に優越した兵士はそこに隙がでやすい。だが、結局のところ、人を殺すのは道具じゃない。ボールペン一本でも適材適所で使えば、簡単に人を殺すことができる　おぼえとけ」

そういう殺伐とした教訓話を積み重ねなくちゃいけない職場って、心底嫌だな、と、ついさつきまで囚役で床に転がされていた由加里は思った。あの囚役だって、いつ撃たれるか気が気ではなかったのに。

「……で、警部は何してるんですか？」

「見りゃあ、判んだろうが。使える装備をいただいでるんだよ」

殺した兵士の屍体からヘルメットを引き剥がしながら、武藤が告げる。

勿論、見れば判るが、認めたくないから言ってみただけだ、この罰当たり上司め。

「お前もそつちの屍体から、装備を回収しろ」

「えーっ！」

「えー、じゃねえ。時間がねえんだ。ぶっ飛ばされたくなければ、とつとと動け！」

ひいいと涙目になりながら、由加里が兵士の屍体に恐る恐る近づいてゆく。

それを横目で眺めながら、町田は武藤に訊いた。

「……本当にふたりとも殺す必要はあったのか？」

「ボールペンとハサミに、そう多くを望まれてもな。自分ならもっとうまくできるってんなら、俺と関係ないところで勝手にやっつけろ」

「判った。もう言わん」溜息ひとつ付いてその話題にけりをつけ、

町田は話題を切り替えた。

「で、これからどうする気だ？」

「下に降りて、岩代の身柄を取り戻す」

「俺も行こう」

「お断りだ」武藤は言下に拒絶した。

「動きも読めない素人を連れて、足を引っ張られるのはごめんだ。

こっちはただでさえ、その間抜けな新米ルキキの面倒を見るので手一杯だからな」

「……もしかして、あたしも行くんですか？」

「当たり前だ。手前の商売忘れてんじゃねえぞ、このどアホう！」

「こっちだつて特殊捜査班（S I T）の出だ。強行突入の場数も踏んでいる。足手まといにはならん」

特殊捜査班（S I T）は、警視庁捜査一課に所属する部隊で、誘拐事件や犯人籠城など刑事事件における捜査や強行突入などの任務に従事している。テレビなどの立て籠もり事件の報道で映る黒い特殊部隊は、大抵、彼等S I Tが各県警刑事部に所属する同様の部隊のことである。日常的な出動件数という意味では、警備部の特殊強襲部隊（S A T）などより遙かに実戦経験が豊富な部隊だ。

「我々も身内を殺られてこのままで済ますつもりはない。同行させてくれ」

「しつこいぞ」

武藤はタボールA R 2 1の銃口を町田に向けた。由加里が思わず制止の声を上げる。

「警部！」

「お前らの復讐心なんか知るか。俺達はこれから戦争をしに行くんだ。『お巡りさん』じゃ役に立たねえ。どうしても俺達の足を引っ張りたいってんなら、この場で殺してくぞ」

「何だと！」

「よせ！」

激昂する若い部下を町田は制した。

冷たく見据える武藤の瞳は完全に本気だった。それが証拠に右手の人差指はトリガーガードではなく、しっかりと引き金に触れている。何かの拍子にそのまま引き絞ってしまっても一向に構わないという態度だった。

「……判った。我々はここに残ろう」

「町田さん！」

部下の異論を無視し、町田は言葉を続けた。

「だが、教えてくれ。俺も二〇年以上、警官をやっている。それなりに酷い現場も目にはしている。残虐な事件を引き起こした容疑者とも向い合ってきた。

だが、あんたや、今度の事件の犯人たちは何かが違う。こんなに簡単に人を殺して、ここまで屈託なく済ませる人間は見たことがない。

それに、あんたとこいつらは顔見知りなんだよな？ どうなってるんだ？ それでどうして、そんなに平気に殺し合いができるんだ？

なあ、あんたも、岩代も、そこに転がってる連中も、皆、元々は俺達と同じ日本人なんだろう？

どうしてそうなっちゃったんだ？」

「……………」

町田の問いを無言で聞いていた武藤は、やがてぼつりと答えた。

「気づいたただけだ」

「気づいた？ 何にだ？」

「この世界がとつくに地獄だということに。今のこの国で、まだそのことに気付けずにいる奴がいることのほうが、俺にはよほど不思議でしょうがないがな」

何の感情も込めずに語る武藤の姿に、由加里は戦慄した。虚無、と一言で片付けるのも躊躇ためらわれる、闇の深淵を覗き込んでしまったような感覚。それが身近な人間の胸許に、ぽっかりと大穴を開けて放置されていたことに気づかされてしまった恐怖。

敵と相對して銃撃戦をしていたときより、今この瞬間、この場か

ら全速力で逃げ出したい、と由加里は激しく思った。

だが、できなかった。

蒼褪めて立ち尽くすばかりで、足が動こうとしない。

職業的義務感？ 別に望んで就いた仕事じゃない。

いつか隙を見て逃げ出してやる、と今の今だって心の底から思っている仕事に忠誠心なんか無い。勿論、こうして自分の昔の職場に襲いかかって、大切な人々を傷つけている犯人達は許せない。だが、自分はミニパトを転がし、地域住民の生活や安全を守るのが仕事だったはずだ。こんな殺伐とした、殺したり殺されたりの世界が、自分が本来、居るべき世界なわけがない。

だけど、それでも、ここから逃げ出そうとすると、足が竦んでしまふ。悲鳴を上げようとする喉が締まって苦しくなる。

何か、もっと怖いものがあるのだろうか？ 武藤に怒鳴られるから？ まさか。この場に転がる兵士のように、虫けらのように殺されて放り出されることを思えば、乱暴な上司に怒鳴られるくらいなことではない。転職先が見つからないと言っても、死ぬよりはましだ。

なのに自分は何故、逃げ出さないのだろうか？

自分は何故、ここに居るのだろうか……？

その時、不意にひとつの疑問が頭をよぎった。

「質問はそれで終わりか？」

「……あ、ああ」

町田が苦く肯く。

武藤は奪ったタボールAR21のコッキングハンドルを半ばまで引いて、薬室内に銃弾が装填されていることを確認すると、由加里に声を掛けた。

「行くぞ、潮」

「警部は」

「何だ？」

「……いえ、何でもありません」

由加里は口にしかけた疑問を呑み込んで、言った。
警部は、何故、ここにいるんですか？

14 (前書き)

向島署を占拠する傭兵たちに殴り込みをかける武藤と由加里。そして、凄絶な銃撃戦が開始される……。

次回は……遂に武藤たちの前に姿を現した城島との対決です。

次回は3月6日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「待たせたな」

「遅いよ、お前ら」

一階医務室に兵士達が辿り着いたとき、岩代はベッドに腰掛けて彼等の到着を待っていた。足下には医務官と監視の警官の屍体が転がっている。外の騒ぎに気を取られた隙を突き、近接格闘術（CQ B）で襲いかかって殺害したのだ。

「下手を打つたのはそっちの方だろうが。こっちは短時間でいろいろ仕込みを済ます羽目になって、大騒ぎだったんだぜ」

「バカ、その辺の警官相手にやられるほど、こっちも抜けちゃいねえ。報告書にあった例の秘密部隊に、灰色鷹グレイホーク 武藤さんいたんだ

よ

「武藤さんが？ まさか。そんな情報は……」

「そのまさかだ。この指も武藤さんにやられた。おい、もしかすると、俺達はあの女に嵌められ」

言い終えるより前に、医務室の外から烈しい破裂音スネアと叩き付けるような銃声ピットが聴こえてきた。

「来たか」岩代は舌打ちして言った。

「早くボスに伝える。とつとと引き上げないと、無駄に損害が増えるぞ」

タボールAR21に装着された擲弾発射器グレネード・ランチャーから、武藤は階下の敵兵目掛けて、奪ったグレネード弾を三発立て続けに撃ち込んだ。スチール製のデスクやロッカーで組み上げられた急拵えのバリケードが紙細工のように吹っ飛ぶ。その爆風が已むやよりも早く、武藤は由加里を引き連れて呐喊とっかんする。

グレネード弾から撒き散らされる金属スラグを間近で浴びても、

優れた防弾装備に防がれて装備の下の身体には傷ひとつ付かない

勿論、そうと判つていても、さすがに普通は臆するものだが、武藤の行動にはみじんも躊躇する素振りがなかった。人間として云々というより以前に、生き物として明かに重要な何事かが欠落しているのではないか、と思つたものの、由加里の側にも突っ込みを入れる余裕などない。

一気に敵の内懐に飛び込んだふたりは、至近距離でタボールAR 21を乱射しながら、どさくさに紛れて発煙筒を床に放り出した。たちまち辺りを白煙が覆いつくす。武藤が交通課に立ち寄つた際に「何となく」くすねてきた代物である。どこまでも手癖の悪い上司だった。

無論、敵も素人ではない。犠牲をひとりに留めて、撃ちまくりながら即座に通路を後退。距離を取るや、手早く火力を束ねて反撃してくる。

殴り込みの強襲で得られた主導権が数十秒と持たずに失われたことを悟るや、武藤は即座に意識を切り替える。

「潮っ！」

腰溜めの姿勢でタボールAR 21を必死に連射している由加里が、気付く様子はない。敵から奪つたノイズキャンセラーを使つているので聞こえているはずだが、そもそもその余裕が無いのだから。武藤は小さく舌打ちすると、由加里の襟首を引っ掴む。

「な、警部？」

驚く由加里を無視して最寄のドアを蹴り開けると、由加里もろとも室内に飛び込んだ。

明かりのないオフィスには、整然とスチールデスクが並び、その上にパソコンや資料類が思い思いに積み重ねられていた。庶務か事務系の部署のオフィスらしい。

「潮、消火器！」

「あ、はい！」

あらかじめ打ち合わせた通り、慌てて立ち上がった由加里が部屋

の隅にある防災設備のコーナーに駆け寄った。

武藤が飛び込んだのは反対側のドアが蹴り開けられ、腰を屈めた兵士達が突入してくる。

「警部！」

叫びながら由加里が小型の粉末消火器を放り投げる。宙を舞う消火器に武藤が発砲。赤いタンク部の一部に穴が開き、そこから白い消火剤を噴出させながら、消火器がえぐり込むようにスピンスつつ、兵士達の下へと突っ込んでゆく。

鈍器が肉に叩きつけられる嫌な音とともに、噴き出し続ける消火剤の粉末が周囲を白く覆う。

思わず身体を起こして身を曝してしまった兵士に、武藤が容赦なく銃撃を加えた。消火剤の白煙の向こうでのけ反って倒れる兵士のシルエツトが見えた。

直後に、後続の兵士が戸口からこちらに銃撃を加えてくる。射線上の遮蔽物をはじき飛ばしながら、ライフル弾が襲いかかる。だが、こちらを狙っているというより、頭を上げさせないための銃撃らしく、机の上すれすれの高さで左右に弾を散らしながら発砲している。となれば、次は

ノイズキャンセラー越しに耳を澄ませると、ごそごそと床を擦る音が聴こえてくる。床を這って、兵士達が近づこうとしているのだ。話しかければ声が届く距離から撃ち込まれる銃撃。そこから更にこうして這い寄ってまで自分達を殺そうと向かってくる殺意の存在に、由加里は吐き気すら覚えた。自動小銃やグレネード弾などの強力な武器を使いながら、あまりにも彼我の距離が近すぎる。距離の短さが状況の推移を加速させ、神経をきりきりと責め苛む。防弾ベストやノイズキャンセラーといった装備品の機能向上が、現代戦にこうした異常な事態をもたらしていた。

武藤はタボールAR21の弾倉を^{マガジン}手早く交換すると、傍らの由加里に声を掛ける。

「潮、行くぞ！」

「はい！」

蒼褪めた表情で、由加里は肯いた。

肯いて、自ら飛び込んでゆく以外、この期に及んで他に選択肢はなかった。

フォックス・リーダー

「岩代の身柄を確保しました。それと、敵に灰色鷹グレイホークが」

「聴こえている」城島は部下の報告に肯いた。

「懐かしいな。発砲のリズムで判る。銃声からすると、こちらから奪った銃を使っているようだ。得意の接近戦インファイトに持ち込んだ方がいいが、腰が引けているのは何故だ？ 残弾を気にしている所為か、一緒に組んだ兵のレベルに合わせるのか……。」

まあいい。RPGは後、何発残っている？」

「二発です」

「いいだろう。分隊支援火器（SAW）班も一班、一緒についてこい。他の者は撤収を急げ。」

さあ、我が盟友との二年ぶりのご対面だぞ」

そう言って、城島は冷たく嗤った。

由加里と武藤は、机ひとつ隔てた距離で殴り合いにも似た激しい銃撃戦を敵と繰り広げていた。

マズルフラッシュ

鋭い銃火が引つ切りなしに閃き、まともに覗き込むと視力を潰されかねない。うかつに頭を上げれば、銃弾が飛んでくる。ノイズキヤンセラーがなければ、彼我の銃声で耳もおかしくなっていただろう。

おまけに口径が大きく初速も早いライフル弾には、個人の防弾装備など効果はない。ましてや、こんな至近距離で喰らえば、当たり所が悪ければ即死、良くても神経がショック症状を引き起こして半身が麻痺状態に陥りかねない。こんな状況下で半身麻痺など引き起

こせば、確実に命はない　つまり、一発でも当たったらオシマイということだ。

そんな強力なライフル弾が、薄皮を一枚つつ削ぐような精度で襲い掛かってくる。自身も無我夢中で銃を撃ちながら、由加里は気が変になりそうだった。

一方、目の前の相手と撃ち合う内に、敵の一部が背後から廻り込もうとしていた。その動きを察した武藤が、器用に足で引つ掛けた回転椅子をそちらに蹴飛ばす。移動しようと机の間の通路を渡りかけた兵士に直撃し、体勢を崩したそこへ武藤が容赦なく銃撃を加える。

だが、どれだけ犠牲を払っても、敵の攻勢は一向に緩む様子はない。ここまで敵に肉薄され、残弾も残り少ない。この期に及んで岩代奪還はまず無理としても、生きて脱出することさえかなり困難な状況になりつつあった。

ほとんど背中合わせで銃を撃ちながら、由加里は叫んだ。

「警部！　どうすんですか、これから！」

「うるせえ、黙ってる！　今考えてる所だ！」

「今考えてる！？　由加里が愕然とした口調で繰り返す。

「何でそう行き当たりばったりなんですか！」

「状況なんざ現場の流れ次第でどうとでも変わる。前もってちまぢま考えても始まらねえだろが！」

「だから、そーゆーのを、行き当たりばったりって言うんですよ！　デスクの陰から頭を出してこちらを覗き込もうとする敵にライフル弾を撃ち込みながら、怒鳴った。

「警部はいつつもそればっかじゃないですか！　付き合うこっちの身にもなってください！　皆が皆、警部みたいなデタラメな人生送ってるんじゃないんですよ！」

「誰がデタラメだ！」

「元傭兵で刑事なんて設定、デタラメすぎてマンガですよマンガ！　それも四コマ・マンガ誌の巻末手前に載ってる一番つまんないや

つ。島流し刑事デカのほうで、人情ネタが使えるだけよっぽどましです！」

「手前え……」

武藤が怒りで口許を引き攣らせる。どうも、由加里には戦闘下の異常な興奮状態に陥ると、口の悪さに加速度がついて止まらなくなる性癖があるようだ。……まあ、普通にミニパトの婦警をやっていたら、死ぬまで気付く必要もない性癖のはずだったわけだが。

「もうヤダ、こんな職場！ 絶対、辞めてやる、辞めてやる、辞めて……！？」

遊庭が空の薬室を叩く音　またやった。残弾数を忘れて、撃ちすぎた。

即座にそれを察知した敵兵が、距離を詰めようと身を乗り出す。

予備の弾倉マガジンは？　そんなものはない。元より武藤が二階通路で斃たおした敵から奪った分しかなかったのだ。短時間とは言え、烈しい銃撃戦の中ですべてを使い切ってしまった。

拳銃。これも敵から奪った拳銃が腰に　これもダメ。両手でホルドしている自動小銃を放り出して、腰のホルスターから拳銃を抜き、親指で安全装置セイフティを解除。その上で引き金を引き絞る、なんて複雑なアクションを積み重ねている余裕はない。その頃には、懐まで飛び込まれて、ライフル弾で穴だらけにされてるだろう。

武藤に助けを　無理。武藤もまた、目の前の敵と気の抜けない銃撃戦の真つ最中だ。今度ばかりは部下の窮地を救う余裕は、多分、ない。

どうする？　どうすればいい？　このまま殺されるのか？

嫌だ、嫌だ、いやだ、いやだ、イヤダ、イヤダ

身に迫る絶対の窮地を前に高速に思考を巡らせながら、由加里の身体はそれとは一切関係なく、自動的に動いていた。

「こつち　」足の分厚いバイндアーの背を無意識に掴む。

「くんな、バカーっ！」

下手投げ（アンダースロー）で力任せに投げつけられたバインダ

「は、敵兵の頭部に直撃。そのままひっくり返る。」

「やるじゃねえか」

ほとんど始めてではないかと思われる武藤の称賛の言葉に、由加里はきつと睨みつけた。

「嬉しくないです、そんなとこ褒められても！」

だが、武藤は取り合わずに言った。

「待て、敵の動きが妙だ」

「妙って……？」

言われて見れば、敵の攻撃が已やんでいる。それどころか、傷ついた仲間を引きずりながら、後方に引き上げようとしているかのようだった。

「助かった……？」

「バカ野郎、逆だ！　伏せる！」

武藤が叫ぶや、凄まじい銃撃で周囲の備品やパソコンが吹き飛び始めた。

15 (前書き)

武藤VS城島の激突、そして由加里の眼前で悲劇が……の回。
次回、第一部最終回です。

次回は3月13日(日)深夜零時の更新を予定しています。
よろしく願います。

では、ごゆるりとお楽しみください。

部屋の出入口に陣取った、分隊支援火器（SAW）班の持つミニ軽機関銃は、タボールAR21と同じ5・56ミリNATO標準SS109弾を、切れ目なくホースで水でも撒くように辺りにぶち撒けた。反撃もへつたくれもない。頭を抱えて床に伏せる以外、出来ることは何もない。

ひとしきりミニミで室内を薙ぎ払わせると、城島は短く命じた。

「グレネード」

それに応じて、複数の兵士が子供が爆竹でも放り込むような気安さで、20ミリ・グレネード弾を室内に撃ち込みはじめる。着弾したグレネード弾は次々に炸裂し、金属スラグを撒き散らしながら、机やロッカーを吹っ飛ばす。爆風で跳ね飛んだ調度品やバインダーのたぐいが降り注ぎ、グレネード弾の破片が音を立てて防弾装備に突き刺さる。床から伝わる着弾の衝撃で、内臓が引っかけ廻される。それらすべてを、武藤と由加里は床にへばりついて耐えた。

まっとうな神経なら、すぐにも悲鳴を上げて逃げ出したくなるのを、生存のチャンスを信じて必死に堪える。

やがて、グレネード弾の暴風は、唐突に已んだ。

「……………？」

安堵よりも不審の色を濃く示す表情で武藤が顔を上げると、城島が声を発するのはほぼ同時だった。

「灰色鷹グレイホーク、久しぶりだな。二年振りか？ 互いに息災なようで何よりといったところか」

「城島……………っ！」

武藤が唸るように罵る。元々浅黒い肌が紅潮してどす黒く色を変え、大きく表情を歪ませる。

その姿に、由加里は息を呑んだ。ここまで本気で憎悪を剥き出しにする武藤を見るのは始めてだった。町田との争いさかいさえ、これに比

べれば、冗談混じりの朝の挨拶のようなものだった。

……いや。だがこれは、本当に「憎悪」なのか？

由加里はぞつと背筋を這い抜ける悪寒に身震いした。

大きくねじ曲がった口許も、目尻も、ぎらぎらと輝く瞳も、それは歡喜の表情と言っても充分に通用する。

憎悪がそのまま突き抜けて、至上の快樂に辿りついたかのような表情。それは己の裡なる「暴力」を無制限に解放することへの、「歡び」と「期待」と言い換えてもいいかもしれない。

そこに他者へ苦痛を与えることへの抵抗はなく、命を奪うことへの躊躇ためらいもない。

己の苦痛すら歡びであり、死すら愛しき伴侶として受け入れる。

善もなく、悪もなく、吹き上がる殺意と破壊衝動に酔いしれるかのような、獣ケダモノの貌かお。

人間にこんな表情ができるのか？

いや、人間がこんな表情をしていいのか？

その存在自体が、この世を造りたもうた造物主たる神への冒瀆であるという意味で、この上司はまごうかたなく「悪魔」であり「魔王」なのだ、由加里は今この場ではつきりと得心がいった。

むしろ、この男こそ、自分が斃たおすべき本当の

「灰色鷹グレイホーク」

闇の深淵より投げ掛けられるかのような城島の低い声に、由加里は不意に我に還った。床に伏したまま、半ばまで腰のホルスターに手を掛けていた自分に慄然とする。自分は何をしようとしていたのか。びっしりと全身が冷汗で濡れそぼつ。

気がつけば、先ほどまでの表情のすべてを拭い去さった武藤が、冷やかにこちらを見ていた。まるで何もかもすべて見通した上で、等しく無価値であると突き放すような、そんな視線。……。

武藤は由加里と視線が合うと、興味をなくしたかのようにつと目を逸らす。由加里は頭がおかしくなりそうだった。いや、こんな上司の下で、正気でいられる方がおかしい。ならば、もうとっくにお

かしくなってしまうているのかも。

「再会を祝して、お前好みの火力による蹂躞戦だ。気に入ってもらえたかな？ いささか手持ちの火器が心許なくて、こんな有り合わせのもので済ませてしまつて悪いが、そこはこちらの気持ちを汲んでもらえるとありがたい」

「クソ爺いが……っ！」

武藤は倒れたデスクの上に肘をついて、タボールAR21の銃口を城島に向けた。

「その名前は捨てたつて言つてんだろっが　！？」

不意に武藤の貌かおが驚愕に歪む。

「そうそう、もう一品残つていた」城島が冷たく嗤いながら告げた。「せめてもの心尽くしだ。存分に味わつてくれ」

城島は防火性能も併せ持つ軍用コートのフードをかぶると、同じく傍らでフードをかぶつたRPGを構えた兵士の肩を軽く叩いた。それを合図に兵士が発射筒ランチャーの引き金を絞り抜く。

「RPG！」

警告の叫びとともに、武藤が由加里の身体の上に覆いかぶさる。

後方噴射炎が通路の床や壁面を焼き、オレンジ色の焰ほのおが城島と兵士を背中から押し包んだ。同時に、RPGの弾頭が発射筒ランチャーから滑り出す。そのまま由加里達の背後の壁に着弾したRPGの弾頭は、壁に大穴を開け、コンクリートの礫つぶてを爆風と共に周囲に撒き散らした。「くそっ！」

瓦礫の下から身を起こすと、武藤は素早く周囲を見廻す。手元のタボールAR21の存在を確認し、次いで床に倒れたままの由加里を見つけると、防弾ベストの襟首を掴んで引き起こした。

「このバカ！　とつと目を覚ませ！」

「ふえ？　警部……？」

微妙に呂律が廻つていない。脳震盪でも起こしているらしい。

武藤は容赦なく由加里の頬を張り飛ばした。

「……痛い……」

「寝ぼけてる暇はねえ。すぐに敵がくる。その破口から脱出するぞ。先に行け！」

「あ、はい！」

返事をするより先に、背中から突き飛ばされる。足元の瓦礫に足を取られながら、RPGの開けた壁の穴に転がり込んだ。背後では自動小銃の発砲音。武藤が近づく敵を牽制しているのか。

「由加里！？」

「え……？」

顔を上げると、香織を始めとする交通課の面々がそこにいた。

「何、で……え……？」

一瞬、状況が理解できず、周りを見廻す。交通課のオフィス。ああ、そうか。さっきの部屋の隣だから、ここは

そこまで把握して、慄然とする。

「何で皆、まだこんなところにいるんです！？ 早く避難してください！」

「バカ言わないで！ 外は兵隊でいっぱいだよ！ 窓から逃げようとしたら、見張りの兵隊に撃たれるし。ここにいる人達だって、ここまで必死で逃げて来たのよ！」

見れば制服警官を中心に一〇人前後もの人数が残っていた。皆、不安げな表情でこちらを見ている。この人数を連れてどう脱出する？ 背後からはすぐそばまで敵が迫っている。頭が真っ白になる。考えが何もまとまらない。

「潮！ ぼけつと突っ立ってるんじゃない！ 敵が来るぞ！」

タボールAR21の残弾を撃ち尽くした武藤が、銃を背後に放り投げつつ隣室から飛び込んできた。

振り返ると、壁の破穴の向こうで、軽機関銃を持った敵兵がこちらを向こうとしている。

反射的に回避しようとして、目の前の香織の存在に気付く。この

まま自分が避けたら、彼女達が敵の銃撃を浴びることになる　　自分は何をすべきか、考えるまでもなかった。

「やめて！」由加里は敵兵の前に両手を広げて立ち塞がった。

「撃たないで！」

「潮！　このバカ野郎！」

だが、敵兵は躊躇ためらわずに軽機関銃をこちらに向けて構え直す。

ダメだ。殺される。ぎゅっと目を瞑つぶってその瞬間に備える。

だが、逃げようという気にも、後悔する気にもならなかった。先輩や交通課の皆を、自分を受け入れてくれた人達を守った結果がそれなら文句はないや。結局、自分には他の選択肢などないのだから、この結末は受け入れるしかない　　彼女の上司はそれを下らない自己満足と笑うだろうか？

だが、その腕を不意に引っ張られて、床に引き倒される。

「！？」

バランスを崩しながら倒れる由加里の視界が、「しょうがない娘ね」と苦笑する香織の表情を捉えた。

ダメです、先輩

手を伸ばそうとしてその手が届かぬまま、無数の銃弾が香織の身体をずたずたに引き裂いた。薄暗い室内に真っ赤な鮮血を振りまきながら、華奢な身体がバレエのプリマドンナのようにくるりと旋回し、跳ね飛ばされる。そのまま受身も取らずに、乱暴に床に投げ出された。

「……先輩……？」

床に倒れたまま動こうとしない香織の身体を中心に、急速に血溜まりが広がってゆく。ああ、そうか。結局、あたしはまた先輩に助けられたのか。先輩にとってみれば、最後まで手のかかる先輩のままだったのかな。いつも迷惑かけてばっかだったもんな。でも、こんな時くらい、ダメ後輩を卒業したかったのに。……。

「潮！　そんなところで、何してやがる！　早く起きて、ここから脱出　」

「うるさいっ！」

武藤に怒鳴り返すのと、腰のホルスターから拳銃を抜き放つのはほぼ同時。床に倒れた姿勢のまま、片手に持った拳銃から、狙いもろくに向けずにほぼ直感だけで敵兵へ発砲する。続けて放った数発の銃弾がひとつに聴こえるほどの速射。それが、先程の軽機関銃を持った敵兵にすべて命中したことを由加里は「感覚」で把握したが、同時に分厚い防弾装備に遮られて「殺れてない」こともまだ認識出来ていた。

混沌とした戦場のど真ん中で、周囲で発生しているすべての事象を正確に把握する超認識モード。場数を踏んだ特殊部隊員の中でも、あるレベルに達した兵士だけが、戦場に没入しきった瞬間にだけ訪れるという異常な心理状況。それに近い現象が、今の由加里に発生していた。

だが、本人にしてみれば、そんなことはどうでもよかった。

こんなに簡単に人を殺しておいて、銃撃を受けながらのうのうと生きている敵兵の存在が、ただ許せなかった。

殺してやる、殺してやる、殺してヤル

冷たく、真つ黒な殺意が、呼吸するようにするりと意識の中に滑り込み、他のすべてを圧して支配する。バネ細工のおもちやのように一挙動で跳ね起きると、両手に持ち替えた拳銃を手に壁の破穴に飛び込もうとする。

その首筋に、武藤が手刀を打ち込んだ。

「あ　！？」

一瞬にして意識を刈り取られ、由加里はその場に崩れ落ちる。

「のぼせやがって、このどアホう」

気絶した由加里の身体をひょいと担ぎ上げた武藤の視界の片隅で、隣室からRPGを構える敵兵の姿を捉える。

武藤は窓の外に向けて拳銃を撃ち込み、窓ガラスを砕き割った。

次いで由加里の身体を無造作に投げて外へと放り出すと、自分も後に続く。

「待つてくれ、置いてかないでくれ！」

先程の銃撃を受けてもまだ生き残っていた職員が、縋るような声を上げる。

その声に、武藤は一瞬だけ背後に目をやった。だが、見ただけだ。どうすることもできないものに、無駄な感傷を示す男ではない。武藤は悲鳴のような職員達の声を無視して、窓から外へ身を踊らせる。

直後に交通課オフィスに撃ち込まれたRPGの弾頭が起爆し、爆風が窓から吹き溢れた。

「ボス！ グレイホーク 灰色鷹が外に」

「構わん、放つておけ」城島は興味をなくしたかのように言い放った。

「これ以上の長居は無用だ。こちらも撤収する」

16 (前書き)

第一部最終回です。

ちようど東北大地震直後とあつて、表現として厳しいかなとも思いましたが、あえてこのまま掲載します。

テロをテーマにする以上、生温いお話は書けませんから致し方ない面もあるのですが、ご不快に感じられる方がいらっしやいましたらすみません。

それでも、世界の過酷さとその彼方にある何事かと向き合うための物語として、このまま書き続けてゆきたいと思っております。

さて、とはいえ続きの原稿がまだまだ溜まってませんので、しばらくお休みをいただきます。

その代り、『棺のクロエ』シリーズの外伝作品の連載を開始いたしますので、そちらをお楽しみに。

では、ごゆるりとお楽しみください。

「由加里、ちよつと由加里！ 起きなさい」

「……ふえ？ 先輩？」

肩を揺すられて、由加里は目を覚ました。

「つたく、人に運転させといて、自分は助手席で居眠り？ いいご身分ね」

いつものミニパトの車内。いつもの町並みを通る、いつもの巡回ルート。ぽかぽか陽気と香織の安全運転のおかげで、ついつい舟を漕いでしまったらしい。

「えと……すみません」

「まあ、無理もないけどね。昨夜も遅くまで残って、調べ物してたんでしょ」

「何で知ってるんですか？」

びっくりする由加里に、香織はにやりと笑って言った。

「向島署にその人在りと謳うたわれたこの香織さんを、舐めてもらっちゃ困るわね。そーいう情報は、何かしらあたしの耳に入ってくるようになってるのよ」

「はあ……」

要するに夜勤組の誰かから話を聞いたということか、と由加里は解釈した。

「で、何を調べてたの？」

「この辺りの道路事情とか、事故の記録とか……」

「着任したときに、現任教育（OJT）で一通り目を通してたんじやないの？」

「あの時は何が何だか判らないまま、とりあえず眺めてただけでしたから。毎日パトロールで見聞きしていることを基にして、読み直してみたら、夢中になっちゃって」

「そう」香織はどこか嬉しげに苦笑した。

「ウチの署に来たばかりの時は、『この娘、本当に勤まるのかしら』
って思ったけど、案外しつかりしてきたわね」

「……それって、褒められてるんですか？」

「うーん、パトロール中に助手席で居眠りかます後輩を、あたしの
立場からは、そうおいそれと褒めてあげるわけにはいかないわねえ」
「す、すみません」

顔を真っ赤にして由加里が頭を下げる。

「ま、勉強熱心なのはいいけど、体調管理だつて立派な仕事よ。

いい？ あたし達の本当の職場は署内のデスクの上なんかじゃな
くて、この街の中。体調が悪いからと言って、困っている人を見過
ごしたり、駆け付けることができれば意味がないわ それが

『お巡りさん』のお仕事なんだから」

「はい」

肯く由加里に、香織は瞳を細めた。

「じゃあ、ここから先はひとりで大丈夫ね」

「え？」

気が付くと、香織が車外に立っていた。いつの間にか、ハンドル
も自分が握っている。

「あれ？先輩？何で？」

「ごめんね。あたしがついていてあげられるのはここまでなの」

「先輩！ 待つてください、あたしはまだ ！？」

だが、香織を車外に残し、車が勝手に動き出す。

「やだ、ちよつと！ 何で停まらないの？」

運転席のシートから後ろを振り返ると、香織が遠くで手を振って
いた。

「由加里ー！ あなたならきつといい『お巡りさん』になれるわ。
あたしが保証する。だから、しつかりね！」

「先輩、そんな、あたしはまだまだ全然 ！？」

「……先輩……？」

喧騒　そして、頭痛。全身もずきずきと痛む。

どこだ、ここ……？

痛む身体に無理をきかせ、上半身を起こす。周囲に視線を巡らせると、辺りは怒号が飛び交い、制服や私服、それと戦闘服姿の男女が慌ただしく出入している。折り畳みのデスクが並べられ、パソコンや通信機材が積み上げられていた。上を見ると金属パイプの骨組みに布地の天井　テント？

どうやらテント組みの急拵えの指揮所の片隅にベッドを設け、そこに寝かされていたらしい。

だが、目を覚ました由加里を、誰も気にしている様子はない。

それどころではないのだろうが、それよりも外で何かが起こっていて、テント内の人間もそちらに気がとられているようだった。

何なの……？

鈍い頭で意識をそちらに向けると、聞き慣れた怒鳴り声が聞こえてきた。

「……またか……」

どうせまた、本庁の人間と揉めてるのだろう。どこに行ってもそうだな。何でこんな面倒な人が上司なんだろう。

由加里は即席のベッドから足を下ろし、ふらつきながらテントの外へ出る。

ああ、もう。頭が痛い。なんか気分悪いし。吐きそう。

テントの外に出ると、エンジン付きの投光器が何台も並べられ、轟音とともに向島署の正面玄関を真昼のように照らし出している。上空には低い高度をへりが飛んでいるようで、その騒音もバカにならない。またご近所からクレームがくるな、とぼんやりと思った。

辺りは警察関係者でこった返していたが、武藤の居場所はすぐに判った。だいたい揉めてる辺りの中心を探せばいいのだから、その点では判りやすい。

「何を考えてやがんだ！」

「まだ生き残りの職員がいるんだから、当たり前だろう！」

本庁のキャリアらしきスーツ姿の男と、また胸倉を掴み合いかねない距離で怒鳴り合っている。

「連中はもうとつくに引き上げてるんだ。今更、SATなんざ送り込んで意味はねえ！」

「だから、それを確認するための突入だと言ってる」キャリアはそう告げると、無線機に向かって命じた。

「構わん。突入しろ」

「勝手にしろ、バカが！」

「了解。これより署内に突入します」

SAT部隊を率いる分隊長が、喉元の喉頭スロートマイクを押さえながら復唱する。

向島署正面玄関そばの壁に張り付いていた分隊長は、後続の部下にハンドサインでその旨を伝えると、タイミングを図って一気に署内へと突入する。

明かりの消えた正面エトランスに、SAT隊員たちの持つMP7 A1の銃身アンダーバレル下に装着したハイパワーライトのビームが乱舞する。だが、破壊され尽くした署内に動く気配はない。職員は悉く殺戮ころされ、武藤の言うように、犯人たちも現場から離脱済みなのだろう。

だが、それでも慎重に周囲の検索を行う内に、フロアの真ん中辺りに何かがつず高く積み上げられているのを発見した。

「何だ……？」

ライトのビームを集中させる。何やらジェンガの塔のように細長いブロックの組み合わせで小山が作られていて、その頂上付近にLEDと思しき緑色の光が灯っている。

と、その光が赤色に変わり、点滅を開始する。

「……まさか……！？」

点滅が急速に加速する。分隊長は間に合わない知りつつ、部隊

に命じた。

「総員退避！ 爆弾が仕掛けられ！」

すべてを言い終えるより早く、フロアに仕掛けられた一〇〇キロのC4爆薬が起爆した。

後に行われた現場検証によって判ったことだが、城島達犯人グループは占拠していた向島署一階各所に大量のC4爆薬を持ち込んでおり、その起爆装置にミリ波レーダーを使用した動態感知センサーを接続していた。動態感知センサー自体は、自動車の車庫入れ支援や衝突防止システムなどで使用されている市販の物を流用しており、さほど特殊な物ではない。

また、設置された爆弾も正面玄関前のフロアだけでなく、署庁舎の構造上、建物全体を支える梁はりや柱を狙い撃ちにして設置されていた。これらがフロアの爆弾と連動してすべて起爆し、向島署庁舎ビルの力学的バランスを一気に爆砕した。

建物一階の壁や窓から閃光と爆風が吹き溢れ、粉碎された壁面のコンクリートが大量の飛礫となって周囲にぶち撒けられる。

飛礫は指揮所周辺の車輛やスタッフにも容赦なく叩き込まれ、建物近くにいた人間から大勢の死傷者が発生した。

「一体、何が……？」

周囲の惨状に呆然としながら、由加里が身体を起こす。飛礫によって撃ち倒された人々が、大勢路上で呻いている。車輛も窓ガラスが砕かれたり、ボディを穴だらけにされ、爆風でひっくり返されたパトカーまであった。

「酷い……」

絶句する由加里の耳に、低い地鳴りのような音が聴こえてくる。

向島署の建物の方向　まさか……？

「やだ、そんな、先輩も、皆もまだ中に！」

次の瞬間、自重を支えきれなくなった建物の構造材が、内側に向

かつて雪崩落ちてゆく。

由加里の悲痛な叫びを呑み込んで、残存する職員とともに向島署は崩壊した。

向島署から離脱した城島等犯人グループを乗せた黒塗りのバス二台は、北上して明治通りに乗り入れ、隅田川に掛かる白鬚橋しひげを越えて都心方向へ向かおうとしていた。

『向島署に仕掛けた爆弾の起爆信号を受信。無人偵察機（UAV）からの映像で、署庁舎ビルの崩壊も確認しました』

「判った。こちらで後始末を済ませる」

城島は短く告げて携帯電話を切った。荒川区に向けて走るバスの後方からは、サイレンの音も高らかに、パトカーの集団が猛然と追跡してくる。

「白鬚橋を通過しました」

「よし、やれ」

その指示を受けて、兵士のひとりが携帯電話の番号ボタンを押す。全長一六九メートル、幅二メートルの橋の両端で、路面をミシン目のように射抜いて、一斉に炎の柱が吹き上がった。橋の両端に位置する橋桁の下には、C4爆薬を詰め込んだ円筒形のドラム缶に浅い皿のような金属板を載せた爆弾がずらりと並べられていた。それらが起爆すると爆薬から発生した衝撃波が金属板に集束し、それによって金属板が弾丸状に形成される。それが秒速三千メートルも
の速度で分厚い橋桁を貫いたのだ。

対戦車ミサイルの弾頭などにも利用される、いわゆる自己鍛造弾たんぞう（SFF）と呼ばれる現象である。爆薬の破壊エネルギーに指向性を持たせ、有効に活用する手段のひとつだ。

これにより、白鬚橋を構成する三つの橋桁の内、橋の両端に当たる橋桁が地上と切り離され、自重により跳ね上がる。同時に両端の橋桁が橋脚から外れたことによって、中央の橋桁も支えを失って隅

田川に滑り落ちる。

パトカーの集団十数台を始め、たまたま橋の上を通過中の民間車輜をも巻き込んで、昭和六年開通の歴史ある白鬚橋は冬の隅田川に崩落した。

「白鬚橋の破壊を確認。追跡はすべて振り切りました」

部下の報告に「そうか」とだけ答えると、城島は静かに喉を鳴らし始めた。

それはやがて高らかな嗤い声となって、夜の東京に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9222m/>

邀撃捜査線 カサンドラ・パラドクス

2011年3月13日00時10分発行